住宅金融公庫融資住宅

枠組壁工法住宅工事共通仕様書

昭和59年度版

<table>
<thead>
<tr>
<th>建築主</th>
<th>住所</th>
<th>氏名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(印)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>施工業者</th>
<th>住所</th>
<th>氏名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(印)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

監修  住宅金融公庫建設指導部
目次

仕様書の使い方 ........................................ 2
Ⅰ 工事概要 ........................................... 3
Ⅱ 仕様書 ........................................... 7
仕様書の使い方

仕様書は、設計図に表わせない事項を補足するものとして必要で、設計図とともに工事施工の基準となるものです。

この仕様書は、枠組壁工法の工事仕様書として、材料・寸法・構造・住宅性能など種々の場合を考慮して、共通に作成されていますから、ご自分の工事の内容に合わせて下記の点にご注意のうえ添削して使用してください。なお、住宅金融公庫融資住宅等建設基準及び枠組壁工法についての建設大臣告示第56号（昭和57年1月18日付け）に適合したものとしてください。

(1) 本仕様書と異なる場合には、当該箇所を訂正するか、別に仕様書を添付してください。

(2) 北海道地域で住宅を建設される場合は、北海道防寒住宅建設等促進法の技術基準に適合したものとしてください。

(3) 本仕様書は、簡易耐火構造用となっていますので、II.4.1.3【防腐・防蟻措置】及びII.9【内外装工事（簡易耐火構造の住宅）】の工事を行わないと、融資区分は木造扱いとなります。

(4) 融資区分が木造扱いとなる場合の連続建の住戸間の界壁は、II.4.5.13（住戸間の界壁）のイの仕様としてください。

(5) 本仕様書に記載する図は、当該本文の参考図として利用してください。
I 工事概要
（設計図面に記載した場合は、ここに記入する必要はありません）

1. 工事内容
(1) 構造：(簡易耐火構造、その他______________)
(2) 階数：(平家建、2階建、3階建)
(3) 床面積：1階____㎡、2階____㎡、3階____㎡、計____㎡
(4) 戸建形式：(1戸建、連続建、重ね建、共同建)
(5) 附属設備工事：(電気、給排水、衛生、ガス、その他______________)
(6) 別途工事：________________________________________

2. 外部仕上表

<table>
<thead>
<tr>
<th>各部名称</th>
<th>仕上</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>基礎</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>外壁</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>屋根</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>軒裏</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ひさし</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>とい</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>塗装 木部</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>塗装 鉄部</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>室名</td>
<td>床</td>
<td>幅</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----</td>
<td>----</td>
</tr>
<tr>
<td>玄関</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>居</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>住</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>室</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>押入</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>台所</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>便所</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>洗面・脱衣室</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浴室</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>禄側</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>廊下</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>階段</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注)
1. 塗装仕上はそれぞれの欄に記入すること。
2. 備考欄には設計に含まれているもの（造り付け棚、下駄箱類、天袋、なげし、カーテンレール、台所流し、コンロ台、浴槽、大小便器、手洗器、洗面器など）を記入すること。
<table>
<thead>
<tr>
<th>壁</th>
<th>天</th>
<th>井</th>
<th>備</th>
<th>考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
4. 附帯設備表

<table>
<thead>
<tr>
<th>部</th>
<th>名</th>
<th>電灯</th>
<th>スイッチ</th>
<th>コンセント</th>
<th>水栓</th>
<th>ガス栓</th>
<th>電話用配管</th>
<th>電話機</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>玄関</td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>倍</td>
<td>所</td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>洗面・脱衣室</td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浴室</td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>灯</td>
<td>個</td>
<td>個</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注） 電灯欄は、直付、コード釘り、ブラケットなどそれぞれ記入のこと。
II 仕様書目次

1. 一般事項.................................................. 8
2. 建設工事.................................................. 9
3. 土工事及び基礎工事..................................... 9
4. 軍体工事.................................................. 17
5. 屋根工事.................................................. 78
6. 給排水設備工事・ガス設備工事.............................. 84
7. 電気設備工事.............................................. 86
8. 断熱工事.................................................. 87
9. 内外装工事（簡易耐火構造の住宅）........................ 102
10. 内外装工事（左官工事等）................................ 104
11. 内外装工事（せっこうボード張り等）.......................... 114
12. 内外装工事（その他の仕上工事）.......................... 120
13. 建具製作工事............................................ 123
14. 塗装工事.................................................. 142
15. その他の工事............................................ 144
1. 一般事項

1.1 工事範囲
工事範囲は、本仕様書及び図面の示す範囲とし、特記のないかぎり電気工事については引込口までの工事、給水・ガス工事については木管接続までの工事、排水工事については流処理までの工事とする。

1.2 疑義
図面と仕様書との記載内容が相違する場合、明記のない場合又は疑義の生じた場合は、建築主又は建築主の指定した監督者（以下「監督者」という。）と協議する。

1.3 軽微な設計変更
現場のおさまり、取合せその他の関係で材料の取付位置又は取付工法を多少かえるなどの軽微な変更は、建築主又は監督者の指示により行う。

1.4 材料等
1.躯体工事に用いる材料は建築基準法及びそれにに基づく告示等による。
2.各工事に使用する材料等で日本工業規格（JIS）又は日本農林規格（JAS）の規定されている品目については、すべてその規格に適合するものとし、できるだけJISマーク又はJASマーク表示品を使用する。また、農林水産大臣認証木質建材（AQ）として認証の対象とされている品目についてはその木質建材とし、できるだけAQマーク表示品を使用する。
3.各工事に使用する材料等について品質又は品等の明記のないものはそれぞれ中等品とする。
4.建築部品は、原則として、建築大臣認定の優良住宅部品（BL部品）又は、日本工業規格（JIS）に適合するもので、BLマーク又はJISマーク表示品又はこれと同等のものを使用する。
5.建築部品、仕上材の材質、色柄などで建築主又は監督者と打合せを要するものは見本を提出し、十分打合せる。

1.5 別契約の関係工事
別契約の関係工事については、関係者は相互に協議のうえ、工事完成に支障のないように処理する。ただし、監督者がいる場合はその指示による。

1.6 生
工事中に汚染損傷のおそれのある材料及び箇所は、適当な方法で養生する。

1.7 注意事項
1.工事の施工に必要な諸届・諸手続き等、請負者が処理すべき事項はすみやかに処理する。
2.工事現場の管理は関係法規に従い、危険防止、災害防止に努め、特に火災にはじゅうぶん注意する。
3.工事現場はつねに整理し、清潔を保ち、工事完了に際しては建物内外を清掃する。
4.工程表及び工事チェックリストを作成し各段階ごとに検査を行う。
2. 仮設工事

2.1 なわ張り
建築主又は監督者の立会いのもとに、敷地境界など敷地の状況を確認の上、図面に基づき建物位置のなわ張りを行う。

2.2 ベンチマーク
木杭、コンクリート杭などを用いて移動しないよう設置し、その周囲を養生する。
ただし、移動の恐れのない固定物がある場合は、これを代用することができる。なお、監督者がいる場合はその検査を受ける。

2.3 水盛りやりかた
やりかたは、適当な材料を用い、建物の隅角部その他の要所に正確に設け、建物位置、水平の基準その他の確認を行う。なお、監督者がいる場合は、その検査を受ける。

2.4 足場その他の
足場、仮組いなどは、関係法令等に従い適切な材料、構造などのものをする。

3. 土工事及び基礎工事

3.1 地盤
敷地地盤の状態については、工事計画上支障のないよう地盤調査、近隣の地盤に関する情報等を確認の上、地盤に関する検討する。

3.2 根切り
やりかたに従い、幅・深さなど正確に根切りし、必要ある場合はのりをつけ又は土留めを設ける。

3.3 割栗地業
割栗地業は次による。ただし、地盤が比較的不良な場合は砕石による地業とすることがある。また地盤が特に良好ではこれらを省略できる。

3.3.1 材料
1. 割栗石は硬質なものを使う。なお、割栗石の代用として玉石を使用する場合も同様とする。
2. 目つぶし砂利は切り込み砂利又は切り込み砕石とする。

3.3.2 工法
1. 割栗石は、原則として一層小端立てとし、すき間のないように入り込み、目つぶし砂利を充てんする。
2. 締め固めは、ランマー3回突き上げ、ソイルコンパクタ－2回締め以上又は振動ローラー締めとし、凹凸部は目つぶし砂利で上ならしをする。

3.4 くい打ち地業
くい打ち地業を必要とする場合は特記による。

3.5 平家建又は2階建の基礎

3.5.1 一般事項
1. 基礎は、1階の外周部耐力壁線及び内部耐力壁線の直下に設ける。
2. 基礎の構造は、布基礎、腰高布基礎、地下室の基礎壁又は土間コンクリート床スラブと一体の布基礎とする。ただし、1階の内部耐力壁直下の基礎は、床梁に代えることができる。

3.5.2 布基礎
1. 布基礎の構造は、次のいずれかによる。
   イ．地盤が良好（地耐力5t/㎡以上）で、耐力壁の壁倍率を4以下に設計する場合は、無筋コンクリート布基礎とする。（3.5-1図参照）
   ロ．地盤が良好で、壁倍率を4を超えて設計する場合、又は盛土等で地耐力がじゅうぶんでない（地耐力3t/㎡以上、5t/㎡未満）場合に
は、鉄筋コンクリート造形基礎として、標準の配筋は、上下主筋φ13mm又はD13、肋筋φ9mm又はD10＠300mmとする。（3.5－2図参照）

ヘ．地盤が軟弱（地耐力3t／㎡未満）である場合には、別途検討する。

3.5－1図 基礎詳細図

(A) 一般地2階建

(B) 多雪区域2階建

3.5－2図 鉄筋コンクリート造形基礎

(A) 標準配筋図（段）

(B) 换気口壁の補強

（注）横筋のうち上下主筋は13φ、その他の横筋及び緑筋は9φとし筋鉄の間隔は300mmとすることができる標準とする。ただし換気口壁においては、13φの横筋及び9φの斜め筋により補強する。

2．基底は、地盤面下120mm以上とし、設計地耐力の地盤まで掘れ下げる

3．地盤面から基底の深さが300mm以上とする。

4．基底の幅は、一般地及び多雪区域平家建の場合は120mm以上、多雪区域2階建の場合は150mm以上で基台の幅以上とする。

5．多雪区域及び一般地2階建の場合には、基底の下部に基礎を設け、その厚さ及び張り出しは、それぞれ基底の幅と同じとする。

3.5.3 膨 膨 基 塊

1．便所、浴室用及び等で基底の上にコンクリートブロックを積み上げた隔壁（膨膨基塚）とする場合は次のように、鉄筋コンクリート造とする場合は特記による。（3.5－3図参照）

イ．ブロックの品質はJIS A5406（空洞コンクリートブロック）に適合するものの又はこれと同等以上のものとする、特記がなければA種とする。

ロ．ブロックの厚さは、基底の幅120mm以上の場合は、100mm以上、

布基礎の幅150mm以上の場合は120mm以上とする。

ハ．目標及び空洞の売上用のモルタルのセメント、砂の調合は1:3
3.5.4 地下室の基礎壁

3.5.4.1 一 般 事 項
1. 地下室を設ける場合、その壁は基礎と一体の鉄筋コンクリート造（以下「基礎壁」という。）とする。
   ただし、地上階数2以下の場合は直接土に接する部分及び地盤面上30cm以内の外周の部分以外の壁は、木造の壁とすることができる。
2. 基礎壁には、コールタール塗布又は樹脂防水等の防水措置を行うものとする。
3. 基礎壁の周囲1m以内は、水はけよく地ならしするとともに、底盤に沿って排水パイプを廻し、50mm以上の砂利を排水パイプの周囲300mm内外につめる。

3.5.4.2 基 础 壁
基礎壁の構造は3.5—4図(A)、(B)によることとし、外周部のすべてに配置する。ただし設計条件が異なる場合は、別途構造計算により安全を確かめる。

3.5.4.3 基礎壁の一部を木造の壁とする場合
1. 3.5.4.1（地下室の基礎壁の一般事項）の1. ただし書きにより一部を木造の壁とする場合の基礎壁の構造は3.5—5図(A)、(B)によることとし、外周部のすべてに配置する。ただし、設計条件が異なる場合は、別途構造計算により安全を確かめる。
3.5-4 図 基礎壁

(A) 上部2階建（3階建を含む）

設計条件
1. 表面温度 ≤ 300度以下
2. 疲労度
3. 地面温度
4. 地形
5. 鉄筋 SD300
6. 土の単位圧縮量 y = 1.28/H
7. 土圧係数 Ka = 0.5
8. 滑りに対しては対竪壁で相殺されるとする。
9. 地下室の面積は制限しない。

3.5-5 図 一部を木造の壁とする場合の基礎壁

(A) 上部2階建（小屋裏屋を含まない）

設計条件
3.5-4 図（基礎壁）に同じ
2. 木造の壁の構成等は次による。（3.5—6図（A）、（B）参照）

イ. 土台（下枠兼用）、たて枠、上枠及び頭つなぎには、すべて寸法型式206以外の製材又は集成材を用いる。なおただし枠の間隔は、500mm以内とする。

ロ. アンカーボルトは、3.5.7（1階建又は2階建のアンカーボルト）の1及び2の項による他、埋込み位置は、住宅の隅角部附近、土台の維手附近、開口部の両端部附近とし、その他の部分は間隔1,370mm以内とする。

ハ. 隅角部及び開口部の両端部は土台とたて枠とをかす金物（C・P・L又はC・P・T）で緊結する。

3. 木造の壁に開口部を設ける場合は次による。

イ. 隅角部から900mm以内は、次項5による構造用合板を張った壁とする。

ロ. たて枠、土台、上枠及び頭つなぎは切断しない。
3.5.5 土間コンクリート床スラブ

1階床組を行わずに、1階全面を土間コンクリート床スラブで形成する場合は土間コンクリート床スラブ面の地盤面からの高さは30cm以上とし、次による。ただし、温熱地等で外周部の基礎部の断熱材を省略する場合又は基礎を外断熱とする場合は基礎を床スラブと一体化に形成することができる。3.5-7、8図参照

イ. 地盤面より厚さ2層とし、2層にわたってそれぞれ十分絶縁を施す。なお、厚さに使用する土は、有機性又は活性粘土及びシルトの類以外のものとする。

ロ. 厚さの上に目つぶし砂利を厚さ50mm以上敷きつめ、十分絶縁を固める。その上に防湿フィルム（厚0.1mm以上）を全面に敷く。

ハ. 防湿フィルムの上には外周部の基礎に厚さ25mm以上、幅450mm以上の板状断熱材を敷く。ただし、温熱地等においては断熱材を省略できる。

ニ. 土間コンクリート床スラブは、厚さ120mm以上とし、その中央部にワイヤメッシュ（φ4mm以上、間隔150mm以下）を配する。

ホ. 温熱のそろっている地域については、布基礎の外周（土に接する部分を含む）に厚さ50mm以上の耐久性のある板状断熱材（フォー
3.5.6 コンクリートの調合、打込み

ムポリスチレン、押出発泡ポリスチレン等を張付ける。

布基礎その他のコンクリートの調合及び強度は、次のいずれかによる。
打込みは、空げきのないよう突き固める。

イ．レディミックスコンクリートの場合の設計基準強度（Fc）は、135
kg/cm²、スランプ18cmとする。ただし、ポルトランドセメントを用
いる場合の呼び強度は設計基準強度（Fc）に、下表の気温によるコ
ンクリートの強度補正値（T）を加えた値（Fc+T）とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>気温補正値 T (kg/cm²)</th>
<th>15℃以上</th>
<th>9℃以上</th>
<th>5℃以上</th>
<th>3℃以上</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10</td>
<td>30</td>
<td>45</td>
<td>60</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

ロ．現場練りコンクリートの場合のセメント、砂、砂利の調合、容積
比にして、無筋コンクリートにあっては、1：3：6、鉄筋コンクリ
ートにあっては1：2：4を標準とする。練り方は、原則として
機械練りとする。手練りの場合には、から練り・水練りともじゅう
ぶん練り合わせる。

3.5.7 アンカーボルト

1. アンカーボルトの品質は、販売法人日本住宅・木材技術センター（以下
「販売センター」という。）の定める規格によるCマーク表示品又はこ
れと同等以上のものとする。ただしCマーク表示品以外のものを使用す
る場合はその長さを350mm以上、直径を12mm以上とする。

2. アンカーボルトの埋込み長さは250mm以上とする。

3. アンカーボルトの埋込み位置は次による。

イ．住宅の隅角部附近、土台の継手附近とし、その他の部分は間隔2.0
m以内。

ロ．1階床を土間コンクリート床スラブで構成する場合で、床に達する
開口部（以下「開口部」という。）を設けた場合は、イの他死工
き受けがとりつくって枠の150mm内外の部分。

3.5.8 床下換気

1. 外周の布基礎には間隔4m以内に有効換気面積300cm²以上の床下換気
口を設ける。床下換気口にはすずめ等の侵入を防ぐため、スクリーンを
堅固にとりつける。なお、スクリーンは鋳鉄製に換えることとする。

2. 基内の布基礎には、床下の換気を確保するために適切な位置に床下換気
口を設ける。

3.5.9 配管スリーブ

基礎貫通の配管スリーブは、基礎のひび割れや雨水が流入しない位置に設
ける。

3.5.10 堆積

1. コンクリート打込み終了後は直射日光、寒気、風雨などをさけるため、
シートなどにより養生する。

2. 普通ポルトランドセメントを用いる場合の堆積の存置期間は、気温15℃
以上の場合は3日間以上、5℃以上15℃未満の場合は5日間以上とす
る。

3. 寒冷期に施工する場合は、気温に応じて適切な養生を行う。なお監督者
がいる場合は、その指示を受ける。
3.5.11 天端ならし
やりかたにならない隆起を出し、布基礎をあらかじめ水湿し、セメント、砂の調合が1:3のモルタルを水平に塗りつける。

3.5.12 床下防湿
床下防湿を行う場合は次のいずれかによる。
イ. 床下地盤全面に厚さ60㎜以上のコンクリートを打設する。なお、この場合の床下地盤は地盤面より盛土し、十分突き固める。
ロ. 床下地盤全面に厚さ0.1㎜以上の防湿フィルムを敷きつめる。
なお、防湿フィルムの重ね幅は150㎜以上とし、重ね部分、布基礎及び束石当たりは、乾燥した砂、又は砂利抑えとする。

3.5.13 埋戻し及び地ならし
1. 埋戻しは横切り土のうち良土を利用し、厚さ300㎜内外毎にランマーなどで突き固める。
2. 建物の周囲1mまでの部分は水をはけをよくするように地ならしをする。

3.6 3階建の基礎
3.6.1 一般事項
地階を除く階数が3の住宅（以下「3階建」という。）の基礎は、この項による。ただし、この項に掲げる事項に該当しないものについては3.5（平家建又は2階建の基礎）の各項による。

3.6.2 布基礎
1. 布基礎の構造は鉄筋コンクリート造布基礎とし、配筋は3.5.2（布基礎）の1のロと同様とする。（3.5—2図参照）
2. 布基礎の幅は150㎜以上とし、土台の幅以上とする。
3. 布基礎の下部には厚さ150㎜以上、幅450㎜以上の底盤を設ける。

3.6.3 アンカーポルト
アンカーポルトの埋込み位置は、住宅の隅角部附近、土台の横手附近、1階部分に組出し窓を設けた場合のまくぎ受け材がとりつくて枠の下部150㎜内外の部分とし、その他の部分は間隔2.0m以内とする。ただし、1階を床柱組で構成する場合は、住宅の隅角部附近、土台の横手附近とし、その他の部分は間隔1.5m以内とすることができる。
4. 軸体工事

4.1 一般事項
4.1.1 材料
4.1.1.1 構造材及び筋かい等

1. 軸体工事に用いる構造材料は、建築基準法及びそれに基づく告示等による。4.1-1表参照

<table>
<thead>
<tr>
<th>建造物材の種類</th>
<th>構造用材の規格</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>(1)</td>
<td>甲種材の特級、1級、2級</td>
</tr>
<tr>
<td>(2)</td>
<td>甲種枠材の特級、1級、2級、3級</td>
</tr>
<tr>
<td>(3)</td>
<td>甲種枠材の特級、1級、2級、3級</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 筋かい又は耐力壁の下張りに用いる材料は、製材のJASのうち針葉樹の製材の板類の特等又は1等に適合するものとする。
3. 構造材は、含水率15%以下の乾燥材又は含水率25%以下の未乾燥材とする。構造材以外の木材であっても、十分に乾燥したものを用いる。

4.1.1.2 各種ボード類

1. 構造用合板の品質は、構造用合板のJASに適合するものとする。なお、外壁下地に用いる場合は特等とする。
2. パーティクルボードの品質は、JIS A5908のうち200P若しくは150P又は200M若しくは150Mに適合するものとする。ただし、外壁下地に用いる場合はPタイプとする。
3. せっこうボードの品質は、JIS A6901に適合するものとする。
4. 耐力壁に使用するシージングボードの品質は、JIS A5905のうちシージングインシュレーションボードに関する部分に適合するものとする。
5. 耐力壁に使用するハードボードの品質は、JIS A5907のうち350又は450に適合するものとする。
6. 耐力壁に使用する硬質木片セメント板の品質は、JIS A5417のうち硬質木片セメント板に関する部分に適合するものとする。
7. 耐力壁に使用する石綿スレートフレキシブル板の品質は、JIS A5403のうちフレキシブル板に関する部分に適合するものとする。
8. 耐力壁に使用する石綿セメントけい酸カルシウム板の品質は、JIS A5418のうち1.0-CKに適合するものとする。
9. 耐力壁に使用する石綿セメントパラライト板の品質は、JIS A5413のうち0.8-P又は0.8-P.Aに適合するものとする。
10. 耐力壁に使用するバルブセメント板の品質は、JIS A5414に適合するものとする。
11. 耐力壁に使用する炭酸マグネシウム板の品質は、JIS A6701のうち0.8に適合するものとする。
12. 耐力壁に使用するラスシートの品質は、JIS A5524のLS4に適合し、メ
タルラスの厚さは0.6mm以上のものとする。

13. その他の構造用材を用いる場合は、建設大臣が認めたものとする。

### 4.1.1.3 合板ボックススビーム

合板ボックススビームを使用する場合は、住・コンセントの定める規格による、Wマーク表示品とする。(4.1—2表、3表、1図参照)

(注) Wマーク表示の合板ボックススビームは、枠組工法技術基準の告示に基づく建設計画の認定を受けたものです。

### 4.1—2表 床梁又は屋根梁用合板

<table>
<thead>
<tr>
<th>タイプ</th>
<th>断面形状</th>
<th>表示形式</th>
<th>梁せん B</th>
<th>幅 B</th>
<th>フランジ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A 1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>300</td>
<td>110</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>A 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td>450</td>
<td>122</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>A 3</td>
<td></td>
<td></td>
<td>600</td>
<td>122</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>A 4</td>
<td></td>
<td></td>
<td>300</td>
<td>122</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>A 5</td>
<td></td>
<td></td>
<td>450</td>
<td>122</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>A 6</td>
<td></td>
<td></td>
<td>600</td>
<td>122</td>
<td>18</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 4.1—3表 まくぎ用合板ボックススビーム種類一览表

<table>
<thead>
<tr>
<th>タイプ</th>
<th>断面形状</th>
<th>表示形式</th>
<th>梁せん B</th>
<th>幅 B</th>
<th>フランジ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>MA1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>515</td>
<td>90</td>
<td>66×38</td>
</tr>
<tr>
<td>MA2</td>
<td></td>
<td></td>
<td>515</td>
<td>90</td>
<td>54×38</td>
</tr>
<tr>
<td>MB1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>515</td>
<td>90</td>
<td>66×89</td>
</tr>
<tr>
<td>MB2</td>
<td></td>
<td></td>
<td>515</td>
<td>90</td>
<td>54×89</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 4.1—1図 Wマークの例

(注)

BB.No.10—1
10→承認製造者番号
1→承認製造工場番号

### 4.1.1.4 釘

1. 構造用枠組材又は補強金物を取付ける釘の品質は JIS A5551（太め鉄丸くぎ）、JIS A5552（せっこうボルト用くぎ）、JIS A5553（シーニングインシュレーションヴァイパーボード用くぎ）、又は JIS A5554（ステンレス鋼くぎ）に適合するものとし、その種類と寸法は 4.1—4表による。
4.1—4表 釘の種類及び寸法
（単位：mm）

<table>
<thead>
<tr>
<th>釘の種類</th>
<th>長さ</th>
<th>鎖部径</th>
<th>頭部径</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>CN 50</td>
<td>50.8</td>
<td>2.87</td>
<td>6.76</td>
<td>JIS A 5551</td>
</tr>
<tr>
<td>CN 65</td>
<td>63.5</td>
<td>3.33</td>
<td>7.14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>CN 75</td>
<td>76.2</td>
<td>3.76</td>
<td>7.92</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>CN 90</td>
<td>88.9</td>
<td>4.11</td>
<td>8.74</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>GN 40</td>
<td>38.1</td>
<td>2.34</td>
<td>7.54</td>
<td>JIS A 5552</td>
</tr>
<tr>
<td>SFN 45</td>
<td>45.0</td>
<td>2.45</td>
<td>5.60</td>
<td>JIS A 5554</td>
</tr>
<tr>
<td>SN 40</td>
<td>38.1</td>
<td>3.05</td>
<td>11.13</td>
<td>JIS A 5553</td>
</tr>
<tr>
<td>ZN 40</td>
<td>38.1</td>
<td>3.33</td>
<td>7.14</td>
<td>住・木センターの規格によるものでJIS H8610（電気鍍鉻めっき）に規定する1種4級MFZnW以上の電気鍍鉻めっきを施したもの又はJIS H8641（溶融鍍鉻めっき）に規定する1種AHDZA以上の溶融鍍鉻めっきを施したものとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>ZN 65</td>
<td>63.5</td>
<td>3.33</td>
<td>7.14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ZN 90</td>
<td>88.9</td>
<td>4.11</td>
<td>8.74</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 釘打ちは、木口打ち（E）、斜め打ち（T）、平打ち（F）とし、斜め打ちにはCN65又はCN75を、呼び寸法40mm厚の材料の平打ち又は木口打ちにはCN90を、板材又は他の呼び寸法30mm厚の材料の平打ちにはCN65を用いることを原則とする。（4.1—2図参照）

4.1—2図 釘の打ち方と表示

3. G N40又はS F N45は耐力値となる石こうボード張り版等、SN40は耐力値となるシーキングボード張り版、ZN釘は金物の接合に用いる。

4. 釘について特記がない場合は、その釘の長さは打ち付ける板厚の2.5倍以上とする。

4.1.1.5 接合及び補強金物

接合及び補強金物は、住・木センターの定める規格により、金物にCマーク表示のあるもの、又はこれと同等以上のものとする。なお、金物を接合する釘はZN40、ZN65又はZN90を使用する。（4.1—5表、3図参照）

4.1—3図 Cマークの例

(注)
No.25.6
25→承認製造者番号
6→承認製造工場番号
<table>
<thead>
<tr>
<th>種類</th>
<th>記号</th>
<th>形状・寸法（単位：mm）</th>
<th>使用くぎ及びボルトの種類と本数</th>
<th>用途</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>柱金物</td>
<td>P B-33</td>
<td><img src="image" alt="柱金物図" /></td>
<td>ボルト</td>
<td>独立柱の支持</td>
</tr>
<tr>
<td>脚金物</td>
<td>P B-42</td>
<td><img src="image" alt="脚金物図" /></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>柱頭金物</td>
<td>PC</td>
<td><img src="image" alt="柱頭金物図" /></td>
<td>はりに 6-Z N65 柱に 6-Z N65</td>
<td>柱とはり</td>
</tr>
<tr>
<td>帯金物</td>
<td>S-45</td>
<td><img src="image" alt="帯金物図" /></td>
<td>太めくぎ 6-Z N40</td>
<td>棟太、上枠又は頭つなぎの緊結</td>
</tr>
<tr>
<td>金物</td>
<td>S-65</td>
<td><img src="image" alt="金物図" /></td>
<td>太めくぎ 16-Z N65</td>
<td>壁と床枠組の緊結 2階に両面開口を設けたときの隅柱、側壁のまぎぞ受け及びたて枠と1階壁との緊結等</td>
</tr>
<tr>
<td>物</td>
<td>S-90</td>
<td><img src="image" alt="物図" /></td>
<td>太めくぎ 12-Z N40</td>
<td>棟部たるきの相互の緊結 オーバーハング等の隅角部の緊結</td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>記号</td>
<td>形状・寸法（単位：mm）</td>
<td>使用くぎの種類と本数</td>
<td>用途</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>-----------------</td>
<td>-----------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>帯金物</td>
<td>SW-67</td>
<td><img src="Image" alt="Image" /></td>
<td>太めくぎ 26-Z N65</td>
<td>両面開口を設けたときの側壁のまぐさ受け及びたて枠と土台の緊結 3階建の1階部の掃き出し窓の両端部と土台との緊結</td>
</tr>
<tr>
<td>ストラップバンド</td>
<td>SA-65</td>
<td><img src="Image" alt="Image" /></td>
<td>太めくぎ 12-Z N65 六角ボルト M8 小型角座金 棟ナット</td>
<td>土間コンクリート床スラブで構成し両面開口を設けた場合の隅柱及びたて枠並びにまぐさ受けと土台の緊結 3階建の1階を土間コンクリート床スラブで構成し、掃き出し窓を設けた場合の両端部と土台との緊結</td>
</tr>
<tr>
<td>あおり止め金物</td>
<td>TS</td>
<td><img src="Image" alt="Image" /></td>
<td>たるきに 4-Z N40 頭つなぎに 2-Z N40 上枠に 2-Z N40</td>
<td>たるきまたはトラスと頭つなぎ、上枠の緊結</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>TW-23</td>
<td><img src="Image" alt="Image" /></td>
<td>たるきに 4-Z N40 頭つなぎに 1-Z N40 上枠に 1-Z N40 たて枠に 4-Z N40</td>
<td>たるきまたはトラスと頭つなぎ、上枠、たて枠の緊結</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>TW-30</td>
<td><img src="Image" alt="Image" /></td>
<td>たるきに 4-Z N40 頭つなぎに 1-Z N40 上枠に 1-Z N40 たて枠に 4-Z N40</td>
<td>たるきまたはトラスと頭つなぎ、上枠、たて枠の緊結</td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>記号</td>
<td>形状・寸法（単位：mm）</td>
<td>使用くぎの種類と本数</td>
<td>用途</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>---------------------</td>
<td>---------------------</td>
<td>-----</td>
</tr>
<tr>
<td>根</td>
<td>JH-S 204, 206</td>
<td>(204及び206用) 端根太に 4-Z N40 根太に 4-Z N40</td>
<td>床根太、たるぎ、屋根根太 又は天井根太の接合部に支持点がない場合の接結</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>太</td>
<td>JH 204, 206</td>
<td>(204及び206用) 端根太に 6-Z N40 根太に 4-Z N40</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>受け</td>
<td>JH 2-204, 2-206</td>
<td>(2-204及び2-206用) 端根太に 6-Z N65 根太に 4-Z N65</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>金物</td>
<td>JH 208, 210</td>
<td>(208及び210用) 端根太に 8-Z N65 根太に 6-Z N40</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>JH 212</td>
<td>(212) 端根太に 10-Z N65 根太に 6-Z N40</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>梁受け</td>
<td>BH 2-208</td>
<td>(2-208用) 受け材に 10-Z N65 梁に 6-Z N65</td>
<td>梁の接合部に支持点がない場合の梁の接結</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>金物</td>
<td>BH 2-210</td>
<td>(2-210用) 受け材に 10-Z N65 梁に 6-Z N65</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>種 類</td>
<td>記 号</td>
<td>形 状・寸 法（単位：mm）</td>
<td>使用くぎの種類と本数</td>
<td>用 途</td>
</tr>
<tr>
<td>-------</td>
<td>--------</td>
<td>------------------</td>
<td>-----------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>梁</td>
<td>BH 2-212</td>
<td>(2-212) 受け材に 12-Z N90 柱に 6-Z N65</td>
<td></td>
<td>梁の接合部に支持点がない場合の梁の縛結</td>
</tr>
<tr>
<td>受 け</td>
<td>BH 3-208</td>
<td>(3-208用) 受け材に 14-Z N90 柱に 6-Z N90</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>金</td>
<td>BH 3-210</td>
<td>(3-210用) 受け材に 14-Z N90 柱に 6-Z N90</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>物</td>
<td>BH 3-212</td>
<td>(3-212用) 受け材に 16-Z N90 柱に 6-Z N90</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>か  ど</td>
<td>CPL</td>
<td></td>
<td>太めくぎ 10-Z N65</td>
<td>土間コンクリート床スラブの隅角部及び開口部両端の補強 半地下室のたて枠の隅角部及び開口部両端の補強</td>
</tr>
<tr>
<td>金</td>
<td>CPT</td>
<td></td>
<td>太めくぎ 10-Z N65</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>記号</td>
<td>形状・寸法（単位：mm）</td>
<td>使用くぎの種類と本数</td>
<td>用途</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>---------------------</td>
<td>---------------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>パイプガード</td>
<td>P G</td>
<td><img src="%E5%9C%96%E5%83%8F" alt="PG圖像" /></td>
<td>太めくぎ 4-ZN65</td>
<td>たて枠、床根太等の配線、配管の保護</td>
</tr>
<tr>
<td>太めくぎ</td>
<td>ZN40</td>
<td><img src="%E5%9C%96%E5%83%8F" alt="ZN40圖像" /></td>
<td>金物接合用の釘</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ZN65</td>
<td><img src="%E5%9C%96%E5%83%8F" alt="ZN65圖像" /></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ZN90</td>
<td><img src="%E5%9C%96%E5%83%8F" alt="ZN90圖像" /></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>アンカーボルト</td>
<td>A-40</td>
<td><img src="%E5%9C%96%E5%83%8F" alt="A-40圖像" /></td>
<td>角座金</td>
<td>基礎と土台の緊結</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>六角ナット</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）かど金物（C P・L及びC P・T）、アンカーボルト（A-40）及びZN釘は、住・木センターの規格によるZマーク表示品とすることもできる。
4.1.2 断面寸法等

4.1.2.1 製材及び集成材の断面寸法

製材及び集成材は、表面調整をほどこしたものとし、その寸法型式と寸法は表4.1-6のとおりとする。

### 表4.1-6 製材及集成材の寸法型式及び寸法

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>寸法型式</th>
<th>乾燥材（含水率25％以下）厚さ×幅</th>
<th>乾燥材（含水率19％以下）厚さ×幅</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製材</td>
<td>104 106</td>
<td>20×90</td>
<td>18×89</td>
<td>4.1.1.1構造材及び筋かき等の2で定める材料又は、寸法型式204,206の2つ割り材とする。</td>
</tr>
<tr>
<td>203 204 206 208 210 212 404</td>
<td>40×65 40×90 40×143 40×190 40×241 40×292 90×90</td>
<td>38×64 38×89 38×140 38×184 38×235 38×286 89×89</td>
<td>梶組固工法構造用製材及び集成材の日本農林規格でいう規定寸法である。規定寸法の許容誤差はプラス、マイナス1.5mm。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>集成材</td>
<td>406 408 410 412 414 416</td>
<td>-</td>
<td>89×140 89×184 89×235 89×286 89×336 89×387</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 1. 上記寸法はJASの格付け時の寸法を表しており、現場搬入時の実寸法は乾燥の度合等で若干の誤差がある。
2. 集成材の合せ率は15％以下とする。
3. 集成材の寸法型式416を超える規格のものは、集成材のJASの品質に適合したもの使用する。

4.1.2.2 製材の定尺長さ

製材の寸法型式ごとの定尺長さは表4.1-7を基準とする。

### 表4.1-7 製材の定尺長さ

<table>
<thead>
<tr>
<th>寸法型式</th>
<th>2,440</th>
<th>3,050</th>
<th>3,660</th>
<th>4,270</th>
<th>4,880</th>
<th>5,490</th>
<th>6,100</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>204</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>206</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>208</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>210</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>212</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）定尺長さはフィートをメートル法に換算した数値でmmの単位を4捨5入。

4.1.2.3 継手及び仕口

継手及び仕口は、突付け又は側付けとし、乱に配置する。

4.1.3 防腐・防蟻措置

4.1.3.1 薬剤の品質

1. 防腐措置に使用する防腐剤の品質は、JIS K2439（クレオソート油・タールビッチ・加工塩・細管塩）に適合するクレオソート油の規格品、JIS K1550（フェノール類・無機非水物系木材防腐剤）若しくはJIS K1554（クロム銅皮素化合物系木材防腐剤）に適合する規格品又はこれと同等以上の効力を有するものとする。

2. 本部の防腐措置に併せて防蟻措置を行う場合に使用する防腐・防蟻剤は、歯日本よりある対策協会（以下「ちょあり協会」という）認定の予防腐剤又はこれと同等以上の効力を有するものとする。
3. 防蝕処理で、土塗処理を行う場合に使用する塗装処理剤は、しきりあり協会設立の土塗処理剤はこれと同等以上の効力を有するものとする。

4.1.3.2 加圧式処理材を使用する場合
1. 材材の JAS の防蝕・防蝕処理若しくは既存処理の表示のあるもの又は JIS A9108（土台用加圧式防蝕処理材）の規格に適合するものとする。
2. 加工、切断、穿孔箇所等は 4.1.3.3（楽器による現場処理とする場合）に準じて塗布あるいは吹付処理を行う。

4.1.3.3 楽器による現場処理をする場合
1. 塗布、吹付け、浸漬に使用する楽器の量は、木材及び合板の表面積 1 ㎡につき 300ml を標準とする。
2. 処理むらなどを生じることのないように 1. の楽剤量の範囲内で 2 回処理以上とする。
3. 木製の木口、仕口、組手の接合箇所、亀裂部分、コンクリート及び石などに接する部分などは特に入念な処理を行う。

4.1.3.4 防腐・防蝕措置を講ずる部分
1. 習慣的上必要部分である、土台に、側根太、添え側根太、端根太、端根太および基部及び外周部の壁枠組（すきや形及び下張材を含む）のうち、遮蔽面から高さ 1m 以内の部分。
2. 浴室にあっては壁枠組（壁下張材を含む）、天井下地材及び床枠組（床下張材を含む）。
3. 台所の他温気のある箇所にあっては、畳が入るとなり恐れのある箇所の壁枠組（壁下張材を含む）及び床枠組（床下張材を含む）。
4. 前2. 及び3. の項において、壁下張材としてせっこうボードを使用する場合その品質は、JIS A6912（シーガングせっこうボード）に適合するものとする。なお、この場合せっこうボードには防腐・防蝕措置は講じないことができる。
5. 防蝕のため、土塗処理を行う場合の施工箇所は、基礎の内外周及び載石の周囲とする。

4.1.3.4 その他の
1. 4.1.3.1（楽器の品質）の項2. 及び3. の措置を講ずる場合の措置が必要な地域及び処理方法は、しきりあり協会設立の標準仕様書に準ずる。（4.1—4 図参照）
2. 給排水用の塩化ビニール管の接する部分に防腐措置又は防腐・防蝕措置を講ずる場合は、楽器によって損傷しないよう管を保護する。

4.2 土台
4.2.1 土台の寸法型式等
1. 土台に使用する木材は、寸法型式 204、206、208 又は 404 の組材とする。
2. 土台は 4.1.3.2（加圧式処理材を使用する場合）の 1 の項の加圧式処理材を使用する。
3. 土台が基準と接する面には、防水紙、その他これに類するものを敷く等の腐敗措置を講ずる。

4.2.2 土台の組手、仕口
寸法型式 204、206 及び 404 の土台の隅角部又は丁字形の仕口及び組手には、寸法型式 204 及び 206 にあって 2 本の CN65 を、寸法型式 404 にあっては 3 本の CN75 を斜め打ちする。（4.2—1 図参照）
4.1—4 図 参考図 防蟻対策地域区分図（関日本しろあり対策協会制定）

<table>
<thead>
<tr>
<th>地域</th>
<th>処理部分</th>
<th>処理の必要性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>I</td>
<td>木部</td>
<td>必要</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>土壌</td>
<td>必要</td>
</tr>
<tr>
<td>II</td>
<td>木部</td>
<td>必要</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>土壌</td>
<td>ほとんどの地域で必要</td>
</tr>
<tr>
<td>III</td>
<td>木部</td>
<td>必要</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>土壌</td>
<td>一部の地域で必要</td>
</tr>
<tr>
<td>IV</td>
<td>木部</td>
<td>一部の地域で必要</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>土壌</td>
<td>不要</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4.2—1 図 寸法型式204・206の土台の仕口及び維手の釘打ち

4.2.3 在来工法の床

1. 1階床組を在来工法的に構成する場合は次のようになる。

イ. 床根太には寸法型式204の木材を用い、その間隔を500mm以下とし、
大引きには寸法型式404を用い、その間隔を1,370mm以下とする。

ロ. 土台には座金ばりを行なう。（4.2—2 図参照）

ハ. 土台と大引きとの仕口は、土台を30mm欠き込み大入れとし3本の
C N75を斜め打ちする。（4.2—3 図参照）

ニ. 大引きの維手は束の上で相欠き轍きを行い、両面からそれぞれ2本の
C N90を平打ちする。（4.2—4 図参照）

ホ. 束は、寸法型式404を大引き間隔に準じて入れ、大引きより4本の
C N75を斜め打ちする。根からみ、寸法型式104を用い、すべて
の束に2本のCN65を余打つする。

2.大引、束及び根がらみは4.1.3（防腐・防蝕措置）の項の防腐・防蝕措置を構する。

4.2-2図 座金ぼり

4.2-3図 土台と大引きの取合

4.2-4図 大引きの締手

4.2.4 土間コンクリート床スラブの土台

1.土間コンクリート床スラブの場合には、土台を壁枠組の下枠と兼ねることができる。

2.土台を下枠として使用する場合の土台の締め手は、たて枠の中央で行い、4本のCN90を木口打ちするか、又は4本のCN65をたて枠から土台へ斜め打ちする。（4.2-5図参照）

4.2-5図 土台を下枠として使用する場合の締手

4.3 平家建又は2階建

の床枠組

4.3.1 床 根 太

1.床枠組を構成する床根太は、寸法型式206、208、210及び212の製材又は集成材を縦使いし、床根太相互の間隔は500mm以内とする。

2.床根太のスパンは、別記スパン表による。

3.床根太の釘打ちは、土台、頭つなぎ、床梁などに対して、2本のCN75を斜め打ちする。（4.3-1図参照）
4.3-1 図 床根太と土台と釘打ち

4.3-2 図 床根太の直手

(A) 重ね接ぎ

(B) 添え木

(C) 築金物

(D) 構造用合板
4.3.2 床根太の継手
1. 床根太の継手は、土台、頭つなぎ又は床梁の上で行う。
2. 床根太の継手は、次のいずれかによるものとし、床根太と同寸のころび
止め兼ファイアーストッブ材を入れる。
3. 重ね合わせて継ぐ場合は、床根太を100mm以上重ね、3本のC N90
を平打ちする。(4.3-2図A参照)
4. 添え木を用いて継ぐ場合は、床根太と同寸で長さは400mm以上とし、
釘は6本以上のC N90を平打ちする。(4.3-2図B参照)
5. 金物を用いて継ぐ場合は、帯金物(S—45)を用い、釘は6本のZ N40を平打ちする。(4.3-2図C参照)
6. 厚さ12mm以上の構造用合板を用いて継ぐ場合は、床根太と同じで
長さ400mm以上とし、釘は6本以上のC N65を平打ちする。(4.3-2図D参照)
3. 床根太の継手部分にはそれぞれの床根太から、土台、頭つなぎ又は床梁
に対して2本のC N75を斜め打ちする。(4.3-2図A/B/C/D参照)

4.3.3 側根太と端根太
1. 側根太には、同寸を添え側根太を添え付け、釘打ちは、C N75で、両端
部2本、中央部600mm間隔以内に両端に平打ちする。
2. 端根太と側根太、添え側根太及び床根太との仕口はそれぞれ3本のC N90を木口打ちする。(4.3-3図参照)
3. 端根太部には床根太間及び床根太と添え側根太の間に端根太と同寸のこ
ろび止め（以下、「端根太ころび止め」という。）を設け、それぞれ4本
のC N75を平打ちする。(4.3-4図参照)
4. 土台又は頭つなぎに対する釘打ちは次による。(4.3-3図参照)
5. 側根太及び端根太からはC N75を間隔250mm以内に斜め打ちする。
6. 添え側根太からはC N75を間隔500mm以内に、端根太ころび止めか
らは1本のC N75を斜め打ちする。
5. 端根太と添え側根太の継手は乱に配置し、継手の両側200mm内外の範囲
内にそれぞれ3本のC N75を平打ちする。
6. 端根太の継手は床根太間に設け、端根太と端根太ころび止めとの釘打
ちは、継手の両側にそれぞれ3本のC N75を平打ちする。

4.3—3図   端根太と側根太又は床根太との仕口
4.3—4図   床の補強
4.3.4 ころび止め及びファイアーストッブ材
1. 床根太の支持間隔が4.5m以上の場合は、3m以内ごとにころび止めを設ける。
2. 居室の間仕切壁の直上の床根太が直交する場合は、床根太間には床根太と同寸のファイアーストッブ材を入れる。
3. ころび止め及びファイアーストッブ材の床根太への留めつけは次による。
   イ. 床根太と同寸又は1サイズ小さい寸法のころび止め若しくは床根太と同寸のファイアーストッブ材の場合は、3本のCN75を斜め打ちするか、3本のCN90を木口打ちする。（4.3—5図参照）
   ロ. 交差ころび止めの場合は、寸法型式204の2の割り（40mm×40mm）以上の木材を用い、両端を2本のCN65で床根太に斜め打ちする。（43—6図参照）

4.3—5図 床根太と同寸法によるころび止め 4.3—6図 交差ころび止めの釘打ち

4.3.5 床 開 口 部
4.3.5.1 一 般 事 項 1. 床開口部を設ける場合はこの順による。ただしこれによらない場合は別途構造計算により安全を確かめる。
2. 床に矩形の開口部を設ける場合の開口部回りの構成は次による。（4.3—7図参照）
   イ. 開口部端根太
   ロ. 開口部側根太
   ハ. 尾根太（開口部端根太に直交する床根太）

4.3—7図 床開口部回りの補強

4.3.5.2 開口部端根
1. 開口部の最大幅は開口部端根太の寸法型式等により4.3—1表に示す値とする。
4.3—1 表

<table>
<thead>
<tr>
<th>開口部端用の種類</th>
<th>寸 法 型 式</th>
<th>開 口 部 の 最 大 幅</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 枚開口部端用</td>
<td>206</td>
<td>1.2m</td>
</tr>
<tr>
<td>2 枚開口部端用</td>
<td>2—208</td>
<td>1.82m</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2—210</td>
<td>2.73m</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 2 枚開口部端用の釘打ちは、4.3.7の3（合せ梁の釘打ち）と同様とする。（4.3—15図参照）

3. 開口部端用と尾根用との取付けは次による。
   
   い. 尾根用の長さが1.82m以下の場合は、開口部端用から尾根用に3本のC N90を木口打ちした後、尾根用から開口部端用へ2本のC N75を斜め打ちする。（4.3—8 図参照）
   
   り. 尾根用の長さ1.82mを越える場合は、4.3.7の5（床梁と床根用の仕口）と同様の手法で尾根用を開口部端用に取付ける。（4.3—17図参照）

4. 1 枚開口部端用と開口部側根用との取付けは次による。
   
   い. 開口部端用に取付く尾根用の長さが1.82m以下の場合は開口部側根用から、開口部端用に3本のC N90を木口打ちした後、開口部端用から開口部側根用へ2本のC N75を斜め打ちする。
   
   り. 開口部端用に取付く尾根用の長さ1.82mを越える場合は、4.3.7の5（床梁と床根用の仕口）と同様の手法で開口部端用を開口部側根用に取付ける。（4.3—17図参照）

5. 2 枚合わせ開口部端用は、開口部側根用に梁受け金物（B. H）を用いて取付ける。ただし、耐力壁又は鉛直力支持する壁（以下「支持壁」という。）を次により設ける場合は開口部側根用から開口部端用へ1枚につき3本のC N90を木口打ちとすることができる。（4.3—9 図参照）

   い. 開口部端用と平行する耐力壁又は支持壁を開口部端用の端部に設ける。

   り. 耐力壁又は支持壁の端部のたて枠を合わせた枠（3 枚合わせとするか、又は、寸法形式404にもう1 枚たて枠を添えたもの）とし、開口部端用及び開口部側根用を支持する。この場合、合わせたて

4.3—8 図 尾根用の釘打ち  4.3—9 図 開口部端用端部の支持
4.3.5.3 開口部側根

1. 閉口部の最大長さは 2.73m とする。

2. 閉口部側根太の枚数は、閉口部幅が 0.5m 以下の場合は 1 枚とし、それ以外の場合は 2 枚合わせ以上とする。

3. 2 枚合わせ以上の開口部側根太とした場合の支点間距離は開口部の大きさ及び寸法型式により 4.3－2 表に示す値とする。（4.3－10図参照）

4.3－2 表

<table>
<thead>
<tr>
<th>閉口部の大きさ</th>
<th>寸 法 型 式</th>
<th>支 点 間 距 離</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>幅、長さとも2.73m以下</td>
<td>床根太に使用可能な寸法型式。</td>
<td>開口部端根太の端部がすべで耐力壁又は支持壁で支持される場合に限る</td>
</tr>
<tr>
<td>幅 0.91m以下</td>
<td>2－208</td>
<td>2.73m</td>
</tr>
<tr>
<td>長さ 2.73m以下</td>
<td>2－210</td>
<td>3.64m</td>
</tr>
<tr>
<td>幅 1.82m以下</td>
<td>2－208</td>
<td>1.82m</td>
</tr>
<tr>
<td>長さ 2.73m以下</td>
<td>2－210</td>
<td>3.64m</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3－208</td>
<td>2.73m</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4.3－10図 側根太の支点間距離例

4.2 枚又は 3 枚合わせ開口部側根太の釘打ちは、4.3.7（床梁）の 3 の項による。（4.3－12図参照）

4.3.5.4 外壁に接する床開口部

床開口部を外壁に接して設ける場合の外壁上にくる開口部端根太又は開口部側根太の構成は 4.3－3 表による。この場合の 2 枚合わせ又は 3 枚合わせの釘打ちは、4.3.7（床梁）の 3 の項による。（4.3－15図参照）

4.3－3 表

<table>
<thead>
<tr>
<th>外壁上にくる開口部の幅又は長さ</th>
<th>外壁上にくる開口部端根太又は開口部側根太の枚数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.82m以下</td>
<td>2 枚合わせ</td>
</tr>
<tr>
<td>1.82mを超え2.73m以下</td>
<td>3 枚合わせとするか、寸法型式408又は410の集成材</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4.3.5.5 吹き抜け

吹き抜け等の床開口部を 4.3.5.1 から 4.3.5.4までによらずに設ける場合は4.5.12（階段・スキップフロア回り等の壁構成）の手法により長て枠を用いて補強する。

4.3.6 床枠組の補強

4.3.6.1 一般事項

耐力壁直下又は直上の床枠組の補強等はこの項による。なお、この項によらない場合は、別途構造計算等により安全を確かめる。
4.3.6.2 耐力壁が一致している場合

床枠組上部の耐力壁と床枠組下部の耐力壁は梁若しくは土台が一致している場合（以下「耐力壁が一致している場合」という。）の床枠組上部の耐力壁直下の床枠組の補強は次のいずれかによる。（図4.3—11参照）

イ. 耐力壁に平行する直下の床根太は2枚合せ以上としつつなぎ又は梁若しくは土台にそれぞれCN75を250mm以内の間隔で斜め打ちする。（4.3—11図（A）参照）

ロ. 耐力壁に直交する直下の床根太の間には4.3.4（ころび止め及びフィアーストッピング）の項による床根太と同寸のころび止めを設け、頭つなぎ又は梁若しくは土台に3本のCN75を斜め打ちする。（4.3—11図（B）参照）

4.3—11図 2階耐力壁下部の補強

（A）耐力壁と床根太とが直交する場合

（B）耐力壁と床根太とが平行する場合

4.3.6.3 床根太と同寸のいずれ

床枠組上部耐力壁と床枠組下部耐力壁は梁若しくは土台が床枠組の床根太と同寸以内の範囲でずれて配置される場合（以下「床根太と同寸のいずれ」という。）の床枠組の補強は次のいずれかによる。

イ. 床枠組の上部耐力壁に平行する直下の床根太は2枚合せ以上とする。または、床枠組の下部の耐力壁等に平行する直下の床根太の補強は4.3.6.2（耐力壁が一致している場合）のイと同様とする。

ロ. 床枠組の上部耐力壁に直交する直下の床根太の間には4.3.4（ころび止め及びフィアーストッピング）の項による床根太と同寸のころび止めを設ける。また、床枠組の下部耐力壁等に直交する直下の床根太の補強は4.3.6.2（耐力壁が一致している場合）のロと同様とする。

4.3.6.4 オーバーハング

1. 床枠組上部の外壁が床枠組下部の外壁の位置より床根太のせい以上室外側にはりだす場合（以下「オーバーハング」という。）の masihは910mm以内とし、床枠組下部の外壁開口部までき等のスパンは別記スパン表による。

2. オーバーハングした場合の床枠組の補強等は次による。

イ. 床枠組下部の外壁に平行する直下の床根太は、2枚合せ以上とし、頭つなぎにそれぞれCN75を250mm以内の間隔で斜め打ちする。

ロ. 床枠組下部の外壁に直交の床根太の間には4.3.4（ころび止め、フィアーストッピング）の項による床根太と同寸のころび止めを設け、頭つなぎに3本のCN75を斜め打ちする。

3. 被荷重を受けないバルコニー等を架で支持する場合は別記スパン表によると。
4. 前2項及び3項の床梁組の隅角部は帯金物（S－90）で補強する。（4.3－12図参照）

4.3－12図 隅角部の補強

4.3.6.5 セットバック

1. 床枠組上部の外壁が床枠組下部の外壁の位置より床根太のせい以上室内側に後退する場合（以下「セットバック」という。）の床枠組上部の外壁の下部には耐力壁又は4.3.7（床梁）の項による床梁を設ける。なお、この場合の耐力壁開口部まぐさ又は床梁のスパンは別記スパン表による。

2. 床枠組上部の外壁の下部に耐力壁を設ける場合の床枠組等の構成は次による。（4.3＝13図参照）

イ. 床枠組と下部耐力壁との繋結は4.3.3（側根太と端根太）の4と同様とする。

ロ. 下屋部分の天井部は、天井根太又はたる木による構成とすることができる。

4.3－13図 床枠組等の構成（下部に耐力壁を設ける場合）

3. 床枠組上部の外壁の下部に床梁を設ける場合の床枠組等の構成は次による。（4.3－14図参照）

4.3－14図 床枠組の構成（床梁を設ける場合）
イ．床枠組は下屋部分の外壁までのぼし、下屋部分の外壁との接続は
4.3.3（側根太と端根太）の4の項による。
ロ．下屋部分の小屋は4.4.3（床下張り）の項でいう補足上枠を用いて
構成する。

4.3.7床梁
1.床根太を支える床梁は、寸法型式208、210及び212のそれぞれ２枚合わせ
若しくは３枚合わせ又は集成材の寸法型式408、410及び412とする。
なお、集成材は寸法型式412を超える規格も用いることができる。
2.床梁のスパンは、別記スパン表による。
3.2枚合わせ床梁の釘打ちは、C N90を両端部2本、中間部400mm間隔以内
に千鳥に平打ちする。3枚合わせ床梁の釘打ちは、床梁の両面から
C N90を両端部2本、中間部800mm間隔以内に千鳥に平打ちする。（4.3
—15図参照）

4.3—15図 合わせ床梁のつくり方

4.床梁の両端部の支持は、次のいずれかによるものとし、支点への掛りは、
89mm以上とする。

イ．床梁を耐力壁の上部で支持する場合は、床梁の下部に、床梁の合わせ
枚数と同数のたて枠又は床梁と同じ幅のたて枠を床梁の受け材とし
て設ける。
側根太は2本の帯金物（S—45）で補強し、釘はそれぞれ6本の
Z N40を平打ちする。（4.3—16図(A)参照）
合わせて枠による床梁の受け材の釘打ちは、C N90を上・下端2
本、中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。

ロ．床梁を耐力壁の中で支持する場合は、壁の頭つなぎ及び上枠を床梁
の幅だけ欠き込んでおさめる。
頭つなぎ及び上枠は帯金物（S—45）で補強し、釘はそれぞれ6本の
Z N40を平打ちする。（4.3—16図(B)参照）
ただし、床梁をおさめるために欠き込んだ上枠又は頭つなぎを、外
壁下張材に構造用合板を用いて、つなげるように張る場合には、帯金
物（S—45）を省略することができる。
床梁の直下の耐力壁内には、床梁の合わせ枚数と同数のたて枠又は
床梁と同じ幅のたて枠を床梁の受け材として設け、さらに床梁の受
け材の両側から補助して枠を床梁を抱くように設ける。
合わせて枠で構成される床梁の受け材及び補助枠の釘打ち
は、C N90を上・下端2本、中間部600mm間隔に千鳥に平打ちす
る。

5.床梁と根太の仕口は、4.3.1の3（床根太の釘打）によるほかは4.3
一覧による。

4.3—16図 床梁の支持

(A) 床梁の支持（壁の上）

(B) 床梁の支持（壁の中）

4.3—17図 根太がけの方法と釘打ち

6. 床梁に4.1.1.3（合板ボックスビーム）の項による合板ボックスビームを使用する場合のスパンは、別記スパン表による。

7. 合板ボックスビームの両端部の支持は、次による。（4.3—18図参照）

イ. 合板ボックスビームの支点となる外壁又は建物内部の耐力壁の中に404材を配置し、合板ボックスビームの幅と同寸になるように合板かい木を設ける。

ロ. 404材への釘打ちは、下枠から4本のCN90を木口打ちし、添えたて枠から300mm間隔以内にCN90を平打ちする。

ハ. 404材の上に合板ボックスビームを設け、添えたて枠から200mm間隔以内にCN90を平打ちする。

4.3—18図 合板ボックスビームによる床梁の支持方法
4.3.8 床板太の欠き込み

みと穴あけ

4.3.8.1 欠き込み 1. 欠き込み出来る範囲は、床板太の支点位置からスパンの両端 1/3 以内とする。(4.3.19図参照)
2. 上下端の欠き込み深さ及び幅は床板太せいの、それぞれ 1/6 以下、1/2 以下とする。ただし、床板太の端部支点で上端を欠き込む場合は欠き込み幅を床板太のせい以下とし、その深さを床板太のせいの 1/3 以下とすることが出来る。(4.3—19図参照)
3. 上下端とも欠き込む場合は床板太のせい以上離して欠き込む。(4.3—19図参照)

4.3—19図 床板太の欠き込みの制限

4.3.8.2 穴あけその他の

1. 床板太に穴をあける場合は床板太の上下端よりそれぞれ50mm以上離して行い、穴の最大径を床板太せいの1/3以内とする。(4.3—20図参照)
2. 連続して穴あけを行う場合又は穴あけと欠き込みを連続して行う場合は、穴相互間又は穴と欠き込み部との距離はそれぞれ床板太せいの長さ以上とする。(4.3—20図参照)
3. 便器などを取付けるために、太管を配管する場合の補強は 4.3—21 図を標準とする。

4.3—20図 床板太の穴あけの制限
4.3.9 床下張り

1. 床下張材は、厚さ12mm以上の構造用合板又は厚さ15mm以上のパーティクルボードとする。

2. 構造用合板は、表面繊維方向が床根太方向と直交するように張り、パーティクルボードは、長手方向が床根太方向と直交するように張る。

3. 床下張は、千鳥張りとし、3本以上の床根太にかかるようにする。（4.3-22図参照）

4. 接着剤を用いて床下張りを行う場合で、別記スパン表による場合にあっては、「生・木センター」の定める基準により床用現場接着剤として認定されたもの又は、これと同等以上のものを床根太部分及び受け材部分又は本さね部分に塗布する。なお、塗布に先だって塗布部分のよれれ、付着物を除去する。

5. 床下張材の突き合わせ部分には、寸法型式204の2つ割り（40mm×40mm）以上の受け材を入れる。ただし、次のいずれかによる場合には省略することができる。

イ. 床根太間隔を310mm以下とし、厚さ15mm以上の構造用合板を用いる。

4.3-22図 床下張材の張り方と釘打ち
4.3.10「40㎡を超える区画」

4.3.10.1 共通事項

平家建又は2階建の住宅で、耐力壁線で囲まれた部分の床面積を40㎡を超えるもの（以下「40㎡を超える区画」という。）とする場合の当該床枠を、この項による。ただし、この項に掲げる事項に該当しないものについては前各項による。

4.3.10.2 形状比

「40㎡を超える区画」で囲まれた床の形状は矩形とし、長辺（L）の長さは短辺（D）の長さの3倍以下とする。（4.3—23図参照）

4.3—23図 40㎡を超える区画の形状比

4.3.10.3床枠組の緊結

1. 土台又は頭つなぎとの緊結は次による。

イ. 側根太、添え側根太及び端根太からC N75を間隔250mm以内に斜め打ちする。

ロ. 端根太および止めから、2本のC N75を斜め打ちする。

2. 「40㎡を超える区画」が建物の内部にある場合の土台又は頭つなぎとの緊結は次による。

イ. 耐力壁に平行する直下の床根太は、2枚合わせ以上としそれぞれC N75を250mm以内の間隔で斜め打ちする。（4.3—11図(A)参照）

ロ. 耐力壁に直交する直下の床根太の間に、4.3.4(こころび止め及びファイアーストップ材)の項による床根太と同寸の2枚合わせのこころび
止めを設け、それぞれC N75を床根太間に2本斜め打ちをする。（4.3-24図参照）

4.3-24図 耐力壁と床根太が直交する場合の2階耐力壁下部の補強

3. オーバーハングした場合の床枠組と壁枠組との接続は次による。

イ. 1階耐力壁直上の床根太が耐力壁と平行する場合は床根太を2枚合わせし、頭につなぎ両側からそれぞれC N75を250mm以内の間隔で斜め打ちする。（4.5-24図(A)参照）

ロ. 1階耐力壁直上の床根太が耐力壁と直交する場合は、床根太間に4.3.4（ころば止め及びファイアーストップ材）の項による2枚合わせの床根太と同寸のころば止めを設け、それぞれC N75を床根太間に2本斜め打ちする。（4.3-25図(B)参照）

4.3-25図 オーバーハングした場合の床枠組と壁枠組の接続

(A). 1階耐力壁直上の床根太が耐力壁と平行する場合

(B). 1階耐力壁直上の床根太が耐力壁と直交する場合

4.3.10.4床下張り

4.3.9（床下張り）の項による他、40㎡を超える区画の耐力壁線上の釘打ち間隔は、100mm以下とする。ただし、同項4の接着張りと併用する4.3-26図 「40㎡を超える区画」の床下張り

耐力壁線上に
釘を間隔100mm以内に打つ

40㎡を超える区画

41
4.4 3階建の床枠組

4.4.1 床 面 積
3階建の3階部分の床面積は2階部分の床面積の1/2以下とする。

4.4.2 床枠組の緊結
土台又は頭つなぎとの緊結は4.3.10.3（「40㎡を超える区画」の床枠組の緊結）の項の同様とする。

4.4.3 床 下 張 り
1. 3階の床面にはすべて床下張材を張りつけた後、たるきがとりつて外周部には寸法型枠204の補足上枠を設けCN90を間隔250mm以内に平打ちする。たるきがとりつく外周部から455mm以内の部分は床下張材を張らないことができる。
2. 1にならない場合は、別途構造計算により安全を確かめる。

4.4.1-1 図 3階建の3階部分の床下張り
(A)床下張材を全面に張る場合 (B)床下張材を一部省略する場合

4.5 平家建又は2階建の壁枠組
4.5.1 耐力壁
1. 耐力壁の幅はその高さの1/3以上とし、耐力壁相互の間隔は12m以下とする。
2. 耐力壁の下枠、上枠、たて枠及び頭つなぎは、寸法型枠204、206、208又は404の製材又は集成材とする。
3. たて枠相互の間隔は500mm以内とし、寸法型枠204を多雪区域で用いる場合は350mm以内とする。ただし、別記スパン表による場合には、350mmを超え500mm以内とすることができる。
4. 耐力壁の種類は4.5-1表による。
5. 通常の耐力壁の下枠の下端から頭つなぎの上端までの寸法は、2,450mmを標準とする。
6. 片流れ屋根、切妻屋根等の矢切部分及び吹抜部分に長いたて枠を用いる場合のたて枠の高さの限度は、寸法型枠204にあっては3.8m、寸法型枠206にあっては6.0mまでとする。
### 表 4.5—1 耐力壁の種類と倍率

<table>
<thead>
<tr>
<th>材料</th>
<th>倍率</th>
<th>断面</th>
<th>釘</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>筋 かつい材（横張り）</td>
<td>0.5</td>
<td>18mm×89mm以上</td>
<td>CN 65</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>13mm×210mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>シージングボード</td>
<td>1.0</td>
<td>厚さ12mm</td>
<td>SN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>レス テイト</td>
<td></td>
<td>0.4mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>せっこうボード</td>
<td>1.5</td>
<td>厚さ12mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>製材（斜め張り）</td>
<td></td>
<td>13mm×210mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>プレキシブル板</td>
<td>2.0</td>
<td>厚さ6mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>石綿板</td>
<td></td>
<td>8mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>石綿パラライン板</td>
<td></td>
<td>12mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>パルプセメント板</td>
<td></td>
<td>8mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>炭酸マグネシウム板</td>
<td></td>
<td>12mm</td>
<td>GN 40</td>
</tr>
<tr>
<td>硬質木片セメント板</td>
<td>2.5</td>
<td>厚さ12mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>ハードボード</td>
<td></td>
<td>5mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>構造用合板</td>
<td></td>
<td>7.5mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>パーティクルボード</td>
<td>3.0</td>
<td>厚さ12mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>ハードボード</td>
<td></td>
<td>7mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>構造用合板</td>
<td></td>
<td>7.5mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>構造用合板</td>
<td></td>
<td>9mm</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
<tr>
<td>構造用合板</td>
<td>3.5</td>
<td>厚さ9mm以上</td>
<td>CN 50</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（備考）1. 構下張りを平面に張った場合の倍率はそれぞれの倍率の合計することができるが、加算した場合の倍率は0.5を限度とする。また、これら以外の材料及び釘については建設大臣により認められたものに限る。
2. GN40に代えてSFN45を使用することができる。

### 4.5.2 耐力壁の上枠及び下枠

1. 上枠及び下枠は、それぞれの壁面ごとに一体のものを用いる。止むを得ず中途において続ぐ場合は、次による。
   1. 上枠及び下枠の経線は、たて枠の中央で行い、たて枠にそれぞれCN90を4本木口打ちする。（4.5—1図参照）
   2. 上枠と下枠の仕口は、上枠側から2本のCN90を木口打ちとする。また、下枠と下枠の仕口は、下枠側から2本のCN90を木口打ちとするか、たて枠から3本のCN75を斜め打ちする。（4.5—1図参照）
4.5.3 耐力壁の頭つなぎ
1. 頭つなぎは、なるべく長尺材を用い、継手は上枠の継手位置より600mm以上離す。
2. 隅角部及びT字部での頭つなぎの仕口は、上枠と頭つなぎが、相互に交差し重なるようにおくめる。
3. 頭つなぎと上枠との接合は、次のいずれかにによる。（4.5-2図参照）
   い. 4.5.1（耐力壁）の4の項による外壁下張り材が頭つなぎに釘打ちされる場合の接合は、頭つなぎから上枠へCN90を端部は2本、中間部は500mm間隔以内に平打ちとする。
   い. 4.5.1（耐力壁）の4の項による外壁下張り材が上枠に釘打ちされる場合の接合は、頭つなぎから上枠にCN90を端部は2本、中間部は250mm間隔以内に平打ちとする。

4.5-2図 頭つなぎ釘打ち

4.5.4 耐力壁の隅柱
1. 耐力壁の隅柱は、3本以上のたて枠で構成する。
2. 耐力壁がL字型に接合する場合は、次のいずれかによる。
   い. 隅角部に開口部がない場合は、4.5-3図(A)又は(B)を標準とする。
      (A)の場合は、2本のたて枠の間に、たて枠と同じ幅で長さ300〜400mmのかいぎを上、中、下部の3ヶ所に入れ、合わせてたて枠を作り、両側のたて枠からそれぞれ3本のCN90を干乾で平打ちする。第3のたて枠と合わせたたて枠の接合は、CN90をかいぎのある部分に2本、その他の部分は300mm間隔以内に平打ちする。
      (B)の場合は、3本のたて枠を相互にCN90を300mm間隔以内に平打ちする。
   い. 隅角部に開口部がある場合は、4.5-3図(C)を標準とする。
      2本のたて枠の間に、厚さ9mmの構造用合板でたて枠と同じ幅、長さ300〜400mmのかいぎを上、中、下部の3ヶ所にに入れ、合わせてたて枠を作り、両側のたて枠からそれぞれ3本のCN90を干乾で平打ちする。
      第3のたて枠と合わせたたて枠との接合は、CN90を上・下端それぞれ2本、中間部600mm間隔以内に干乾で平打ちする。

4.5-3図 耐力壁がL字型に接合する場合の隅柱の構成
3. 耐力壁がT字型に接合する場合は次のいずれかによる。

イ．T字部に開口部がない場合は、4.5—4 図(A)又は(B)を標準とする。
(A)の場合は、T字部に壁下張材の目地部分が二ない場合に用いる。
かいぎは、たて枠と同寸の木材を用い、両側のたて枠からC N90を
300mm 間隔以内に平打ちする。壁と壁との接合には、第3のたて枠
からC N90を上・下端に2本、中間部600mm 間隔以内に千鳥に平打
ちする。
(B)の場合は、T字部に壁下張材の目地部分が二る場合に用いる。か
いぎは、たて枠と同寸の木材を用い、たて枠及びかいぎ相互間に
C N90を300mm間隔以内で平打ちする。

ロ．T字部に開口部がある場合は、4.5—4 図(C)、(D)又は(E)を標準とする。
(C)の場合は、4.5.4の2のイの(A)の場合と同じとする。
(D)の場合は、4.5.4の2のイの(B)の場合と同じとする。
(E)の場合は、4.5.4の2のロと同じとする。

4.5—4 図 耐力壁がT字型に接合する場合の隅柱構成

4. 耐力壁が十字型に接合する場合は次のいずれかによる。

イ．十字型に開口部がない場合は、4.5—5 図(A)又は(B)を標準とする。
(A)の場合は、厚さ9mmの構造用合板をかいぎとして用い、合わせた
て枠をつくる。合わせたて枠の釘打ちは、4.5.4の2のロと同じと
し、四方のたて枠から合わせたて枠にはそれぞれC N90を上・下端
に2本、中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。
(B)の場合は、たて枠と同寸の木材をかいぎ用として用い、合わせた
て枠をつくる。合わせたて枠の釘打ちは、両側のたて枠からかいぎ
にC N90を上・下端に2本、中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ち
し、その他のたて枠から合わせたて枠にもC N90を同様に平打ちす
る。

ロ．十字型に開口部がある場合は、4.5—5 図(C)又は(D)を標準とする。
（C）の場合の合わせた枠の釘打ちは、4.5.4の2のイの場合と同様とし、その他のただし枠から合わせた枠にはCN90を300mm間隔以内に平打ちする。
（D）の場合の合わせた枠の釘打ちは、4.5.4の2のロ。と同じとし、その他のただし枠から合わせた枠にはCN90を600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。

4.5-5 図 耐力壁が十字壁に接合する場合の隅柱の構成

(A)

(CN90F @600千鳥)
合板かぎ

3-CN90F (かぎのごと)

CN90F @600千鳥

(B)

(CN90F @600千鳥)

(D)

(CN90F @600千鳥)
合板かぎ

3-CN90F (かぎのごと)

5. 耐力壁線の張り間方向とせた行方向とが直角に交わらない場合は、4.5—6図を標準とする。

4.5-6 図 耐力壁線が直角に交わらない場合の隅柱の構成

(A) 壁組成例

46
4.5.5 支持壁及び非耐力壁

1. 支持壁及び非耐力壁はたて枠、上枠、下枠及び頭つなぎにより構成し、支持壁の場合は寸法型式204以上、非耐力壁の場合は寸法型式203以上の製材又は集成材とする。ただし頭つなぎは省略できる。

2. 支持壁及び非耐力壁のたて枠間隔は4.5—2表を標準とする。

4.5—2 表 支持壁又は非耐力壁のたて枠間隔

<table>
<thead>
<tr>
<th>寸 法型 式</th>
<th>たて使い</th>
<th>開 口 部 有 り</th>
<th>開 口 部 无 し</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>支 持 壁</td>
<td>204</td>
<td>455</td>
<td>455</td>
</tr>
<tr>
<td>非 耐 力 壁</td>
<td>204</td>
<td>600</td>
<td>600</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>平 使 用</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>203</td>
<td>455</td>
<td>600</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3. 上枠とたて枠の仕口は上枠から2本のCN90を木口打ちとする。また下枠とたて枠の仕口は下枠から2本のCN90を木口打ちとするか、たて枠から3本のCN75を斜め打ちとする。

4. たて枠は通しものとし、その長さは寸法型式203にあっては、2.7mまでとする。

5. 下枠から床枠組にはCN90をたて枠間に1本平打ちする。

6. 支持壁又は非耐力壁と耐力壁及び天井根太とは直接水平力が非耐力壁又は支持壁に伝わらないようとめつける。（4.5—7図参照）

7. 可動間仕切壁などの製品のとりつけは製造所の仕様による。
4.5-7 図 非耐力壁の構成

(A) 非耐力壁と耐力壁の接続例

(B) 非耐力壁の根太への取付け例

4.5.6 耐力壁の開口部

1. 耐力壁線に設ける開口部の幅は 4 m 以下とし、その開口部の幅の合計は、その耐力壁線の長さの 3/4 以下とする。

2. 耐力壁線に幅 900 mm 以上の開口部を設ける場合は、まくさ及びまくさ受けを用いる。

3. まくさ受けは、開口部の幅が 2,730 mm 以上の場合は、2 枚合わせの寸法型式 204 とするか、1 枚の寸法型式 404 とする。開口部の幅が 2,730 mm 未満の場合は、1 枚の寸法型式 204 とする。ただし、別記スパン表に特記のある場合はこれによる。

4. まくさのスパンは別記スパン表による。ただし、屋根荷重を支持する耐力壁線開口部を設ける場合には、別記屋根梁のスパン表による。

5. 2 枚合わせのまくさの場合

6. まくさの両側には、たて枠を接合して配する。

7. 耐力壁線に設ける開口部回りの釘打ちは次による。（4.5-9 図参照）
イ．まくさ受けと窓台との釘打ちは、まくさ受けから窓台に2本のCN90を木口打ちするか、窓台からまくさ受けに2本のCN75を斜め打ちする。
ロ．まくさ受けからたて枠への釘打ちは、CN90を上、下端それぞれ2本、中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。開口部下部たて枠から下枠への釘打ちは、3本のCN75を斜め打ちするか、下枠から開口部下部たて枠へ2本のCN90を木口打ちにする。
ハ．まくさには、たて枠から4本のCN90を木口打ちするか、又はまくさからたて枠に4本のCN75を斜め打ちする。開口部上部たて枠からまくさには、3本のCN75を斜め打ちする。
ニ．窓台から開口部下部たて枠への釘打ちは、2本のCN90を木口打ちする。

4.5—9図 開口部のまわりの釘打ち  4.5—10図 出窓などのまくさの入れ方例

4.5—11図 合板ボックススビームによるまくさの支持方法
8. 出窓などの場合は、4.5—10図のようにまくさを設ける。
9. まくさに4.1.1.3（合板ボックススピーム）の項による合板ボックススピームを使用する場合のスパンは別記スパン表による。
10. 合板ボックススピームのまくさの釘打ちは次による。（4.5—11図参照）
   ①. たて枠にまくさ受けを取付けC N90を上、下端それぞれ2本、中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。
   ②. たて枠から合板ボックススピームへの釘打ちは、C N90を合板ボックススピームの上、下弦材にそれぞれ2本、中間部200mm間隔以内に平打ちする。
   ③. 上枠から合板ボックススピームに200mm間隔以内にC N90を平打ちする。

4.5.7 両面開口部の補強

4.5.7.1 一般項
1. 建物外周部の隅角部の両面に開口部を設けたもの（以下「両面開口」という）とする場合の補強等は次による。ただし、これによらない場合は実験等により安全を確かめる。なお、この項に掲げる事項に該当しないものについては、4.5.6（耐力壁の開口部）の項による。
2. 両面開口は各階毎に1箇所を限度とする。
3. 開口部の最大幅は両面それぞれ2m以下とする。
4. 開口部の側にはいずれも910mm以上の4.5.9.1（構造用合板）の項による構造用合板耐力壁（以下「側壁」という）を設ける。
5. 側壁の両端のたて枠の下部150mm内外に3.5.7（アンカーボルト）の項によるアンカーボルトを設ける。
6. 開口部の上下部には、下り壁及び高さ450mm以上の側壁を設け、いずれも耐力壁に用いる厚さの構造用合板を側壁部まで張りつめ、一体とする。ただし、平家部分に両面開口を設ける場合は、側壁を省略することができる。（4.5—12図参照）
7. 両面開口の隅角部には寸法型式404の隅柱を設ける。

4.5.7.2 床枠組及び士台との繋結
隅柱及び側壁の端部たて枠と床枠組及び士台との繋結は次による。
1. 1階部分に両面開口を設ける場合又は2階部分に両面開口を設けその直下に床を設ける開口部を設ける場合は、1階の床枠組及び士台と隅柱とは帯金物（S—65）2枚で、側壁の端部たて枠及びまくさ受けと帯金物（S W—67）で接続する。（4.5—13図(A)・(B)参照）
2. 基礎の構造を士台コンクリート床スラブとし、両面開口を前項により設ける場合は、士台と隅柱並びに側壁の端部たて枠及びまくさを受けとストラップアンカー（S A）で繋ぐ。（4.5—14図参照）
3. 2階部分に両面開口を設ける場合は、2階の隅柱並びに側壁の端部たて枠及びまくさ受けとそれらの直下の1階のたて枠（開口部上部たて枠を含む）とは、それぞれ帯金物（S—65）2枚で接続する。なお、この場合、繋結する部分の1階の壁のたて枠（開口部上部たて枠を含む）は、2枚合わせするか、又は寸法型式404を使用する。（4.5—13図(B)参照）
4.5-12 図 構造用合板の張り方

4.5-13 図 両面開口部詳細

(A) 1 階に両面開口を設けた場合
(b) 2階部分に両面開口を設けその直下に掃き出し窓を設けた場合

4.5-14図 ストラップアンカーの取付け方
4. 入隅部等で、隅柱又はまくさ受け材に金物が取り付けられない場合は、
まくさ受けを2枚合せするか、隅壁の開口部下部にて枠をまくさ受け
に添え付けて当該部材に金物を取りつける。
この場合の釘打ちは、2枚合せのまくさ受けはCN90で両端部2本、中
間部400mm間隔以内に千鳥打ち、下部たて枠は、CN90を両端部2本、
中間部200mm間隔以内に千鳥打ちする。（4.5-15図(A)、(B)、(C)参照）

4.5-15図 入隅部の補強

(A)

(B) 1階入隅部の緊密の詳細

(C) 2階入隅部の緊密の詳細
4.5.8 耐力壁の枠組材
の欠き込み及び
穴あけ

4.5.8.1 たて枠
1. 耐力壁のたて枠の欠き込みは原則としてその面積の1/4以下とし、
1本のたて枠の欠き込みは1箇所とする。なお、1/4を超え欠き込む
場合は見込みを40mm以上取し、欠き込みをされた部分をパイブガード
（PG）で補強する。(4.5-16図(A)参照)
2. 耐力壁のたて枠に配線・配管などの穴をあける場合は、原則としてその
断面面の1/4以下とする。なお、1/4を超える場合は、一方の見込みを
30mm以上残し、見込むが30mmに満たない側をパイブガード（PG）で補
強する。また、穴の最大長は、寸法型式204のたて枠にあっては、40mm、
寸法型式206にあっては50mmまでとする。(4.5-16図(B)参照)
3. 前1及び2にならない場合はまくぎを設けて処理する。
4. 配線・配管等が壁下張材の釘打ち等によって損傷されるおそれのある場
合は前1及び2にかかわらずパイブガード（PG）で保護する。

4.5-16図 たて枠の欠き込みと穴あけ

4.5.8.2 上下枠、頭
つなぎの欠
き込みと穴
あけ
耐力壁の上下枠及び頭つなぎを配管やダクト工事のため、欠き込みや穴
あけをする場合は、その幅の1/2以下とする。ただし、1/2を超える時
は、2枚の寸法型式204、パイブガード（PG）又は帯金物で補強する。
(4.5-17図参照) これ以外の場合で太い管を配する時は、4.5-18図の
例による。

4.5-17図 上枠、頭つなぎの補強
4.5.9 外壁下張り

4.5.9.1 一般事項
1. 外壁下張り材は4.5.1（耐力壁）の4の項による材料を用いる。
2. 外壁下張り材は、1階及び2階の床根太の部分で切断し、相互の上下間隔は原則として6mm以上ある（4.5—19図(A), (B)参照）
3. 土間コンクリート床スラブで土台と下枠を兼ねる場合は、外壁下張り材を土台まで張りつめる（4.5—19図(C)参照）
4. 外壁下張り材は、4.5.9.4（製材）の項による下張りを行う場合を除き、たて張りとする場合は、原則として一枚の版で下枠又は土台及び頭つなぎ又は上枠まで張るものとする。
5. 外壁下張り材を横張りとする場合又はたて張りとする場合でやむを得ず壁面の中途で版を継ぐ場合は、継手部分に寸法型式204の2つ割り（40mm×40mm）以上の受け材を入れる。

4.5—19図 構造用合板の張り方
4.5.9.2 構造用合板
1. 外壁下張り材に構造用合板を使用する場合は、3′×8′若しくは3′×9′版
のたて張り又は4′×8′版の横張り若しくはたて張りとする。
2. 釘打ちは、C N50を外周部100mm間隔以内、中間部200mm間隔以内に打ち
つける。

4.5.9.3 シーリングボード
1. 外壁下張り材にシーリングボードを用いる場合は、3′×8′若しくは3′×9′
版のたて張り、又は4′×8′版の横張り若しくはたて張りとする。
2. シーリングボードの締手部分には、防水紙を入れる。（4.5—20図参照）
3. 釘打ちは、SN40を外周部100mm間隔以内、中間部200mm間隔以内、端
根太、側根太及び土台の部分は200mm間隔以内に打ちつける。（4.5—
20図参照）

4.5—20図 シーリングボードの取り付け

4.5.9.4 製材
1. 外壁下張り材に製材板を使用する場合は、厚さ13mm以上、幅210mm以上
の製材とし、横張り又は斜め張りとする。
2. 縦手の位置は、たて枠の上とし、隣接する板の縦手が2つ以上並ばない
ようにする。（4.5—21図(A)参照）
製材板を斜め張りする場合は、たて枠に対して角度45°に張る。（4.5—
21図(B)参照）
3. 釘打ちは、たて枠に対し2本のC N50を平打ちする。ただし、上・下
枠、端根太、側根太及び土台に対しては200mm間隔以内で打ちつける。
4.5.9.5 パーティクルボード
外壁下張り材に厚さ12mm以上のパーティクルボードを使用する場合は、構造用合板と同様とする。ただし、経手及び防水方法は次による。

4.5.9.6 ハードボード
1. 外壁下張り材に7mm未満のハードボードを用いる場合は、施工する1〜2日前にきれいな水をハードボード裏面にまんべんなく散布し、裏面と表面を合わせて平積みし、シートなどでおおい養生する。
2. 外壁下張り材に厚さ5mm以上のハードボードを用いる場合は、3'×8'又は3'×9'版のたて張りとし、たて枠上の経手を2〜3mmあけ、CN50を外周部100mm以内、中間部200mm間隔以内に平打ちし、防水紙を全面に張り、胸巻を310mm以内間隔に設け、釘打ちし、サイディングを張り上げるなどの乾式工法とする。
3. 厚さ7mm以上のハードボードを使用する場合は、パーティクルボードの場合と同様とする。

4.5.9.7 硬質木片セメント板
1. 外壁下張り材に硬質木片セメント板を使用する場合は、3'×9'版のたて張りとする。
2. 壁枠組に防水テープ又は防水紙を張るか、あるいは防水性能の十分な塗膜等で防水処理を行う。
3. 上下の経手部分はジョイナー又はコーチングによって防水処理を行う。
4. 釘打ちは、CN50又はステンレス耐力釘（長さ50.8、頭径6.76、釘径2.87）を外周部100mm間隔、中間部200mm間隔に打ちつける。

4.5.9.8 フレキシブルボード、けい酸カルシウム板又は厚さ12mm以上のパーライト板を使用する場合は、3'×8'若しくは3'×9'版のたて張り又は4'×8'版のたて張り若しくは横張りとする。
1. 外壁下張り材に厚さ6mm以上のフレキシブル板、厚さ8mm以上のけい酸カルシウム板又は厚さ12mm以上のパーライト板を使用する場合は、3'×8'若しくは3'×9'版のたて張り又は4'×8'版のたて張り若しくは横張りとする。
2. 継目部分は1〜2mmあけ、ジョイナー又はコーチングによって防水処理
板を行う。
3. 釘打ちは、G N40又はS F N45を外周部150mm、中間部300mm間隔以内に打ちつける。

4. 5. 9. 9 炭酸マグネシウム板
1. 外壁下張り材に炭酸マグネシウム板を使用する場合は、継手部分の壁の枠組に防水テープを張るか又は壁面全面に防水紙を張った上から厚さ12mm以上の3×8'版若しくは3×9'版のたて張り又は3×10'版のよって張り若しくはたて張りとする。
2. 上下の継手部分を10mm間で、ジョイナー又はコーフィングによって防水処理を行う。
3. 釘打ちはG N40又はS F N45を外周部150mm、中間部300mm間隔以内に打ちつける。

4. 5. 9. 10 ラストシート
1. 外壁下張り材に厚さ0.4mm以上のラスシート（L S 4）を使用する場合は、3×8'版又は3×9'版のたて張りとし、土台及び壁の端部まで張り、見切り各部には、水切り、雨押えを入れる。
2. 継目部分は1山重ね出し、鉄板は鉄板で、ラスはラスで重ね接続する。
3. 関口部等でラスシートを切り抜く場合は、事前に鉄板を短かく、ラスを長くなるよう切断し、捲き込む。
4. 釘打ちは、亜鉛メキシされたC N50を外周部100mm間隔、中間部200mm間隔以内に平打ちとする。

4. 5. 10筋かい
1. 建造用合板以外の外壁下張り材を用いる場合は、外壁面の両端に最も近い耐力壁には、できるだけ筋かいを併用し、原則として圧縮にきくように入れる。
2. 筋かいは、寸法型式104及び106の2種類とし、タスキには入れないものとする。
3. 筋かいは、幅900mm以上の壁にわたるように入れ、筋かいを開口部の上下の壁まで使うことが望ましい。
4. 筋かいは、下枠に対して45°以上、たて枠2つ以上にわたるように入れる。
5. 筋かいは、たて枠、上枠及び下枠を欠き込んで入れる。この場合、施工順序によっては、頭つなぎを欠き込むことができる。
6. 筋かいの釘打ちは、筋かいから頭つなぎに、上枠、たて枠及び下枠に対し

4. 5-22図 筋かいの釘打ち
4.5.11 ころび止め
1. 構造用合板以外の外壁下張り材を用いる場合、外壁のたて枠相互間には、寸法型式204のころび止めをできるだけ設けるものとする。（4.5—20図参照）
2. ころび止めの釘打ちは、たて枠から2本のC N90を木口打ちるか、又は2本のC N75をころび止めからたて枠へ斜め打ちる。

4.5.12 階段、スキップフロアー回り等の壁構成
1. 階段室の踊り場又はスキップフロアー等を支持する壁の構成は、床面のレベルごとにそれぞれ独立の壁を設ける場合を除いて、次の2から5による。
2. たて枠に根太受け材（リボンプレート）を欠き込んで入れ、床根太をリボンプレートにのせ、たて枠に釘打ちする。（4.5—23図(A)参照）
3. リボンプレートは寸法型式106以上を用い、たて枠に2本のC N75を平打ちする。
4. 床根太は、たて枠に5本のC N90を平打ちする。
5. 壁及び床には、たて枠及び床根太と同寸のかいぎ兼ファイアーストップ材を入る。（4.5—23図(B)参照）

4.5—23図 スキップフロアーの構成例

4.5.13 住戸間の隔壁
連続建の住戸間の隔壁は、次のいずれかによる。
1. 2重壁とし、それぞれのたて枠の室内側には、厚さ12mmのせっこうボードを2枚、壁心側には厚さ12mmのせっこうボードを1板張る。
（4.5—24図(A)参照）

4.5—24図 連続建の住戸間隔壁
（A）2重壁とし壁心にせっこうボードを入れる場合
（B）2重壁とし壁心にせっこうボードを入れない場合

厚さ12mmせっこうボード

断熱材厚さ50mm（ロックウール又はグラスウール）

(C) 2重壁とし上下枠等に206を使用する場合

寸法型式206のたて枠

寸法型式204のたて枠

断熱材厚さ50mm（ロックウール又はグラスウール）

ロ．2重壁とし、それぞれのたて枠の室内側には厚さ12mmのせっこうボードを2枚張る。また室壁の壁内には厚さ50mm以上のロックウール（かさ比重0.04以上）又はグラスウール（かさ比重0.02以上）を入れる。（4.5—24図(B)参照）

ハ．2重壁とし、下枠、上枠、頭つなぎに寸法型式206を用い、たて枠は、寸法型式204を間隔500mm以内に千鳥に配置し、室内側に厚さ12mmのせっこうボードを2枚張る。また、室壁の壁内には、厚さ50mm以上のロックウール（かさ比重0.04以上）又はグラスウール（かさ比重0.02以上）を入れる。（4.5—24図(C)参照）

4.5.14壁枠組と床枠組及び土台のと緊結

1. 構造用合板が土台、端根太及び側根太まで釘打されている場合の壁枠組と床枠組との緊結は、下枠から端根太及び側根太へ C N90を、たて枠間に1本平打ちする。この場合、外壁下張り材の上下の縦手部分には6mm以上の目地をあける。（4.5—25図参照）

2. 構造用合板が、土台、端根太及び側根太に達しない場合の壁枠組と床枠組との緊結は下枠から端根太及び側根太へ C N90をたて枠間に2本平打ちする。

3. 内部の耐力壁と床枠組との緊結は、下枠から床根太又はころび止めへ C N90をたて枠間に2本平打ちする。
4. 外壁の隅角部隅柱及び外壁の開口部の両端に接する耐力壁のまぐさ受けが取りつくたて枠の下部の補強は次による。

イ. 2階にあっては、下階の壁の隅柱又はたて枠とを帯金物（S－65）を用いて繋結する。なお、帯金物は外壁下張材を介して取り付けることができる。

ロ. 1階にあっては、1階床を床枠組で構成する場合は土台及び端根太又は側根太を帯金物（S－65）で、1階床を 3.5.5（土間コンクリート床スラブ）項による土間コンクリート床スラブで構成する場合は、土台を隅角部は带金物（C P. L）で、開口部は帯金物（C P. T）で繋結する。なお、帯金物は外壁下張材を介して取り付けることができる。

ハ. 上記イ又はロにおいて構造用合板又は硬質木片セメント板を、2階にあっては、端根太又は側根太まで、1階にあっては土台まで、張りつめた場合は、帯金物又は帯金物を省略することができる。（4.5－25図参照）

4.5－25図 帯金物（S－65）を省略する場合の壁下張りの張り方

4.5.15「40㎡を超える区画」

4.5.15.1 一般事項「40㎡を超える区画」の壁枠組はこの項による。ただし、この項に掲げる事項に該当しないものについては、4.5（平家建又は2階建の壁枠組）の各項によら、

4.5.15.2 壁枠組と床枠組との繋結

1. 外壁下張材が土台、端根太及び側根太まで釘打ちされている場合の外壁と床枠組との繋結は、下枠から床枠組へCN90をたて枠間に2本平打ちする。

2. 外壁下張材が土台、端根太及び側根太に達しない場合の壁枠組と床枠組との繋結は、下枠から端根太及び側根太へ、2階にあってはCN90をたて枠間に2本、1階にあってはCN90をたて枠間に4本平打ちする。

3. 内部の耐力壁と床枠組との繋結は下枠から床根太又はとりび止めへ2階にあってはCN90をたて枠間に2本、1階にあっては、CN90をたて枠間に4本平打ちする。
4.6 3階建の壁枠組
4.6.1 一般事項 3階建とする場合の壁枠組は、この項による。ただし、この項に掲げる事項に該当しないものについては、4.5（平家建又は2階建の壁枠組）の各項による。

4.6.2 3階部分の壁

4.6.3 1階部分の耐力壁
1. 1階のたて枠相互の間隔は、寸法型式204を用いる場合は一般地の場合450mm以内とし、多雪地域の場合310mm以下とする。ただし、別記スパン表による場合はそれぞれ500mm以内とすることができる。
2. 1階の耐力壁に寸法型式204を用いる場合のたて枠には、原則として欠き込みを行ってはならない。なお、配線・配管などのための穴をあける場合は、その径を断面せいの1/4以下とする。

4.6.4 壁枠組と床枠組との緊結
1. 3階建とする場合の壁枠組と床枠組の緊結は、4.5.15.2（「40mを超える区画」の壁枠組と床枠組の緊結）の項と同様とする。
2. 1階の細ぎ出し窓の両端部に接する耐力壁のたて枠及びまきぎ受けと床枠組及び土台との緊結は次のようとする。
   イ. 1階を床枠組で構成する場合は、帯金物（SW-67）1枚を用いて緊結する。
   ロ. 1階を土間コンクリート床スラブで構成する場合は、ストラップアンカー（S A）を用いて緊結する。

4.7 平家建又は2階建の小屋組
4.7.1 一般事項 1. 小屋組を構成するたるき、天井根太は寸法型式204、206、208、210及び212の製材又は集成材とし、それら相互の間隔は500mm以内とする。
2. 小屋組の構成は次のいずれかによる。
   イ. たるき方式：たるき、天井根太及びむなぎによるもの。
   ロ. 屋根梁方式：耐力壁又は屋根梁によって支持されるたるきによるもの。
   ハ. トランス方式：合板ガセット又は vít釘（ネール・プレート）を用いたトランスによるもの。

4.7.2 陸屋根
4.7.2.1 たるき 1. 陸屋根のたるきのスパンは、別記スパン表による。
2. たるきの継手は、耐力壁又は屋根梁の上で行い、頭つなぎ又は屋根梁に両側からそれぞれ2本のCN75を斜め打ちする。継手の手法は、4.3.2の2（根根太の継手）と同じとする。

![4.7-1図 陸屋根の勾配のとり方](image)
3. 屋根排水のためにたるきを先細にする。ただし、たるきの削込みは30mmまでとし、それ以上の勾配を必要とする場合は、たるきの上に木片を当てて勾配をとる。（4.7－1図参照）

4.7.2.2 軒のはりだしだ

1. 軒をはり出す場合は、たるきと同寸の腕木、けらぱたるき及びもちおくりたるきを使って次のいずれかにより構成する。
   I. 軒の出が0.5m以下の場合、けらぱたるきを軒の出と同じだけ内部に伸ばして、たるきに取付ける。（4.7－2図（A）参照）
   II. 軒の出が0.5mを越え1m以下の場合は、けらぱたるきを2つのたるき間隔だけ内部に伸ばし、これを受けたるき及び腕木は2枚合わせとする。けらぱたるきは、2枚合わせたるきに根太受け金物で固定する。（4.7－2図（B）参照）

4.7－2図 陸屋根の軒の出し方

2. 腕木、けらぱたるき及びもちおくりたるきには、たるき、腕木又は破風板から2本のCN75を木口打ちする。

4.7.2.3 外壁との緊結

1. たるき、けらぱたるき、もちおくりたるき（以下「たるき等」という。）及び腕木と外壁の緊結は、頭つなぎ両側からそれぞれ2本のCN75を斜め打ちし、あおり止め金物（TW）をたるき、けらぱたるき及びもちおくりたるきに1本おきに入れるか、あおり止め金物（TS）をすべてに入れる。

2. たるき等に寸法型式208を用いる場合は、頭つなぎの位置にころび止めを設ける。ころび止めは、たるき等と同寸で換気口を設けたもの又はたるき等より1サイズ小さい寸法型式のものを用い、頭つなぎに2本のCN75をたるき等の相互間に斜め打ちする。（4.7－3図参照）

4.7－3図 たるきのころび止め
4.7.3 片流れ屋根
4.7.3.1 たるき
1. 片流れ屋根のたるきのスパンは、別記スパン表による。
2. たるきは、外壁の頭つなぎの位置で、幅75mm以上欠き込み、両側からそれぞれ2本のCN75を斜め打ちする。なお、欠き込みはたるきせいの1/3以内とする。（4.7－9図参照）

4.7.3.2 平小壁
1. 軒の高い部分は、長いたて枠を用いるか、又は平小壁を作っておきめる。（4.7－4図参照）
2. 妻側の外壁の上には、妻小壁を設ける。（4.7－5図参照）
3. 平小壁及び妻小壁と下部の外壁とが外壁下張り材によって接続されない場合には、たて枠1本おきに帯金物（S－65）を用いて平小壁及び妻小壁たて枠と下部外壁たて枠を接続する。
4. 妻側けきらは出す場合は、4.7.2.2（軒のはりだし）の項による。

4.7－4図 片流れ屋根の構成

(A) 長いたて枠による場合
(B) 平小壁による場合

4.7－5図 妻小壁の詳細

4.7.3.3 外壁との接
たるきと外壁との接結は、4.7.2.3（外壁との接結）の項による。

4.7.4 切妻屋根
4.7.4.1 切妻屋根の
構成
1. 切妻屋根は、たるき方式によって構成することを標準とする。（4.7－6図参照）ただし、次のいずれかの場合は屋根梁方式による構成とする。

4.7－6図 たるきによる切妻屋根

むなぎ
たるきつなぎ
たるき
妻小壁たて枠
天井根太
イ．勾配が2.5/10以下の場合。
ロ．むなぎの左右のたるきの長さ及び勾配が異なる場合。
ハ．すべてのたるきと天井根太の走行方向が異なる場合。
2. たるき及び天井根太のスパンは、別記スパン表による。ただし、小屋裏部屋を設ける場合の天井根太のスパンは、床根太のスパン表による。

4.7.4.2 天井根太
1. 天井根太から頭つなぎ又は梁に対しては2本のCN75を斜め打ちする。（4.7-7図参照）

2. 天井根太の継手は、耐力壁又は梁の上で、4.3.2（床根太の継手）の2と同様な手法で行う。ただし釘打ち本数は4.7.4.4（たるきと天井根太の釘打ち本数）の1と同様とする。
3. 継手部分の天井根太から頭つなぎ又は梁に対しては、CN75を両側からそれぞれ2本斜め打ちする。
4. 小屋裏部屋を設けない場合の天井根太を梁で支持する場合の梁のスパンは、天井根太の荷重を受ける梁に設ける別記天井荷重を支持する梁のまぐさのスパン表とする。
5. 梁の構成及び端部の支持方法は4.3.7（梁梁の）の4項と同様とする。ただし、天井根太を根太受金物又は根太掛けを用いて梁に取りつける場合は、向き合う天井根太同士を帯金物（S-90）等を用いて緊結し、その釘打ち本数は4.7.4.4（たるきと天井根太の釘打ち本数）の1と同様とする。（4.7-8図参照）
6. 天井根太面に開口部を設ける場合は4.3.5（床開口部）に準ずる。

4.7.4.3 たるき
1. たるきと頭つなぎの接合は次による。（4.7-9図参照）
イ．たるきは外壁の頭つなぎの部分で欠き込んでおさめる。ただし、たるきが寸法型式204の場合は欠き込みを行ってはならない。
たるきの欠き込み幅は原則として75mm以上、欠き込み深さはたるきのせいの1/3以内とする。

2. たるきから頭つなぎに対して4.7-9図 たるきのせんまりは2本のC N75を斜め打ちする。

3. たるきに寸法型式208以上を用いる場合は、4.7.2.3（外壁との繋結）の2項に準じてこねび止めを入れる。

4.7.4.4 たるきと天井根太の接合 たるきと天井根太の接合はC N90を平打ちしその本数は、4.7-1表による。

4.7-1表 たるきと天井根太の接合に必要なC N90の本数

<table>
<thead>
<tr>
<th>屋根葺材</th>
<th>瓦</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>たるきの寸法型式</td>
<td>204</td>
<td>206</td>
</tr>
<tr>
<td>2.5/10－3.5/10</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>4.5/10以下</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>5/10以下</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>7.5/10以下</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 部分的にたるきと天井根太の走向方向が異なる場合は、次による。

イ. 頭つなぎ部のたるきに最も近い天井根太（以下「隣接天井根太」という）からもちろん天井根太の一部を前項に準じてたるきと接合する。

ロ. もちしておく天井根太と隣接天井根太はもちろなくり天井根太から3本

4.7-10図 部分的にたるきと天井根太の走向方向が異なる場合の接結方法
のC N75を斜め打ちした後、隣接天井根太の隣りの天井根太との間にこれらと同寸のところし止めを入れ、帯金物(S—90)で緊結する。(4.7—10図参照)

3. たるき又は天井根太と外壁との緊結は、あおり止め金物(T W)をたるき又は天井根太1本おきに入れるか、あおり止め金物(T S)を全部に入れる。

4.7.4.5 みなぎ

1. みなぎは、たるきより1サイズ以上大きな寸法型式のものを用い、頂部は画数に沿って角度をつける。ただし、みなぎに代えて合板ガセットを用いる場合は、4.7.4.6（たるきつなぎ）のハによる。

2. たるきからみなぎへは、3本のC N75を斜め打ちする。(4.7—11図参照)

4.7.4.6 たるきつなぎ

たるきつなぎは次のいずれかにより設ける。

イ. たるきつなぎに木材を用いる場合は、天井裏スペースの頂部から3分の1以内の位置に、たるき2本おきに設ける。(4.7—12図(A)参照)寸法型式106のたるきつなぎは、それぞれのたるきに4本のC N65を、寸法型式204のたるきつなぎは、それぞれのたるきに3本のC N90を平打ちする。

ロ. 帯金物(S—90)をたるきつなぎに用いる場合は、屋根下張りを行った後、たるき1本おきに、それぞれのたるきに4本のZ N40を平打ちする。

ハ. 厚さ12mm以上の構造用合板ガセットをたるきつなぎに用いる場合は、それぞれのたるきに4本のC N65を平打ちする。この場合は、たるきの間に、みなぎと同寸のところし止めを入れる。ところし止めの釘打ちは、たるきから2本のC N90を木口打ちするか、ところし止めから3本のC N75を斜め打ちする。(4.7—12図(B)参照)

4.7—12図 たるきつなぎ

(A) たるきつなぎの取り付け方  (B) 合板ガセットのたるきつなぎの取り付け

4.7.4.7 けらばたる

1. 側壁にくらばを出さない場合の妻小壁は、妻小壁たて枠を欠き込んでたるきを納め、たるきより2本のC N75を平打ちし、妻小壁たて枠から頭
つなぎは3本のC N75を斜め打ちする。（4.7-13図参照）
2. 切妻屋根のもちおくりは、けらばたるきによって、4.7.2.2（軒のはりだし）の項に準じて次により行う。（4.7-14図A参照）

イ. 妻小壁は、妻小壁たて枠及び平使いの妻小壁上枠を用いて構成する。妻小壁上枠から妻小壁たて枠には、2本のC N90を木口打ちし、妻小壁たて枠から頭つなぎは3本のC N75を斜め打ちする。（4.7-14図B参照）

ロ. 妻小壁をあらかじめ構成する場合には、妻小壁下枠を用い、妻小壁下枠から妻小壁たて枠に2本のC N90を木口打ちする。

ハ. 妻小壁と下部外壁との緊結は、4.5.14（壁枠組と床枠組及び土台との緊結）に準ずる。

ニ. けらばたるきの相互間には、けらばたるきと同寸のころび止めを設ける。ころび止めの釘打ちは、けらばたるきより2本のC N90を木口打ちとするか、ころび止めからけらばたるきに3本のC N75を斜め打ちする。また、ころび止めから妻小壁上枠へはC N75をけらばたるき間に2本斜め打ちする。

ホ. けらばたるきと妻小壁との緊結は4.7.4.4（たるきと天井根太）の3項に準じて行う。

4.7-13図 妻小壁たて枠

4.7-14図 切妻のもちおくりの方法
4.7-15図 屋根開口

3.5-16図 屋根開口部のとり方

3階又は2階の床組

4.7-17図 たるきによるマンサード屋根の構成例

大井桁太

乾木

 Climbing the mountain to seek for the sun.
4.7.4.8 屋根開口

屋根に明かりとりの開口部を設ける場合は、開口部端たるき及びその開
口部端たるきを支える開口部開口部たるきは、それぞれ2枚合わせし、開
口部を仕上げる。（4.7—15、16図参照）

4.7.4.9 マンサード

屋根

屋根梁で構成する場合以外のたるきによるマンサード屋根は、たるきを
欠き込んでもやや緊結し、もやはすべてたるきつなぎで相互に緊結す
る。（4.7—17図参照）

4.7.5 屋根梁

4.7.5.1 製材及び集

成材による

屋根梁

1. 屋根梁のスパンは、別記スパン表による。
2. 合わせ屋根梁の釘打ち方法は、4.3.7（床梁）と同様とする。
3. 屋根梁の支持は次のいずれかにより行い、屋根梁の支持材は、1、2階
と同一位置に設ける。

イ. 屋根梁に平行する耐力壁で支持する場合は、合わせ屋根梁と同じ枚
数のたて枠（支持枠）として、4号系列の屋根梁を用いる場合、寸法型
式404を屋根梁の支持材とする。屋根梁から屋根梁の支持材には、
両側から4本のC N75を斜め打ちし、耐力壁のたて枠から屋根梁の
支持材へは、C N90を上・下端2本、中間部600mm間隔以内に千鳥
に平打ちする。

屋根梁と耐力壁は、帯金物（S=45）を用い、6本のZ N40を平打
ちする。（4.7—18図（A）参照）

4.7—18図 屋根梁の支持方法

(A)屋根梁に平行する耐力壁で支持

(B)屋根梁に直交する耐力壁で支持

ロ. 屋根梁に直交する耐力壁で支持する場合は、合わせ屋根梁と同じ枚
数のたて枠として、4号系列の屋根梁を用いる場合は、寸法型式404を
屋根梁の受け材とする。平部分の耐力壁の上部には、4.7.4.7（けら
ばたるきと妻小壁）の2に準じて妻小壁を設ける。
屋根梁の受け材には、両側の補強たて枠からC N90を上・下端2本、
中間部600mm間隔以内に千鳥に平打ちする。（4.7—18図（B）、4.7—19
図参照）
4. 屋根梁を用いる場合には、4.7.5.1（製材及び集成材による屋根梁）の3による支持点の上で行い、維手の補強は、屋根梁の両側から4.3.2（床根太の維手）の2のロ、ハ又はニによって行う。
なお、維手部分には、梁の受け材として1、2階とも同じ位置に1本の寸法型式404と2本の寸法型式204を入れる。
5. 屋根梁を用いる場合のたるきの接合は、次のいずれかによる。
イ. 屋根梁にたるきのせる場合は、4.3.2（床根太の維手）の2と同じとする。（4.7—20図(A)、(B)参照）
ロ. 屋根梁にたるきを接合する場合は、4.3.7（板梁）の5と同じとす る。（4.7—20図(C)参照）

4.7—20図 屋根梁とたるきのおさまり

4.7.5.2 合板ボックススビーム
1. 屋根梁に合板ボックススビームを使用する場合のスパンは別表スパン表において。
2. 合板ボックススビームの屋根梁の支点は次による。（4.7—21図参照）
イ. 合板ボックススビームの支点となる部分に寸法型式404を配置し、合板ボックススビームの幅と同じになるように合板かい木を設ける。
ロ. 壁の合板ボックススビーム支点直下のたて枠は寸法型式204の2枚合わせとするか寸法型式404とする。
ハ. 寸法型式404材への釘打ちは妻小壁下枠から4本のCN90を木口打ちし、添えた枠から300mm間隔にCN90を平打ちとする。
寸法型式404材の上に合板ボックススビームを設け、添えた枠から200mm間隔にCN90を平打ちし、合板ボックススビームの下弦材には4本のCN90を平打ちする。
ニ．妻小壁上枠から合板ボックススビームへは2本のC N75を斜め打ちする

4.7－21図 合板ボックススビームによる屋根梁の支持方法

4.7.6 トラスによる切り妻屋根

1．合板ガセットによるトラスは、別記トラスの釘打表及びスパン表による。これ以外のトラスは、別途構造計算等により安全を確かめるものとする。

2. 構造計算等により安全を確かめた場合は、合板ガセットに替えて帯釘を使用することができる。

3. トラスと外壁との連結は、トラスから頭つなぎに、両側からそれぞれ2本のC N75を斜め打ちし、あおり止め金物（T W）をトラス1本おきに入れるか、あおり止め金物（T S）を全部に入れる。

4. トラスによる切り妻屋根のもちおくりは、4.7.4.7（けらばたるきと妻小壁）の2に準ずる。

5. トラスには、振れ止めとして、むねの部分にころび止めを、その他の部分に寸法型式104又は204の連続材を入れ、トラスにそれぞれ2本のC N75を平打ちする。

4.7－22図 隔たるき受けトラス
4.7.7 たるきによる寄棟屋根

1. たるきによる寄棟部分は、隅たるき、妻たるき、けらばたるき、もちおくりたるき及びこれらを受ける隅たるき受けトラスにより構成する。 （4.7－22図参照）

2. 隅たるき受けトラスには、隅たるき及び妻たるきを受ける隅たるき掛けを設ける。隅たるき掛けに用いる製材の寸法型式は、トラス上弦材と同じとする。 （4.7－23図参照）

4.7－23図 隅たるき掛け

3. 隅たるき受けトラス及び隅たるきの、積雪30cm以下の地域の場合における使用部材及び各仕口部分の釘打ち本数は、別記隅たるき受けトラス（寄棟屋根）の釘打ち表による。これ以外については、別途構造計算等により安全を確かめるものとする。

4. 隅たるき、妻たるき、けらばたるき及びもちおくりたるきは、それぞれ両側から4本のCN75を外壁の頭つなぎに斜め打ちする。ただし、もちおくり天井根太を4.7.4.4（たるきと天井根太）に準じて設けた場合は、けらばたるき及びもちおくりたるきの外壁頭つなぎへの釘打ちを2本のCN75の斜め打ちとすることができる。隅たるきには全部、その他のたるきには1本おきにあおり止め金物（TW）を用いて、外壁に緊結し、あおり止め金物（TS）を用いる場合は全部に入れる。

4.7－24図 トラスによる寄棟のおさまり例
4.7.8 ドラスによる寄棟屋根

1. 平部分にトラスを使用し、妻部分をたるきで構成する場合には、4.7.7（たるきによる寄棟屋根）に準ずる。
2. 平頂トラス、隅むねトラス、妻付けトラス及び配付けトラスによって寄棟をつくる場合は、4.7-24図の例による。この場合のトラスは、構造計算等によって安全を確かめるものとする。

4.7.9 たるきによる入母屋根

1. たるきによる入母屋部分は、隅たるき、けらたるき、もちおくりたるき及びこれらを受けるけらば受けトラスにより構成する。（4.7-25、26図参照）

4.7-25図 けらばたるき受けトラス

4.7-26図 入母屋の構成図

2. けらばたるき受けトラスには、隅たるき及びけらばたるきを受けるけらばたるき受けを設ける。けらばたるき受けに用いる部材寸法は、トラス上弦材と同様とする。

3. けらばたるき受けトラス及び隅たるきの、積雪30㎜以下の地域の場合における使用部材及び各仕口部分の釘打ち本数は、別記入母屋屋根の釘打ち表及びけらばたるき受けトラスの釘打ち表による。これ以外については、別途構造計算等により安全を確かめるものとする。

4. 隅たるき、けらばたるき、もちおくりたるきの釘打ち及び外壁への締結は、4.7.7（たるきによる寄棟屋根）の4と同様とする。

4.7.10 小屋裏、軒裏換気

1. 小屋裏換気口は、独立した小屋裏ごとに2ヵ所以上換気有効な位置に設ける。なお、換気口の有効換気面積等は次による。

イ. 児妻壁にそれぞれ換気口（吸排気両用）を設ける場合は、換気口をできるだけ上部に設けることとし、有効換気口面積の合計は天井面積の1/300以上とする。

ロ. 軒裏に換気口（吸排気両用）を設ける場合は、有効換気口面積の合
計を天井面積の1/250以上とする。

八．軒裏に吸気口及び妻側に排気口を垂直距離で910mm以上離して設ける場合は、有効換気口面積をそれぞれ天井面積の1/900以上とする。

二．排気筒その他の器具を用いた排気口は、できるだけ小屋裏頂部に設けることとし、排気口の有効換気面積は天井面積の1/1,600以上とする。また、軒裏等に設ける吸気口の有効気流面積は天井面積の1/900以上とする。

4.7—27 換気口の取り方例

イ．

ロ．

ハ．

吸気口 排気口
1/900以上 1/900以上

二．

吸気口 排気筒等
1/900以上 1/1,600以上

4.7—28図 吸気口及び排気口の設置例
2. 小根裏換気口には、雨、雪、虫等の侵入を防ぐためのスクリーン等を堅固に取り付ける。

4.7.11 陸\下\張り

1. 陸屋根下張りは、厚さ9㎜以上の構造用合板又は厚さ12㎜以上のパーティクルボードとする。

2. 構造用合板は表面の織維方向が、パーティクルボードは長手方向が、たるみ又はトラスの上弦材に直交するように張る。

3. 陸屋根下張りは干鳥張りとし、3本以下のたるみ又はトラス上弦材にかかるようにし、軒先部から張り始め、むなぎ頂部で寸法調整する。

4. 陸屋根下張り材の縫合部分には、寸法型式204の2つ割り以上（40×40）の受け材を入れる。ただし、次のいずれかの場合は省略することができる。

   1. たるみ又はトラス上弦材の間隔を310㎜以下とし、厚さ12㎜以上の構造用合板を用いる。
   2. たるみ又はトラス上弦材の間隔を500㎜以下とし、厚さ15㎜以上の構造用合板を用いる。
   3. たるみ又はトラス上弦材の間隔を500㎜以下とし、厚さ12㎜の構造用合板で日合連で定める縫合（本ざね）加工の規格に適合するものを用いる。

5. 陸屋根下張材に厚さ9㎜〜12㎜のものを用いる場合はCN50を、また、厚さ15㎜以上のものを用いる場合はCN65をそれぞれ周辺部150㎜間隔、
4.7.12 「40㎡を超える区画」
4.7.12.1 一般事項 「40㎡を超える区画」とする場合の当該小屋組はこの項による。ただし、この項に掲げる事項に該当しないものについては前各項による。
4.7.12.2 壁枠組との緊結 1. たるき相互間にはすべてこころび止めを設ける。こころび止めは、たるきと同寸で換気口を設けたもの又はたるきより1サイズ小さい寸法のものとする。
2. こころび止めの釘打ちは次による。
   イ. たるき又は天井根太とは2本のCN75を斜め打ちする。
   ロ. 2階外壁の頭つなぎには、たるき間でそれぞれ2本のCN75を斜め打ちする。

4.8 3階建の小屋組
4.8.1 一般事項 3階建とする場合の小屋組は、この項による。ただしの項に掲げる事項に該当しないものについては、4.7（平家建又は2階建の小屋組）の各項による。
4.8.2 小屋面の開口部 1. 小屋の屋根又は外壁（以下「屋根等」という）に設ける開口部の幅は2m以下とし、その幅の合計は開口部の存する屋根等の下端の長さの1/2以下とする。
2. 屋根等に幅900mm以上の開口部を設ける場合の補強は次のいずれかによ
   り。
   イ. まがさ及びまがさ受けを設ける。なお、まがさ及びまがさ受けの構成は4.5.6（耐力壁の開口部）の項に、まがさのスパンは別記スパン
4.8.3 壁枠組との緊結
外壁等と頭つなぎとの緊結は4.7.12（「40㎡を超える区画」）と同様とする。
5. 屋根工事

5.1 下ぶき

5.1.1 アスファルトルーフィングは1巻重量22kg、アスファルトフェルトは1巻重量20kgとする。
1. ふき方は次のような。
   - 線は120mm、横は100mm以上重ね合わせる。
   - 留めつけは縦手通りは間隔を300mm内外に、その他は要所に座当て釘打ちとするが又は、ダッカー、ステープルで留めつける。
   - むねは左右折り戻す。
   - あおり板、かわら棒及びざななどは張り包まない。
   - シワ又はゆるみが生じないように十分注意して張り上げる。

5.1.2 合成樹脂系などの下ぶき材

5.2 着色亜鉛鉄板ふき
（亜鉛鉄板ふきを含む）

5.2.1 材料
1. 鉄板の品質は、JIS G 3312（着色亜鉛鉄板）又は JIS G 3302（亜鉛鉄板）に適合するもので、種類は屋根用とする。ただし、厚さは、特記がなければ一般の部分は0.35mmとして、谷の部分及びつり子等は、着色亜鉛鉄板0.4mmとする。なお、着色亜鉛鉄板を使用する場合、塗膜の欠損部分の補修等については、各製造所の仕様による。
2. 留め付けに用いる釘は、亜鉛めっき釘（亜鉛めっきしたカラー釘を含む。）とし、長さ25mm以上とする。

5.2.2 工法
1. 一文字ふきの場合は鉄板を900mm×360mmの大きさに切断して使用することを標準とする。
2. 加工は、原則として機械加工とする。ただし、屋根ふき面積が少ない場合又は現場取合い加工の場合は手加工とすることができる。
3. 折り曲げに際しては、着色亜鉛鉄板の場合は塗膜に損傷剥離が生じないよう、亜鉛鉄板の場合はめっき及び地はだにき裂が生じないように十分注意して加工し、いずれも箔形のすみなどのは八千代折りとする。
4. はがきせぬ部は、こはせ掛け（引掛け又はつかみ合せ）とし、こはせの掛かり及び折り返し幅は、下はせ16mm以上、上はせ12mm以上とする。
5. つり子は、幅30mm、長さ70〜80mm内外とし、その取付け個数は下表によるものとし、釘打ちとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>種類</th>
<th>別</th>
<th>つり子取付け個数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一文字ふき</td>
<td>板1枚につき4個</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>谷ふき板</td>
<td>板1枚につき板耳2個づつ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>板包み板</td>
<td>板1枚につき板耳2個づつ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>網袋</td>
<td>板幅200mm以上2個</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

6. 釘打ちの釘頭は、すべてシーリング処理とする。
7. 通し付け子は、長さ900mm内外とし、継手は突付け、両端及びその中間を間隔200mm内外に釘打ちとし、通りよく取付ける。また、隅角部及びむねの取合いは、折り曲げ又は重ね掛けとする。
8. 軒先込み板は、長さ900mm内外とし、継手は、こはざ掛けとする。
9. 飛び付け子は、幅20mm内外とし、両端及び中間を間隔250mm内外に釘打ちとする。

5.2.3 文字ぶき
1. 平ふき板は、軒先及びけらばは唐草に、谷の縁は谷板に、隅り合った板どうし相互のはざをつかみ込みはざ掛けとし、水流れ方向の継手は千鳥に設ける。
2. むね部分は、5.2.6（むね包み）、壁当たり部分は5.2.7（壁との取合い）項による。

5.2.4 軒先及びけらば
1. 軒先及びけらばは、唐草を広小舞又は登りよどの端部に釘留めとする。釘の長さは32mm以上とし、間隔は300mm程度とする。
2. 唐草の継手は、端部を各々あだ折りしたものを長さ60mm以上に重ね合わせて釘留めとする。

5.2.5 谷ぶき
1. 谷ぶき板は、原則として着色亜鉛鉄板のコイル（帯板）を用い全長通しぶきとする。なお、平板を用いる場合は大きさ450mm×900mmとする。いずれも、底を谷形に折り曲げ両耳折り返しとし、継手は巻きこはざ掛け、両耳はつり子留めとする。ただし、日本瓦ぶきなどの場合は、両側谷縁ぎみに立ち上げ段付けとし、釘打ち又はつり子留めとする。
2. 谷ぶきの軒先は、次による。
   イ. 付子又は捨板に引っ掛け、軒どい内にたわめ下げ、むねぎわは、あおり板下、同様な下に立ち上げる。
   又、日本瓦ぶきなどの場合は、築地むねおおい下などに立ち上げ、深くさし込み、いずれも耳を折り返し、釘打ち、又はつり子留めとする。
   イ. 雨谷の頂部は、ふき板を峰でつかみ合わせ又は馬乗り掛けにする。

5.2.6 むね包み
1. むね包みの両耳は、通し付子につかみ込むか、あだ折りとして屋根板面まで折り下げる。
2. むね包みの継手はこはざ掛けとする。
3. むね包みはむね板の両側面に長さ32mm以上の釘で、間隔300mm内外に留め付ける。通し付子の場合もこれに準ずる。

5.2.7 壁との取合い
1. 平ふきで屋根が壁に突付く場合は次による。
   イ. 壁面に高さ40mm以上の雨押え受材を設ける。
   ロ. 平ふき板は、雨押え受材の高さまで折り上げ、上端に水返しをつけて雨押え受材に間隔450mm内外に釘留め、又はつり子留めとする。
   ハ. 雨押え板を取付けたあと、雨押え板を雨押え包み板で包む。
   ニ. 雨押え包み板は、壁にそって120mm以上立上げ、他端は屋根面まで折り上げ、先端はあだ折りとする。
   ポ. 雨押え包み板は、立ち上げ部分と雨押え板の端部に600mm以内の間隔で釘留めとする。
2. 日本瓦ぶきなどの場合の取合いは次による。
   イ. むねが壁に突付く場合は、すべて谷又はきわ谷を設け、谷ぶき板が壁
に突付く側は雨押え下端まで立ち上げ、間隔600mm内外に釘打ちする。谷ふき板のきわ綫側は、5.2.5（谷ふき）の項による。
　ムネが壁にそえ付く場合及び突付く場合、いづれも雨押え板を雨押
　え包み板で包む。雨押え包み板の壁際の立ち上げ、留め付けなどは
　前項のニ及びホによる。

5.3 長天亜鉛鉄板ぶき
5.3.1 材 料　1. 長尺亜鉛鉄板の品質は、JIS G 3312（着色亜鉛鉄板）又は JIS G 3302
　（亜鉛鉄板）に適合するもので種類は屋根用とする。ただし、特記がな
　ければ着色亜鉛鉄板のコイル（帯板）とする。
2. 鉄板の厚さは 5.2.1（材料）の項による。
3. 留め付け用釘は亜鉛めっき釘（亜鉛めっきしたカラー釘を含む。）とし
　長さは、屋根材の留め付けに用いるものは38mm以上、その他は32mm以上
　とする。
4. その他の附属材料は各製造所の仕様による。なお、監督者がいる場合
　は、その指示による。

5.3.2 一 般 工 法　1. 折り曲げ及びはぎ合せは、5.2.2（工法）の項の2、3及び4になる。
2. 平ふき部分、かわら棒包み板及び軒先包み板の類の付け子又はつり子は
　原則として通し付け子又は通しげり子とする。
3. 釘打ちの釘頭は、すべてシーリング処理とする。
4. その他の工法とする場合は、各製造所の仕様によることとし、特記によ
　る。

5.3.3 かわら棒ふき　1. 心木がある場合は次による。
　イ．かわら棒の間隔は350mm又は450mmを標準とする。ただし、強風地
　域では実情に応じて間隔を狭くする。
　ロ．心木は、屋根下張材を通じてたる木に釘留めとする。釘は、たる木
　に40mm以上打ち込むものとし、間隔は、軒先、けらば及びむね附
　近では300mm以内、その他の部分は600mm以内とする。
　ハ．溝板の両耳は、かわら棒の心木の高さまで立ち上げたうえ、かわら
　棒包み板をかぶせ、包み板とも心木側面から釘留めとする。釘長さ
　は、38mm以上とし間隔は、軒先、けらば及びむね附近では200mm
　以内、その他の部分は450mm以内とする。なお、溝板に縦手を設ける
　場合は巻きはぜとする。
　ニ．かわら棒の木口包みは、椭鼻仕舞とする。椭鼻はかわら棒心木の木
　口面に釘留めし、溝板の両耳部分は、かわら棒包み板の端部ともど
　も椭鼻につかみ込む。
　ホ．軒先及びけらばは、5.2.4（軒先及びけらば）の項により、取付け
　された唐草の端部に溝板を十分つかみ込む。けらば部分は、けらば
　止め釘を間隔300mm以内にたる木へ40mm以上打ち込んで留め付け
　る。
　ヘ．ムネ部分は、溝板端部を八千代折りにして心木の高さまで立ち上
　げ、水返しをつけ、むね板を心木に釘留めとする。
　ト．むね包みは、むね板寸法に折り合わせたものを両端あで折し、か
　わら棒ごとに切り合わせて溝板端部まで折り下げ、かわら棒の頂部
は、10mm程度を残してかわら棒にそわせる。縦手並びに釘の寸法及び間隔は、5.2.6（むね包み）の2及び3の項による。

チ。特殊工法によるものは各製造所の仕様によることとして、特記による。

2. 心木がない場合は、前項のイ、ホ及びトによるほか次による。

イ。溝板を所定の位置に並べたあと、通しぶじ子を溝板相互間にはめるも

ま、亜鉛めっき座金付き釘で、たる木に留め付ける。釘は40mm以上

打ちこむ長さのものを用い、間隔は軒先けらを及びむね附近で

は、200mm以内、その他の部分では、450mm以内とする。

ロ。かわら棒包み板の留め付けは、通しぶじ子になじみ良くはめ込み通

しぶじ子及び溝板の耳につかみ込み、巻きはぜとし、はぜ締め機械

などにより、均一かつ十分に締めつける。

ハ。かわら棒の木口包みは、桟鼻仕舞とする。桟鼻は、溝板の底部に差

しが込み、溝板及びかわら棒包み板の端部は桟鼻につかみ込ませる。

ニ。むね部分は、溝板端板を三千代折りにして、むね板受材の高さまで

立ち上げ、水返しをつける。むね板受材に釘留める。

ホ。特殊工法によるものは、各製造所の仕様によることとして、特記によ

る。

5.4 日本かわら及びセ

メントかわらふき

5.4.1 材 料 1. 日本がわら

粘土がわらの品質は、JIS A 5208（粘土がわら）に適合するもので、

特記なければ和形のの葉がわら（壊れがわらを含む。）又はいぶしが

わらとする。なお、やく物その他はでき合い形で、いずれも留め付穴付

きとする。

2. セメントがわら

セメントがわらの品質は JIS A 5401（セメントがわら）に適合するも

ので和形セメントがわらとする。

3. 雪止めがわら等特殊がかわらとする場合は、特記による。

4. 釘及び緊結線は次表による。

<table>
<thead>
<tr>
<th>釘及び緊結線 (mm)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>釘 鋼製、又は鉄製で亜鉛めっき（長さ45内外、径2.4内外）</td>
</tr>
<tr>
<td>緊結線 銅線（径0.9内外2条）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5.4.2 工 法 1. ふき方は次による。

イ。谷縁の切り落し、その他の切り口は、なるべく平らにする。

ロ。さんがわら、軒先がわら、ケラなどがわら、谷縁がわらは、地通りよ

くふき足などもむらなくむねまでふき詰める。

ハ。本むねは、のし3畳、すみむねは、のし2畳とする。

ニ。のしがわら、鬼がわらなどは、南はんしきい又は良土（荒木田土

の類）を間接きなく詰めて伏せ込む。ただし、八型のむねがわらの

場合は、のしがわらを省く。
5.5 厚形ストレートふき

5.5.1 材料 1. 厚形ストレートの品質は、JIS A 5402（厚形ストレート）に適合するもので特記がなければ、和形厚形ストレートとする。なお、やく物その他是でき合い形としけれども留め付け穴付きとする。

2. 釘及び緊結線は 5.4.1（材料）の項 4. による。

5.5.2 工法 1. 下記以外は、5.4（日本がわら及びセメントがわらふき）の項による。

2. 平ふきのストレートは 1 枚ごとに釘 2 本以上で留め付け、巻ねままでふき詰める。

3. ま縦ストレートは、1 枚ごとに釘及び緊結線 2 条ずつで留め付ける。

4. むねおおいは、モルタルを飽い、なじみよく伏せ渡し、1 枚ごとに地むねに取付けた緊結線 2 条ずつで引き締め、こうかい釘差しモルタル押えとする。

5.6 特殊屋根板 住宅屋根ふき用石綿ストレート等の特殊屋根板については、各製造所の仕様によることとして特記による。

5.7 水切り及び雨押え 材料は 5.2.1（材料）の項より厚さは 0.40mm とする。所要寸法に裁ち、板端をに向けて折り返し、要所にくぎ打ちしシーリング処理とする。
壁際立ち上がりは下地材裏に 60mm 以上立て、雨仕舞良く施工する。

5.8 とい

5.8.1 材料 硬質塩化ビニル雨どいの品質は、JIS A 5706（硬質塩化ビニル雨どい）に適するものとし、着色亜鉛鉄板は、JIS G 3312（着色亜鉛鉄板）に、亜鉛鉄板は、JIS G 3302（亜鉛鉄板）に適合するもので、種類は建築外板用とする。なお、着色亜鉛鉄板及び亜鉛鉄板の厚さは特記がなければ 0.30mm 以上とする。

5.8.2 工法 1. 硬質塩化ビニルの雨どいは次による。

2. 軒どいの継手は、重ねかけとし、接着剤を重ねかけの両面に塗布して圧着する。すみ、かどは継手と同様に重ね掛け大留めとする。木口せき板は軒どいと同厚のものとし継手と同様に組合せる。

2. 軒どいの取付け勾配は、1/200 以上とし、一体金物になじみよくめ込み、ねじれ、ゆがみのないように通しよく架け渡し、緊結線 2 条づつと一体金物に緊結する。

2. たてどいの差し込み継手は、接着剤を用いて 30mm 以上差し込む。
差し込みの際、加熱による変色を生じさせないように注意する。とい受け金物ごとに共板製作がり止めを2箇つつ接着剤を用いて固定する。

ニ。よびどい（あんこう）は軒どいに雨仕舞よく堅固に取付け、たてどいに45mm内外差し込む。

2. 着色亜鉛鉄板及び亜鉛鉄板の雨どいは次による。

イ。軒どいの手組は出しみ及び入しみ15mm以上、その他は30mm以上かさねかけとし、継手両面をはんだ付け、両耳は空まきとする。木口せき板は、とい板に10mm以上折り曲げ添え付け、両面をはんだ付けとするかしばりに仕上げる。

ロ。軒どいの取付け勾配は前項の□に準ずる。

ハ。たてどいのはぎ目は5mm以上のこはせかけとし、継手は上どいを下どいに50mm内外さし込み、継ぎ目ははんだ付けとする。とい受金属上に共板製作がり止め2箇をはんだ付けとする。取付けは、のはぎ目を見ぬがくに向け、通しよ立て込み、金物でゆるみなく留め付ける。

ニ。よくどい（あんこう）は角形とし、のはぎ目は10mm内外折り曲げて重ねかける。取付けは、上部軒どいの両耳につかみかけとし、下部たてどいの円形にならゆる60mm以上さし込み通しよ立て込みされ堅固に取付けする。

ホ。流しどい（はいどい）は角形とし軒どいに準じて工作する。軒先は、軒どい内に曲げ下げ、両端には長さ250mm内外のふち板を、中間には幅25mm内外のつなぎ板をはんだ付けとする。取付けは、屋根上に引通しよく、ねじれのないように置き渡し、両端及びつなぎ板1箇所おきにことに留め付け用鉄線を用いて屋根ふき材取付け用釘の類に連結し固定する。

ヘ。亜鉛鉄板の軒どいの内面はペンキ塗り又はコールタール塗りとする。

5.8.3 とい受金物
1. 軒どいの受金物は、半円型又は角型とし、取付けは、勾配を正しく間隔700mm内外に堅固にたる木又は鼻かくしに取付ける。

2. たてどいの受金物は、丸型、角型の丁番式又は硬質塩化ビニル製のデンデンとし、取付け間隔は1,000mm内外に位置・間隔を正しく堅固に取り付ける。

3. 受金物の釘部は、亜鉛めっきどぶ漬けしたものとする。

5.8.4 雨水の処理
たてどいの下部は、排水管に直結するか又は、コンクリート製のとい受けを据えつける。
6. 給排水及びガス設備工事

6.1 一般事項
1. 床下配管は、躯体工事の前にない、室内配管は、外装及び屋根下張りが完了した後に行う。
2. 火災及び穴あけについては4.3.8（床屋材の火災及び穴あけ）及び4.5.8（耐火壁の枠組材の火災及び穴あけ）による。
3. 配管は、原則として鉄板とて枠の間又は根太と根太の間で行ない、共鳴音及びふれを防止するため、各種の止め金物又は補助木材などにより完全に鉄板又は根太に固定する。
4. 本工事は、水道事業者及びガス事業者の諸規程の適用を受ける場合はこれによる。

6.2 給水設備工事
6.2.1 材料
1. 本工事に使用する管類及び継手類の品質は、JIS H 4312（水道用鉄管）、JIS K 6742（水道用硬質塩化ビニル管）、JIS K 6743（水道用硬質塩ビニル管締手）、JWWA（日本水道協会規格）、K 116（水道用硬質塩ビニル管コンパクト管）に適合するもの、又はこれと同等品以上のものとし、水道事業者の定めるところによる。
2. 給水せんの品質は、JIS B 2061（給水せん）に適合するもの、又はこれと同等品以上のもので、クロームめっき仕上品とする。
3. 弁類は、10 kg/cm²の水圧試験に合格したものとする。
4. 水道メーターは、計量法（S 26、法第207号）の規定に基づく検定合格品とし、水道事業者の指定がある場合又は承認を要する場合はそれによる。
5. その他の材料の品質は、JISに適合するもの、又はこれと同等以上のものとし、水道事業者の定めるところによる。

6.2.2 配管
管の地中埋設部、コンクリートブロック及びコンクリートの埋設部は、その材質に応じ有効な腐食防止のための措置を講ずる。

6.2.3 保温措置
1. 保温材は、JIS A 9505（グラスウール保温材）、JIS A 9511（フォームポリスチレン保温材）又は、JIS A 9514（硬質ウレタンフォーム保温材）に適合するもので、それぞれグラスウール保温材、フォームポリスチレン保温材、硬質ウレタンフォーム保温材とするか、顕毛フェルト類とする。
2. 施工については、特記がなければ、JIS A 9501（保温保冷工事施工標準）に基づき行う。

6.3 排水設備工事
6.3.1 材料
本工事に使用する管類及び継ぎ手類の品質は、JIS K 6741（硬質塩化ビニル管）、JIS G 5525（排水用鉄管）、JIS H 4311（鉄管）、JIS R 1201（管（直管））、JIS R 1202（管（異形管））及びJIS K 6739（排水用硬質塩化ビニル管締手）に適合するもの、又はこれらと同等以上のものとする。

6.3.2 工法
1. 室内排水管は、金属管又はビニル管を使用し、床下横引管は75mm径以上のビニル管又は90mm径の鉄管を用い、十分勾配をとり、管の接合はモルタルを入念にかきこみ、つば口はモルタルの目塗りをし、漏洩に接続
する。
2. 浴室の排水孔には、クロームめっき目皿を用い、オーナートラブルを設ける。
3. 溜水は割れ又は砂利地敷を施工のうえ、コンクリート現場打溜木又は市販品コンクリート既製品溜木を掘ってつける。ふたは鉄線入りコンクリート既製品とする。
4. 現場打溜木の場合は次による。
   1. 内面及び見えるかがりは、防水モルタル仕上げとし、泥溜めは15cm以上とする。
   2. 排水管と溜木との取り合いは、周囲にモルタルを詰め目塗りし、入念に金具で仕上げる。
   3. 溜木から溜木あるいは、溜木から排水流下までの接続排水管は、75
   4. ㎜径以上のビニル管又は90㎜径銅管とする。
   5. 陶管は、勾配を十分にとり布設する。なお接続部分はセメントモルタルを入念に固めること。
5. 汚水桝は次による。
   1. 汚水桝は、溜木と区別して用いる。
   2. 汚水桝の底部に、汚水が流れやすいように、接続管に応じたインパートを設け、インパート周囲は防水モルタルで適当な勾配をつけ
   3. 汚水桝のふたは、錆鉄製既製品又は、鉄線入りコンクリート既製品
   4. とし密閉できるものを用いる。
6. 汚水桝及び排水管を埋設する際は、施設地域の凍結深度以上とする。

6.4 ガス設備工事

6.4.1 一般ガス工事
ガス事業法、その他の関係法令及び共給事業者のガス供給諸規定に基づいて施工するものとし、沸騰器、カラン及びその他の器具もすべてこれ
に従い設置する。

6.4.2 その他（プロパン・ブタン・天燃ガス）のガス
工事
1. 高圧ガス取締法、消防法、老地方公共団体「家庭燃料プロパン取扱基準要綱」及び火災予防条項による燃焼器具設置基準等に従って施工する。
2. 施工にあたっては、高圧ガス作業主任免状を有する者又はこれと同等以上の経験をもつ責任技術者を定め、責任施工とする。

6.5 ダクト工事
1. 配管スペースは、パイプシャフト、ダクトスペース、天井、根太及び
   2. て枠間、下り天井の空隙で行なう。
2. ダクトは、亜鉛メッキ鉄板又はアルミ薄板製のものとし、厚さ25㎜のゲ
   3. ラスウール等の保温材で覆う。なお、フレキシブル保温ダクト又はクラ
     スウールダクトを用いてもさしきつかえない。
3. ダクト配管は、原則として非耐力壁内で行なう。
7. 電 気 工 事

7.1 一 般 事 項
1. 配線工事は、配管工事が完了した後に行うものとする。
2. 本仕様書に記載のない事項でも工事上並びに技術上当然必要な材料は補足し、選択なく施工する。

7.2 法令、規程などのじゅん守
電気事業法、電気設備に関する技術基準を定める省令、電気用品取締法、電気工事士法、その他関係法令及び（社）日本電気協会が定める内線規程に基づいて施工する。

7.3 材 料
器具及び材料は、JIS の制定のものは、JIS に適合するものを、電気用品取締法の適用を受けるものは、型式承認済みのものを使用する。

7.4 配 線 位 置
壁に穴をあけ配線する場合は、内外装の造作工事あるいは請けけなどの釘で配線に傷がつかないようにし、原則として腰より低い部分の壁を使用する。欠き込み及び穴あけについては、4.5.8（耐力壁の枠組材の欠き込み及び穴あけ）による。又、天井照明のため根太の欠き込み及び穴あけを必要とする場合は、床根太の欠込みと穴あけ）によるが、できるだけ根太に平行して配線する。

7.5 接続部の点検位置
配線の接続部は天井面には設けず、押入れやクロゼット等の壁に設け容易に点検できる位置とする。

7.6 補 強
天井照明や配電盤などを固定するため、配線時に寸法型式204以上の部材をたて枠又は根太間に入れて補強し、器具をしっかり固定する。（7.5－1 図参照）

7.7 取 付 け 位 置
1. 電灯器具、スイッチ、コンセントなどの取付け位置は、建築主又は監督者と打合せて決定する。
2. 天井又は壁部の配線等の工事にあたっては、断熱材の施工に支障のないように充分注意する。

7.8 電 話 配 管 工 事
電話配管工事は、電気工事と電気通信設備電気配管の設計基準に従い、施工する。なお、配管内は予備線を挿入する。

7.9 引 渡 し
工事完了後、電気事業者及び関係官庁の試験に合格し、受電の後、引き渡しをするものとする。

7.5－1 図 照明器具の固定のための補強
8. 断熱工事

8.1 一般事項

8.1.1 断熱構造とする部分

1. 断熱構造とする部分は次による。

- 住宅の屋根（小屋裏又は天井裏が外気に通じていない場合）又は屋根の下の天井（小屋裏又は天井裏が外気に通じている場合）。
- 外気等（床裏を含む）に接する壁及び床。

2. 前項にかかわらず断熱構造としない部分は次による。

- 物置、車屋及びその他の部分（以下「物置等」という。）とその他の部分を区画し、その区画面を断熱構造とする場合の物置等の屋根、天井、床及び開口部。

- 床裏若しくは外気に通じる小屋裏又は天井裏に設ける壁で外気に接するもの。

- 断熱構造工事費増価付

断熱構造工事費増価付を受ける場合は、8.1.1（断熱構造とする部分）及び8.1.3（断熱性能等の基準）に適合するものとしなければなりません。
なお、北海道地域に建設する場合は、断熱構造工事費増価付を受けない場合でも、北海道防寒住宅建設等促進法に基づく熱貫流率（次表）を満足しなければなりません。

<table>
<thead>
<tr>
<th>家住法による熱貫流率</th>
<th>単位 (Kcal/㎡h℃)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>住宅の構造</td>
<td>鉄筋コンクリート造及び組造、その他これに該当する構造</td>
</tr>
<tr>
<td>地域</td>
<td>札幌、江別、千歳、函館、小樽、紫陽、深川、岩見沢、美瑛、三笠、赤平、利別、塩川、砂川、歌志内、室蘭、苫小牧及北海道各市並びに石狩、渡島、松山、後志、空知、胆振、留萌及び日高の各支庁</td>
</tr>
<tr>
<td>屋根、天井及び壁</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>床</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>その他部</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>開口部</td>
<td>3.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>
住宅の断熱の基本は居住空間を断熱材でスッポリつつみこんでしまうということです。このためには、外気内側の天井（または屋根）壁、床に断熱材を施工する必要があります。
一般によく小屋裏換気口が設けられることが普通ですから、天井に施工することが基本になります。この際の天井は直接外気と接している訳ではありませんが、外気に通じる小屋裏を介して外気に接する（外気に接する）ということになります。また、小屋裏に居住室を設けた場合等で小屋裏換気を行えない時は、屋根（野板の上に断熱材を敷く）か屋根の直下の天井、（たるきの間に断熱材を充填することが一般的に断熱材を施工するということになります。
壁の場合は外周壁に行うことが基本ですが参考図の場合の車庫と居住室との境界部に断熱材を施工すれば車庫の外壁部には断熱材の施工が必要ありません。
床の場合は、床下換気口が設けられている場合の一階の床に施工することが基本となりますが、参考図の2階は出し床の場合のように外気に直接接している床（外気に接する床）にも施工する必要があります。床下換気口が設けられた1階の床は、直接外気に接してはいませんが、床裏を介して外気に接することになります。この場合の断熱材の厚みは、外気に直接接する床の場合と比べ少し薄くてよいこととしています。
これを8.1.3（断熱性能等の基準）の表1では「その他の床」として、はねだし床の場合のような「外気に接する床」と区別して数値や厚みが示されています。
また、外気に接する床には、参考図の車庫、物置などの直上の居室の床が含まれます。

参考図 断熱材施工の基本
8.1.1の2は断熱材を施しなくてもよい部分について述べています。例えば、参考図の車庫や物置等の天井や外壁、床は断熱施工が必要であるとするものです。Hは、直接居住空間に影響しない構造物です。Hは、玄関や勝手口の出入口の建具については、これらの部分が居住室（台所を含む）と建具や間仕切等で区画されている間、断熱構造化が必要なしと述べています。
また、これ以外にも同様の考え方で断熱材を施しなくてもよい部分は次のようなものと判断されます。
1. 一階の床を全面土間コンクリート床スラブ方式で行う場合の床（ただし外部には熱損失を防ぐため幅450mm程度の発泡系の断熱材をめぐらすことが必要です。）
2. 既存部分の壁及び床（住宅改良を行う場合）
3. 玄関、勝手口、浴室、ユーティリティ等で土間コンクリートとする場合の床
4. 共同住宅、連続建住宅及び重ね建住宅の住戸間の壁又は一階を除く隔間

8.1.2 地域区分
地域区分は、下表のとおりとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>地域区分</th>
<th>都 道 府 県名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>I</td>
<td>北海道</td>
</tr>
<tr>
<td>II</td>
<td>青森県、岩手県、秋田県</td>
</tr>
<tr>
<td>III</td>
<td>宮城県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、滋賀県</td>
</tr>
<tr>
<td>IV</td>
<td>埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県</td>
</tr>
<tr>
<td>V</td>
<td>宮崎県、鹿児島県</td>
</tr>
</tbody>
</table>

この地域区分は全国を気候条件に応じて5地域に分けました。これはわが国が、北海道から鹿児島県まで南北に長く、気候条件が違う訳ですが、省エネルギーという観点から一律の基準値を設定すると節減率は一律となって、その点では公平であるといえます。しかし北海道のように暖房費を多く使うところでは、断熱化に要した費用が短期間に回収できますが、九州のように暖房費が少ないところでは断熱化に要した費用を回収するのに長時間かかるので不合理となります。このような理由から基準の設定にあたっては地域の実情に即して行う必要があったといえます。
地域区分の設定にあたっては諸外国において暖房デグリーデー（暖房度日）を基準にして定める例が多く、また今のところ最も適切な設定数値
8.1.3 断熱性能等の基準

断熱性能等は次の1又は2に適合するよう施工する。
1. 各部位の断熱材は、8.1.2（地域区分）、構造、部位、及び工法の区分に応じて、表1に掲げる厚さ以上とする。また、開口部の建具は、地域区分に応じて、表2に掲げる種類又はその組合せとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>基準</th>
<th>断熱材の厚さ (単位: ミリメートル)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>品目</td>
<td>地域の区分</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>I</td>
</tr>
<tr>
<td>断熱材の厚さ (単位: ミリメートル)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>屋根又は天井</td>
<td>140</td>
</tr>
<tr>
<td>壁</td>
<td>110</td>
</tr>
<tr>
<td>外壁</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td>外壁</td>
<td>130</td>
</tr>
<tr>
<td>外壁</td>
<td>85</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注(1) この表において、断熱材の厚さ欄中A、B、C及びDは、それぞれ次の断熱材を表すものとする。
A. グラスウール、インシュレーションボード（A級、T級及びシーケンジングインシュレーションボードに限る。）
B. ロックウール、押出発泡ポリスチレン、フロームポリスチレン、ウリアフォーム。
C. 硬質ウレタンフォーム。
D. 高発泡ポリエチレン。
(2) 地域Iにおいて、全部又は一部の部位についてAの断熱材として1立方メートルにつき16キログラムのグラスウールを使用する場合にあ

91
っては、断熱材の厚さをそれぞれ10mm減ずることときは差しきかえないものとする．

(8) 異なる断熱材の複合的利用により、この表に定める断熱材の厚さと同等以上の断熱性能を有すると認められる場合にあっては、この表の断熱材の厚さの欄に定める数値によらないことも差しきかえないものとする．

(4) 特別の理由により、一つの部位でこの表の断熱材の厚さを減ずる場合にあっては、他のすべての部位で断熱材の厚さに当該減じた数値の厚さを加することとする．

| 表2 |
| 地域の区分 | 建具の種類又はその他の組合せ |
| I | 次のイ、ロ又はハに該当するもの。 |
| | グラス単板入り建具の二重構造であるもの（ただし、建具の一方は、木製プラスチック製又はこれらと同等の断熱性を有すること。） |
| | ロ．複層ガラス（空気層6mm以上のものに限る）入りの建具（ただし、木製、プラスチック製又はこれらと同等の断熱性を有すること。） |
| | ハ．グラス単板入り建具と複層ガラス入り建具の二重構造であるもの。 |
| II | 次のイ又はロに該当するもの。 |
| | グラス単板入り建具の二重構造であるもの。 |
| | ロ．複層ガラス入り建具。 |
| III | |
| IV | グラス単板入り建具 |
| V | |

2．各部位の熱貫流率は、構造・部位及び地域の区分に応じ、表3に掲げる数値以下とする。

| 表3 熱貫流率 |
| 構 造 | 部 位 | 熱貫流率 |
| | | 熱貫流率（単位：1時間1平方m1度につき1キロカロリー） |
| | | 地 域 の 区 分 |
| | | I | II | III | IV | V |
| 屋根又は天井 | 0.3 | 0.6 | 0.6 | 0.8 | 1.3 |
| 壁 | 0.35 | 0.7 | 0.7 | 0.9 |
| 鉄筋コンクリート造及び組成造以外の構造 | 外気に接する床 | 0.3 | 0.7 | 0.7 | 0.9 |
| | | その他の床 | 0.35 | 0.8 | 0.8 | 1.0 |
| | | 開口部 | 3.0 | 3.5 | 6.0 | 6.0 | 6.0 |
解 説 1

表1は利用者や審査機関等の利便を考慮し、標準的な仕様を設定して、現在流通している一般的な断熱材の厚さに換算したもののです。

断熱材を施工する場合、それぞれの部位毎に、外部や内部の構成材料に多種多様の組み合せがあるので、建設される住宅、一戸一戸毎に熱貫流率の計算をして部位毎の断熱材の厚みを決定する必要があります。表1に掲げる数値は個々安全側にありますが、この厚さ以上の断熱材を使用すれば、いちど熱貫流率の計算を行わなくても、断熱構造基準値を満たしているとみなすことにしました。いわば、利用者のための簡便表といえるので、これによって比較的簡単に断熱構造基準に適合できる訳で、通常の公庫の断熱割増し融資を求める際はこの表を使うことが一般的といえます。

なお、表1に掲げた数値は計算結果を5mm単位にまとめて表示していますので、市販の製品の厚さとは必ずしも一致していませんので注意してください。

解 説 2

表2は開口部の断熱構造の具体的仕様です。これは、表3に示す開口部の熱貫流率を満たすものです。これでみると第一地域ないし第二地域においては建具を二重構造等とする必要があります。ただし、第二地域において建具を二重構造等でなく、ガラス単板入り建具とする場合は、屋根・天井・壁及び床の断熱材の厚みを、第一地域で求められる数値以上にすれば断熱構造基準に適合するとみなすことができます。しかし、この場合、開口部の工事費は通常の建具工事費と同様とみなされることで「開口部断熱化割増融資」（通常の断熱融資にさらに割増しした融資）を受けることができません。

なお、公庫ではこれらの建具については、優良住宅部品（BL部品）として建設大臣が認定した断熱型サッシ（BL断熱型サッシ）の使用を特に推奨しています。

解 説 3

表3は表1の断熱材の厚さ及び表2の建具の組み合せによらず、計算により各部位毎の熱貫流率を求める場合、その熱貫流率を表3に示す数値以下とした仕様としなければならないこととしたものです。

熱貫流率の計算方法を次に示しておきますので参考にして下さい。

（1）熱貫流率は次の式によって計算すること。ただし、特別の理由がある場合は、建築研究所その他充実能力のあると認められる試験研究機関による実験又は分析によって求められた数値によってもよいことができる。

\[ K = \frac{1}{R_1 + (R_1 + R_2 + \cdots + R_n) + R_0} \]

この式において、K、R_1、R_2 及び R_0 は、それぞれ次の数値を表すものとする。

K：熱貫流率

R_1：室内側熱伝達抵抗（室内と住宅の部分の室内表面が、温度差を基準1度の場合において、1時間に、表面積1平方メートル当り伝達する熱量をキロカロリーで表わした数値の逆
数）

\( R_a \)：住宅の部分を構成する各材料又は空気層の熱抵抗（温度差
損氏 1 度の場合において 1 時間に面積 1 平方メートルの部
分を貫流する熱量をキロカロリーで表わした数値の逆数）

\( R_e \)：室外側熱伝達抵抗（室外と住宅の部分の室外温度が、温度
差損氏 1 度の場合において、1 時間に、表面積 1 平方メー
トル当たり伝達する熱量をキロカロリーで表わした数値の
逆数）

(2) 熱伝達抵抗

室内側及び室外熱伝達抵抗（\( R_i \) 及び \( R_e \)）は、下表の数値による
こと。

<table>
<thead>
<tr>
<th>住宅の部位</th>
<th>熱伝達抵抗</th>
<th>( R_i )</th>
<th>( R_e )</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>屋根</td>
<td>0.10</td>
<td>0.05</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天井</td>
<td>0.10</td>
<td>0.10</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>外壁</td>
<td>0.13</td>
<td>0.05</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>床</td>
<td>0.17</td>
<td>0.17</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(3) 空気層の熱抵抗

①空気層の熱抵抗は下表の数値によること。

<table>
<thead>
<tr>
<th>空気層の厚さ [dacm]</th>
<th>( R_i )</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2 センチメートル以下</td>
<td>0.1 × da</td>
</tr>
<tr>
<td>2 センチメートル以上</td>
<td>0.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) ①以外のもの

<table>
<thead>
<tr>
<th>空気層の厚さ [dacm]</th>
<th>( R_i )</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 センチメートル以下</td>
<td>0.1 × da</td>
</tr>
<tr>
<td>1 センチメートル以上</td>
<td>0.1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

②床裏若しくは外気に通じる小屋裏又は天井裏は、空気層とはみな
さないものとする。

(4) 各材料の熱抵抗

材料の熱抵抗は、次の表に掲げる材料については、表の熱伝導率
でその材料の厚みを除した数値によること。表に掲げる材料以外
の材料については、建築研究所その他充填能力があると認められ
る試験研究機関による実験又は分析によって確かめられた数値に
よること。

8.1.4 注意事項

1. 断熱材は必要な部分に隙間なく施工する。

2. 断熱材の保管にあたっての注意事項は次による。

   1. 断熱材が雨などによってぬれることのないよう充填充分する。な
      お、万一ぬれた場合は、乾燥を確かめてから使用する。

   2. 充填層断熱材については、断熱材の上に重量物を載せないように充
      分注意する。

   3. 板状断熱材については火気に充分注意する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>材料名</th>
<th>熱伝導率 (kcal/m·h·℃)</th>
<th>熱伝導比抵抗 (m·h·℃/kcal)</th>
<th>備考</th>
<th>密度 (kg/m³)</th>
<th>規格等</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>セメントモルタル</td>
<td>1.3</td>
<td>0.77</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>コンクリート</td>
<td>1.4</td>
<td>0.71</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>軽骨材コンクリート</td>
<td>1類</td>
<td>0.45</td>
<td>2.2</td>
<td>1,400未満</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2類</td>
<td>0.62</td>
<td>1.6</td>
<td>1,400〜1,700</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3類</td>
<td>0.85</td>
<td>1.2</td>
<td>1,700〜2,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>気泡コンクリート</td>
<td>1類</td>
<td>0.16</td>
<td>6.3</td>
<td>600未満</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2類</td>
<td>0.18</td>
<td>5.6</td>
<td>600〜700</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3類</td>
<td>0.22</td>
<td>4.5</td>
<td>700〜800</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4類</td>
<td>0.27</td>
<td>3.7</td>
<td>800〜900</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5類</td>
<td>0.15</td>
<td>6.7</td>
<td>500〜700</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>普通コンクリート</td>
<td>1類</td>
<td>0.53</td>
<td>1.9</td>
<td>1,700以下</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2類</td>
<td>0.85</td>
<td>1.2</td>
<td>1,700〜2,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>パーライトモルタル</td>
<td>1類</td>
<td>0.30</td>
<td>3.3</td>
<td>1,000〜1,200</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2類</td>
<td>0.21</td>
<td>4.8</td>
<td>900〜1,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3類</td>
<td>0.19</td>
<td>5.3</td>
<td>800〜900</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>無機繊維系断熱材</td>
<td>ロックウールマット(フェルト)</td>
<td>0.035</td>
<td>28.6</td>
<td>30〜70</td>
<td>JIS A9521</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ロックウール吸音板</td>
<td>0.04</td>
<td>14.3</td>
<td>400〜500</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>吹付ロックウール</td>
<td>0.04</td>
<td>25.0</td>
<td>180〜220</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>グラスウール断熱材</td>
<td>10K</td>
<td>0.045</td>
<td>22.2</td>
<td>10±1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>16K</td>
<td>0.04</td>
<td>25.0</td>
<td>16±2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>24K</td>
<td>0.055</td>
<td>28.6</td>
<td>24±2</td>
</tr>
<tr>
<td>ガラスブロック</td>
<td>フォームポリスチレン保冷板</td>
<td>1号</td>
<td>0.033</td>
<td>30.3</td>
<td>30以上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>2号</td>
<td>0.034</td>
<td>28.6</td>
<td>25以上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>3号</td>
<td>0.036</td>
<td>27.8</td>
<td>20以上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>4号</td>
<td>0.039</td>
<td>25.6</td>
<td>16以上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ガラスブロック</td>
<td>振出発泡ポリスチレン</td>
<td></td>
<td>0.034</td>
<td>29.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>ボリエチレンフォーム</td>
<td></td>
<td>0.025</td>
<td>40.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>ポリエチレンフォーム</td>
<td></td>
<td>0.025</td>
<td>40.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(現物騒音板)</td>
<td>0.024</td>
<td>41.7</td>
<td>40〜50</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>硬質ウレタンフォーム保冷板</td>
<td>1号</td>
<td>0.022</td>
<td>45.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>2号</td>
<td>0.022</td>
<td>45.5</td>
<td>30〜35</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>3号</td>
<td>0.022</td>
<td>45.5</td>
<td>25〜30</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>4号</td>
<td>0.024</td>
<td>41.7</td>
<td>30〜35</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>硬質ウレタンフォーム</td>
<td>(現物騒音板)</td>
<td>0.022</td>
<td>45.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>高発泡ポリエチレンフォーム</td>
<td></td>
<td>0.033</td>
<td>30.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>0.038</td>
<td>26.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>0.045</td>
<td>22.2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>ユリアフォーム</td>
<td>0.035</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>木質繊維系</td>
<td>0.042</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>A級インシュレーション</td>
<td>0.060</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>B級インシュレーション</td>
<td>0.039</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>シーリングインシュレーション</td>
<td>0.045</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>木材</td>
<td>1類</td>
<td>0.10</td>
<td>10.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2類</td>
<td>0.13</td>
<td>7.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3類</td>
<td>0.16</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>板</td>
<td>0.14</td>
<td>7.1</td>
<td>420〜660</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>せるこボード</td>
<td>0.19</td>
<td>5.3</td>
<td>700〜800</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>石綿セメント板(フレキシブル板)</td>
<td>0.50</td>
<td>2.0</td>
<td>2,000以下</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>木毛セメント板</td>
<td>0.18</td>
<td>5.6</td>
<td>400〜600</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>木製セメント板</td>
<td>0.15</td>
<td>6.7</td>
<td>1,000以下</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>硬質繊維板</td>
<td>0.15</td>
<td>6.7</td>
<td>950以下</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>バーチクルボード</td>
<td>0.13</td>
<td>7.7</td>
<td>400〜700</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>松</td>
<td>0.095</td>
<td>10.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>せっこうプラスター</td>
<td>0.52</td>
<td>1.9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) 熱伝導率は20℃〜30℃での値である。
<table>
<thead>
<tr>
<th>公差</th>
<th>空気圧関係</th>
<th>電気関係</th>
<th>燃焼関係</th>
<th>安全関係</th>
<th>環境関係</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>材質</td>
<td>金属</td>
<td>ガラス</td>
<td>ソフト</td>
<td>合成</td>
<td>塩化ビニル</td>
</tr>
<tr>
<td>形態</td>
<td>用鋼板</td>
<td>用鋼板</td>
<td>用鋼板</td>
<td>用鋼板</td>
<td>用鋼板</td>
</tr>
<tr>
<td>壁厚</td>
<td>0.6mm</td>
<td>0.6mm</td>
<td>0.6mm</td>
<td>0.6mm</td>
<td>0.6mm</td>
</tr>
<tr>
<td>長さ</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
</tr>
<tr>
<td>幅</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
</tr>
<tr>
<td>高さ</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
<td>10m</td>
</tr>
<tr>
<td>質量</td>
<td>10kg/m</td>
<td>10kg/m</td>
<td>10kg/m</td>
<td>10kg/m</td>
<td>10kg/m</td>
</tr>
<tr>
<td>密度</td>
<td>10kg/m³</td>
<td>10kg/m³</td>
<td>10kg/m³</td>
<td>10kg/m³</td>
<td>10kg/m³</td>
</tr>
<tr>
<td>熱伝導率</td>
<td>1W/mK</td>
<td>1W/mK</td>
<td>1W/mK</td>
<td>1W/mK</td>
<td>1W/mK</td>
</tr>
<tr>
<td>密閉性</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
<tr>
<td>防音性能</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
<tr>
<td>防火性能</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
<tr>
<td>耐候性</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
</tr>
<tr>
<td>耐摩耗性</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
<tr>
<td>耐化学性</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
<tr>
<td>耐温度性</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
<td>高</td>
</tr>
</tbody>
</table>

なお、詳細な情報についてはお問い合わせください。
8.1.5 鉛水計画等
3.5.8（床下換気）の項による。
8.1.5.2 小屋裏換気
4.7.10（小屋裏・軒裏換気）の項による。
8.1.5.3 床下防湿
3.5.12（床下防湿）の項による。

8.1.6 材料
1. 断熱材の品質は、JIS の制定のあるものは、すべてこの規格に適合したもので、なるべく JIS マーク表示品とする。
2. 断熱材は、無機繊維系断熱材、発泡プラスチック系断熱材又は板状断熱材を、単独又は併用で使用することとし、特記による。なお、これ以外の断熱材を使用する場合は、公的機関等による実験又は分析によって熱伝導率等の性能が確かめられたものに限る。

8.1.7 防湿材
防湿材は、厚さ 0.1mm 以上の防湿フィルム、0.007mm 以上のアルミ箔にクラフト紙などを裏打ちしたもの、90g/m2 以上のアスファルトコートクラフト紙又はこれと同等以上のものとする。

8.1.8 開口部建具
単独でサッシとしての機能を発揮できるものとして、あらかじめ工場で一体成型された断熱型サッシ（片側を複層ガラス入りとした二重建具、三重建具、三層ガラス入り建具、二重建具、又は複層ガラス入り建具）を使用する場合は、優良住宅部品（B・L 部品）として認定された B・L 断熱型サッシとする。

8.2 工法
8.2.1 壁
8.2.1.1 一般事項
1. 断熱材は、たて枠間にはめ込み、取付ける。
2. 断熱材の表面が、たて枠の室内側見付け面とときはなるよう十分注意して取付ける。
3. 断熱材は、次に掲げる部分との間に隙間が生じないように十分注意して取付ける。万一隙間が生じた場合は、その程度に応じて、やり替え、端材を隙間にめ込む等の措置を講ずる。なお、監督者がいる場合はその指示を受ける。
   イ. 上枠、下枠及びたて枠
   ロ. 断熱材相互の縁目部
   ハ. コンセントボックス回り
4. 壁内に給水管等の配管を行う場合は、次による。（8.2-1 図参照）
   イ. 配管は室内側に、断熱材は配管の外側に施する。
   ロ. 配管部は、管の防風措置を行うとともに、別途、8.2.1.2（無機繊維系断熱材を使用する場合）の項の 2 のロによる防湿材の施工を行う。
8.2—1 図 設備、配管回りの断熱材施工例

8.2.1.2 無機繊維系

1. 耳付き断熱材を使用する場合は防湿層を室内側に向けて断熱材をはめ込み、耳部を、たて枠の室内側見つけ面に、間隔200 mm内外で、ステープル又は釘留めとする。（8.2—2 図参照）

2. その他の断熱材を使用する場合は次による。

　イ．壁内に、断熱材の厚さに応じて適切な位置にスペーサーの類を取付けた後、防湿層を室内側に向けてはめ込み、要所を釘留めする。
　ロ．防湿層なしの断熱材を使用する場合は、イ、により断熱材を取付けた後、別途8.1.7（防湿材）の項による防湿材を壁全面に張り、受け材当たり間隔200 mm内外でステープル留めする。なお、防湿材の継目の重ね合わせ幅は150 mm〜200 mmを標準とする。

3. 防湿層が破れた場合は、ビニールテープ又はアルミテープで補修する。

4. 雨などにより断熱材が濡れることのないよう適切な方法で養生する。

8.2—2 図 壁の断熱材の施工例
8.2.1.3 発泡プラスチック系断熱材を使用する場合
原則としてて面の側面に、断熱材の厚さに応じて適切な位置に、受け材を取付けた後、断熱材をはめ込み、要所を釘留めする。ただし、ユーリアフォーム断熱材を使用する場合は、8.2.1.2（無機繊維系断熱材）の項の2のロによる防湿材の施工を行う。

8.2.1.4 木質繊維系断熱材を使用する場合
4.5.9.3（シージングボード）の項による。

8.2.1.5 その他の断熱材を使用する場合
発泡プラスチック系断熱材の外張り工法、その他特殊な工法とする場合は、各製造所の仕様によることとし、特記による。

8.2.2 床
8.2.2.1 一般事項
1. 断熱材の脱落、たれ下り防止のための受け材を堅固に取付けた後、断熱材を根太一枚太間に敷き込み、取付ける。
2. 断熱材の表面が、根太の室内側見付け面とつらうちとなるよう十分注意して取付ける。
3. 断熱材は、次に掲げる部分との間に隙間が生じないよう十分注意して取付ける。万一隙間ができた場合は、その程度に応じて、やり替える、端材をつめ込む等の措置を講ずる。なお、監督者がいる場合はその指示を受ける。

イ. 根太（床根太、添え側根太、端根太）をそれぞれ及びこころび止め
ロ. 断熱材相互の縁目部

8.2.2.2 無機繊維系断熱材を使用する場合
1. 耳付き断熱材を使用する場合は次による。（8.2—3 図(A)(B)参照）

イ. 根太一枚太間に断熱材の厚さに応じて適切な位置にナイロンテグス受材をガタッカーを用いて留め付ける。
ロ. 防湿層を室内側に向けて断熱材を敷き込み、耳部を、根太の室内側見付け面に、間隔 200 mm内外で、ステープル又は釘留めする。

8.2—3 図 床の断熱材施工例

2. その他の断熱材を使用する場合は次による。

イ. 根太一枚太間に断熱材の厚さに応じて適切な位置にナイロンテグス受材をガタッカーを用いて留め付ける。なお、ナイロンテグスの留め付け幅は、1 本の根太当たり 200 mmを標準とする。
ロ. 防湿層を室内側に向けて断熱材を敷き込み、要所を釘留めする。
ハ. 防湿層なしの断熱材を使用する場合は、イ、ロにより断熱材を取付けた後、別途 8.1.7（防湿材）の項による防湿材を床全面に張り、
根太当たり間隔200mm内外でステープル留めする。なお、防湿材の縫目は重ね合わせ幅は、150〜200mmを標準とする。

3. 防湿層が破れた場合は、ビニールテープ又はアルミテープで補修する。
4. 受け材の施工前記によらない場合は、特記による。

8.2.2.3 発泡プラスチック系
1. 断熱材の厚さに応じて適切な位置に断熱材の受け木を、根太に添え付け釘留めする。

2. 受け材施工後に、断熱材を敷き込み、要所を釘留めする。ただし、ユリアフォーム断熱材を使用する場合は、8.2.2.2（無機繊維系断熱材）の項の2のハによる防湿材の施工を行う。

3. 受け材の施工を前記によらない場合は、特記による。

8.2.3 天井

8.2.3.1 一般事項
1. 原則として、断熱材の施工は、天井下張材の施工と平行して行う。
2. 断熱材を天井根太天井根太間に敷き込む。
3. 断熱材は、次に掲げる部分との間に隙間が生じないように十分注意して敷き込む。
   イ. 天井根太ころぶ止め（ファイアーストップ材を含む。）
   ロ. 電線貫通部
   ハ. 断熱材相互の縫目部

4. 埋込照明（ダウンライト）の上部には、防火のため断熱材を施工しない。

8.2.3.2 無機繊維系
1. 防湿層を室内側に向けて敷き込む。
2. 耳付き断熱板を使用する場合は、耳部をカッター等で切断するか、又はしっかり折りまげて使用する。（8.2-4図参照）

3. 防湿層なしの断熱材を使用する場合は、別途8.1.7（防湿材）の項による防湿材を敷き込み、要所にステープル留めした後、断熱材を施工する。なお、防湿材の縫目の重ね合わせ幅は、150mm〜200mmを標準とする。

8.2-4図 天井の断熱材施工例
8.2.3.3 発泡プラスチック系断熱材を使用する場合
1. 電線貫通部当たりは、あらかじめ断熱材を切り欠いた後断熱材を敷き込む。ただし、ユリアフォーム断熱材を使用する場合は、8.2.3.2（無機繊維系断熱材）の項の③による防湿材の施工を行う。
2. 埋込照明回りは、断熱材が照明器具に直接接しないよう余裕をもって切り欠いて使用する。敷込んだ後できた隙間には、無機繊維系断熱材の端切れ材を埋め込む。

8.2.3.4 その他の断熱材を使用する場合
その他特殊な工法とする場合は、各製造所の仕様によることとし、特記による。

8.2.4 浴室回り
浴室回りの壁及び天井は、8.2.1（壁）及び8.2.3（天井）の項による断熱材施工後、別途、8.1.7（防湿材）の項による防湿材を全面に張り込み、受材当たり間隔200mm内外にステープル留めする。なお、防湿層を繰る場合の重ね幅は、150mm以上とする。

8.2.5 防湿層の施工
1. 原則としては表面に防湿層を設けた断熱材を使用する。特に内外の温度差が著しい地域においては、断熱材の室内側に別個に厚さ0.1mm以上の防湿フィルム等の防湿層を設ける。（8.2.5図参照）
2. 室内仕上げがビニールクロスその他防湿層と同等以上の透湿抵抗の材料でなされる場合においては、防湿層を設けないことができる。

8.2.5図 防湿層の施工例
(A) 一般の場合の表面張り
(B) 別個に防湿層を設ける場合

(C) 防湿性の高い化粧仕上げとした場合
9. 内・外装工事（簡易耐火構造の住宅）

9.1 一般事項 1. 簡易耐火構造の住宅で、建築基準法第2条第9号の3のイ又はロに規定する構造の住宅に準ずる耐火性能を有するものとして主務省令で定める技術的基準に該当するものとする場合はこの項による。
2. この項に掲げるもの以外の材料又は仕様とする場合は、公庫の認めたものとする。

9.2 外壁・軒裏
外壁及び軒裏は、次のいずれかの防火構造（建築基準法第2条第8号に規定する構造をいう。以下同じ）とする。
イ. 鋼板モルタル塗で厚さを2cm以上とする。
ロ. 木製セメント板張又は石膏ボード張りの上に厚さ1.5cm以上モルタルを塗る。
ハ. モルタル塗の上にタイルを張り、その厚さの合計を2.5cm以上とする。
ニ. セメント板張り又は瓦張の上にモルタルを塗り、その厚さの合計を2.5cm以上とする。
ホ. 厚さが1.2cm以上の石膏ボード張の上に鉛鉄板又は石綿スレートを張る。
ヘ. 厚さが2.5cm以上の岩綿保温板張の上に鉛鉄板又は石綿スレートを張る。
ト. 厚さが2.5cm以上の木製セメント板張の上に厚さが0.6cm以上の石綿スレートを張る。
チ. 石綿スレート又は石綿パーキュータ板を2板以上張り、その厚さの合計を1.5cm以上とする。
リ. 前号に定めるもの以外の仕様による場合は建築基準法施行令第108条の規定に基づく防火構造の指定（昭和34年、建設省告示2545号）により、これと同等以上の防火性能を有すると建設大臣が認めるものとする。

9.3 界壁
次に掲げる部分相互間の界壁の構造は、4.5.13（住宅間の界壁）の項による。
イ. 住宅と住宅
ロ. 住宅と住宅とが共用する廊下、階段等の部分（共用部分）と住宅

9.4 界床
1. 前項イ及びロに掲げる部分相互間の界床の下地材料及び構造は次による。
イ. 界床の下面（天井部）は厚さ15mm以上のJIS A 6913（ガラス繊維強化せっこうボード）の規格品（以下「強化せっこうボード」という。）張りの上に厚さ12mm以上の強化せっこうボード張りとする。（9.4－1図参照）
ロ. 界床の上面（床面）は厚さ15mm以上の構造用合板（構造用合板のJASで定める特類に限る。）を張った後、厚さ40mm以上のシンダーコンクリート又は厚さ20mm以上のせっこう系S L材を全面に敷き流す。（9.4－2図(A)参照）
2. 界床を設ける場合の床根太、床梁、まくさ等のスパンは、別記スパン表による。

102
9.4-1図 界床の下面（天井部）

9.4-2図 界床の上面（床の部）
(A) シンダーコンクリート
による場合

(B) せっこう系SL材による場合

9.5 界壁及び界床以外の部分の内壁、天井

9.5.1 1戸建又は連続建の場合
1. 室内に面する壁の下地材料又は構造は次のいずれかとする。

イ. 厚さ12mm以上のせっこうボード張り。
ロ. 厚さ9mm以上のせっこうボード2枚張り。
ハ. 厚さ7mm以上のせっこうラスボード張りの上に8mm以上のプラスステーカー塗り。
ニ. 厚さ9mm以上のせっこうボード張りの上に3mmの石綿スレート張り。
ホ. 防火構造

2. 室内に面する天井の下地材料を床根太に直張りとする場合の下地材料又は構造は次のいずれかとする。

イ. 厚さ12mm以上のせっこうボード張り。
ロ．厚さ9mm以上のせっこうボード2枚張り。
ハ．厚さ9mm以上のせっこうボード張りの上に厚さ9mm以上のロックウール化粧吸音板張り。
ニ．厚さ9mm以上のせっこうボード張りの上に厚さ3mm以上の石綿スレート張り。
ホ．防火構造
3．室内に面する天井の構成を吊天井とする場合の下地材料及び仕様は次による。
イ．吊り受けは床根太より1サイズ程度小さい寸法型式の木材とし、床下張材から離し床根太間の中央に取り付ける。
ロ．吊り木は寸法型式204の2つ割り（40mm×40mm）以上の木材とし、1m以内の間隔で吊り木受けに取り付ける。
ハ．野縁は寸法型式204の2つ割り（40mm×40mm）以上の木材とし、500mm以内の間隔で格子状に組み合わせ吊り木に取り付ける。この際、床根太に平行する野縁は床根太の直下に設け、床根太下面と野縁上面の間は10mm以下とする。
ニ．天井の下地材料は厚さ9mm以上のせっこうボード2枚張りとし、取り付け方法は11.2.2（2枚張り）の項による。
ホ．野縁と野縁間の天井裏には、厚さ50mm以上のロックウール吸音材を2枚張りの石膏ボードの施設と並行して壁間が生じないように敷き込む。

9.5.2 重ね建の場合
1．室内に面する壁の下地材料又は構造は次による。
イ．9.4（火床）の項による壁床の下に存する住宅の壁にあっては、厚さ15mm以上のせっこうボード張りとする。
ロ．床の上に存する住宅の壁にあっては9.5.1（1戸建又は連結建の場合）の場合の1による仕様とする。
2．床の上に在する住宅の下地材料又は構造は9.5.1（1戸建又は連結建の場合）の2による仕様とする。
10. 内外装工事（左官工事等）

10.1 一般事項

10.1.1 モルタル下地ラス工法

1. ワイヤラス張りとする場合は次による。

イ. 防水紙は、アスファルトフェルト（1巻20kg）又はアスファルトルーフィング（1巻22kg）とし、縦目は縦横とも90mm以上重ね、約300mm隔てで要所には座当て釘打ちとし、たるみ、しわのないよう仮留める。

ロ. ワイヤラスの品質は、JIS A 5504（ワイヤラス）に適合するもので縦張りとし、縦目は、1山以上重ね、下地板にステープル（1.65mm×25mm以上）間隔200mm以内又はタッカー釘（0.56mm×1.16mm×19mm以上）を間隔120mm以内に千鳥に打ち留める。

ハ. 縦目、開口部、出入りなどは、防錆処理された鋼製の力骨（径2.6mm以上）をさし込み、必ずステープル（1.65mm×25mm以上）で受材当たり、縦目周囲は200mm内外、その他は300mm内外に打ち留める。また、力骨の重ねは、100mm以上とする。

ニ. シージングインシュレーションボードの上に張る場合は、防水紙を、ボードの縦目部分に貼り、その上に直接ワイヤラスを留め付ける。また、たて枠、土台、軒家、開口部、出入り、出入りなどに力骨（径2.0mm以上）をさし込み必ずステープル（1.65mm×32mm以上）で受材当たり間隔300mm内外に打ち留める。

2. メタルラス張りとする場合は次による。

イ. 防水紙は、前項1のワイヤラス張りと同様とする。ただし、軒裏及び軒先の場合は、防水紙は省略する。

ロ. メタルラスは、JIS A 5505（メタルラス）の波形ラス、平ラス1号に高さ9mmの波形をつけたもの、又はリプラスとし、縦目及び留め付けは、ワイヤラスを使用するもの。ただし軒裏は平ラス（1号）以上とする。

ハ. 出すみ及び入すみなどの縦目は突付けとし、200mm幅の平ラス（1号）を上から当てて、力骨をさし込み、必ずステープルで受材当たりに打ち留める。力骨の太さ、重ね長さ、ステープルの寸法及び打留め方などはワイヤラス張りと同様とする。

ニ. シージングインシュレーションボードの上に張る場合は、ワイヤラス張りと同様とする。但し、リプラスの場合は力骨を省略できる。

3. ラスシート張りとする場合は次による。

イ. ラスシートの品質は、JIS A 5524（ラスシート）に適合するもので種類はLS1（非耐力壁）又はLS4（耐力壁）とする。

ロ. ラスシートLS1を使用する場合は、縦目は1山以上重ね、受材当たりに（たて枠又は棚縁）に板厚0.3mm以上、径15mm以上の座金（亜鉛箔板もしくはこれと同等以上の品質のもの）を当て、亜鉛めっきされたN38釘を間隔200mm以内に平打ちする。なお、LS1板厚0.19mmを使用する場合は、受材の間隔は455mm以内とする。

ハ. 張り方は、受材がたて枠の場合は横張り、棚縁の場合は縦張りと
し、横張り、縦張りとも下部より上部へ向って漏水しないよう混入
に張り上げる。なお、斜め張りは行ってはならない。
ニ、ラスシートL S 4を使用する場合は、4. 5. 9. 9（ラスシート）の項
による。
4. 特殊なラス張りとする場合は次による。
各製造所の仕様によるが、モルタルの塗厚が十分確保できるような製品
としつつ記する。
5. 石膏ボード張りとする場合は次による。
石膏ボード下地の場合は、必要によりジョイントセメントをしきき、又
はのろけ後、シーラーを全面で塗布し、サンディングを行う。
モルタル塗り、及びプラスター塗り類の処理は次による。
イ、コンクリート、コンクリートブロックなどの壁、床などでひずみ、
不織布などの著しい箇所は、目荒しを行いモルタルで補修し、乾燥す
るまで放置する。
ロ、コンクリート面で、平滑にすくうものは石のみで目荒しする。
10.1.2下 地 処 理
10.1.3き 裂 防 止
1. 関口部の隅、ラスの経目などき裂が生じ易い箇所は、プラスター塗りの
場合は布伏、しゅう毛張りなどをし、モルタル塗りの場合はメタルラス
を張り付けるなどの措置をする。
2. 各塗り面に発生したひび割れは、次の塗り方以前に目塗りする。
10.1.4養 生
1. 施工にあたっては近接する他の部材及び他の仕上面を汚損しないように
紙張り、シート、板おおいなどをして施工面以外の部分を保護する。
2. 塗り面の汚染、早期乾燥を防止するため、通風、日照を避けるよう窓ガ
ラスをはめ、シート掛け、散水などの措置をする。
3. 寒冷期には暖かい日中を選んで施工するように努め、気温が2℃以下の
場合及びモルタルが温度に硬化しないうちに2℃以下になる恐れのある
場合は、作業を中止する。やむを得ず作業を行う場合は、板塗り、シー
ト覆いなどを行うほか、必要に応じて採暖する。なお、監督者がいる場
合には、その指示を受ける。
10.2モルタル塗り
10.2.1材 料
1. セメントの品質は、普通ポルトランドセメント、白色セメントとも JIS
R 5210（ポルトランドセメント）に適合するものとする。
2. 砂は、有害量の鉄分塩分、泥土、塵芥及び有機物を含まない良質なもの
とする。
3. 水は、有害量の鉄分、塩分、硫黄分及び有機不純物などを含まない清浄
なものとする。
4. 混合材として用いる消石灰の品質は、JIS A 6902（左官用消石灰）に適
合するものとする。
10.2.2調

モルタルの調合（容積比）は下表を標準とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>下地</th>
<th>塗り付け筒所</th>
<th>下塗り・ラスこすり</th>
<th>ムラ直し・中塗り</th>
<th>上塗り</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>コンクリート</td>
<td>床</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3</td>
<td>1:2:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>コンクリートブロック</td>
<td>内壁</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>ヨイラス</td>
<td>内壁</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>メタルラス</td>
<td>天井</td>
<td>1:2</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>ラスシート</td>
<td>外壁その他</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>木毛セメント板</td>
<td>内壁</td>
<td>1:2</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
<tr>
<td>木毛セメント板</td>
<td>外壁その他</td>
<td>1:2</td>
<td>1:3</td>
<td>1:3:適量</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 混和材は消石灰・ドロマイトプラスター、ポゾラン、石膏粉末及び合成樹脂などとする。
2. ラスこすりには必要あればすすを混用してもよい。
3. 適量とは0.1〜0.3で、各製造所の仕様による。

10.2.3塗り厚

塗り厚は下表を標準とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>下地</th>
<th>塗り付け筒所</th>
<th>塗り厚（単位：mm）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>コンクリート</td>
<td>床</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>コンクリートブロック</td>
<td>内壁</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>木毛セメント板</td>
<td>内壁</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>ヨイラス</td>
<td>内壁</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>メタルラス</td>
<td>天井・壁</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>ラスシート</td>
<td>外壁その他</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>外壁その他</td>
<td>厚くする</td>
<td>6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）外壁の塗り厚は、下塗りから上塗りまでを合わせて20mmを標準とする。ただし、防火構造とする場合は20mm以上とする。

10.2.4工

法1 下地処理は次のような。

下地は塗り付け直前によく清掃し、コンクリートブロック下地などはあらかじめ水湿しを行い、木毛セメント板下地は縦目を目すかし部にモルタルをつめ込む。

2. 下塗り（ラスこすり）及びムラ直しは次のような。

1. こすりを充分にこすり塗りし、水引き加減をみて木こすりでならし、目立った空隙を残さない。下塗り面は、金刷りの種で全面にわたり荒し目を付ける。

2. 塗り付け後2週間以上できるだけ長時間放置して、塗り面はラスの縦目などに生じるひび割れを十分発生させてから次の塗り付けにかかる。

3. 下塗乾燥後、著しいひび割れがあれば目懸し、下地面が平担になっていない部分又は凹部はつけ送りしつつ、むら直しを行い、金くし
の類で荒し目を付ける。
3. 中塗りは次による。
   定規ずりしながら平坦に塗り付ける。縁形部は削板を用い、隅角、ちら
   回りは中塗り前に定規塗りをする。
4. 上塗りは次による。
   中塗りの硬化の程度を見計らい、隅角部及びちら回りに注意しておさ
   え、十分に塗り付け水引き程度を見て、こてむらなく、平坦に塗り上げ
   る。なお、仕上については特記による。
5. 床塗りは次による。
   イ. 床コンクリート面にモルタル塗りを施す場合は、コンクリート打込
   後なるべく早くとりかえる。
   ロ. コンクリート打込み後、日数のたったものは、純セメントベーストを
   十分に流し、はがきの類でかきなぞった後塗り付けにかかる。
   ハ. 塗り付けは、下地清掃後水湿しをして、堅練りモルタルを板塗の類で
   叩き均し、表面に水分をじりじり出させ、水引きあいうを定規通
   し、勾配に注意しながらこてで平滑に塗り均す。
10.2.6 防水モルタル
   1. 調合は、防水剤の名製造所の仕様による。
   2. 工法は、下地清掃のうえ、上記製造所の仕様により十分満足し、厚さ20
      mmを2回においててこてで押さえ、入念に塗り上げる。
   3. 下塗りは、水圧等を考えて塗り上げ、上塗りは塗り厚均等に仕上げる。
10.3 せっこうプラスチ
   ー塗り
10.3.1 材 料
   せっこうプラスチマーの品質は、JIS A 6904 (せっこうプラスチマー) に適
   合するものでこの種類は混合せっこうプラスチ及びボード用せっこう
   プラスチとする。ただし、製造後6ヶ月以上経過したものは使用しな
   い。すきを混入する場合は白毛すぎで長さ150mm程度のものとする。
10.3.2 調合・塗り厚
   調合（容積比）及び塗り厚は下表を標準とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>下地</th>
<th>塗り厚</th>
<th>塗り厚</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>コンクリート</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>コンクリートブロック</td>
<td>中塗り</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>木組セメント板</td>
<td>上塗り</td>
<td>1.0</td>
</tr>
<tr>
<td>せっこうラスボー</td>
<td>下塗り</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>ボード</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ボード用せっこう</td>
<td>中塗り</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>プラスチマー</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>25kgあたり</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>壁</td>
<td>塗り厚</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天井</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

1. コンクリート下地、コンクリートブロック下地、ラス下地及び木組セメント
   板下地は、むらを出さずモルタル塗りの仕様による。
2. せっこうラスボード下地の天井の場合は下塗りの後に中塗りを足す。
10.3.3 工 法
   1. コンクリート下地、コンクリートブロック下地、ラス下地及び木組セメ
   ント板下地の場合は次による。
   イ. 中塗り
セメントモルタルによる下塗りが完全に乾燥した後、混合せっこうプラスター下塗り用を上記の調合に従い練り上げ、1度薄くすり塗りをした後、上記の塗り厚で中塗りを行い、水引き加減をみて、木でむら直しをした後、金くしの類で荒し目を付ける。

ロ。上塗り
中塗りが半乾燥の時期に、せっこうプラスター上塗用を金にてで押さえるように平担に塗り付け、水引き加減をみて仕上げてでなで上げ最後に水はけで仕上げる。

2. せっこうラスボード下地の場合は次による。

イ。下塗り
下地の点検後、ボード用せっこうプラスターを1度薄くすり塗りをした後、引続き上塗りを平担に塗り付け、水引き加減をみて木でむら直しをする。

ロ。中塗り及び上塗り

下塗りの翌日に中塗りを行う。

工法は前項1.のコンクリート下地の場合に準ずる。

10.4 ドロマイトプラスカラー塗り

10.4.1 材料 1. ドロマイトプラスカラーの品質は、JIS A 6903（ドロマイトプラスカラー）に適合するものとする。

2. さしこは上乾燥、白毛すさの類の強じんで雑物のない乾燥充分のもので、長さ30㎜内外に切ったものを用いる。

3. 頭料は、耐アルカリ性の無機質のもので、強い直射日光にも著しく変色せず、また、金物をさびさせないものとする。

10.4.2 調合・塗り厚

調合（容積比）及び塗り厚は、下表を標準とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>下地</th>
<th>塗り厚</th>
<th>ドロマイトプラスカラー</th>
<th>セメント</th>
<th>砂</th>
<th>上塗り</th>
<th>中塗り</th>
<th>塗り厚 （mm）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>コンクリート</td>
<td>中塗り</td>
<td>0.9</td>
<td>0.1</td>
<td>2.0</td>
<td>1,100</td>
<td>9</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>コンクリートブロック</td>
<td>上塗り</td>
<td>1.0</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>200</td>
<td>1.5</td>
<td>1.5</td>
</tr>
<tr>
<td>木製セメント板</td>
<td>上塗り</td>
<td>1.0</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>200</td>
<td>1.5</td>
<td>1.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）せっこうラスボード下地の場合、下塗り及び中塗りはボード用せっこうプラスカラーで施工する。

10.4.3 工法 1. 下塗り（ラスこすり）及び中塗りは次による。

イ。下塗りはセメントモルタルで施工する。

ロ。下塗りが十分乾燥した後、上表に従い調合し、練り上げ、1度薄くすり塗りをし、中塗りを行う。

ヘ。中塗りの水引き加減をみて、木でむら直しをし、金くしの類で荒し目をつける。

2. 上塗りは次による。

イ。中塗りの表面硬化後の水引き加減を見計らい金にてで押えるように
10.5 糸維壁塗り

10.5.1 材料
1. 糸維壁材の品質は JIS A 6908（糸維質上塗材）に適合するもので、一般用又は特殊用とする。特殊用を使用する場合は、壁の用途や性能に応じて難燃性、耐熱性、耐アルカリ性又はこれらを組み合わせたものとする。

2. 材料は水に浸らないように保管し、製造後2年以上経過したものを使わない。

10.5.2 法
1. 混練は次による。
   Ⅰ. 材料の混練は、内面平滑な容器に製品包材の全量を入れよくかくしのち所要量の水で均一になるように混ぜ合わせる。
   Ⅱ. 混練方法及び混水量は、各製造業者の仕様による。
   Ⅲ. 色変りを防ぐため、糸維壁材は施工途中で不足することのないように準備する。

2. ここで塗り及び吹付けは次による。
   Ⅰ. ここで塗り又は吹付けいずれの場合も下地が見えない程度の塗厚に仕上げる。
   Ⅱ. ここで塗りの場合は、塗付けの途中で糸維の固まりなどができた時は、これを取り除き、塗見本の模様と等しくなるように塗りひろげる。
   Ⅲ. 仕上げの水引きご結をみて上質の仕上げを水に通し返してをせずてむらを取る。ただし、その際に押せすぎないように注意する。

3. 上塗りは次による。
   Ⅰ. 中塗りが十分に乾燥した後行う。
   Ⅱ. 上質の仕上げをてを用いて、なるべく平坦にむらを取りながら適当に押してできるだけ薄く塗り付ける。
   Ⅲ. 乾きすぎた場合は、プラスターはけて均一に水を塗付する。
   Ⅳ. 平面の硬さを必要とする場合は、適宜合成樹脂を混入する等して、塗り上げる。

10.6 タイル張り

10.6.1 材料
1. 陶磁器質タイルの品質は、JIS A 5209（陶磁器質タイル）に適合するもの又はこれと同等以上のものとする。

2. 使用タイルの形状、寸法及び色合い裏面などはあらかじめ見本品を提出して建築主又は監督者等を承認受ける。

3. 下地モルタルの調合は、10.2.2（調合）の項による。

110
4. 接着剤及び混和剤は各製造所の製品又はその指定によるものとする。
なお、監督者がいる場合はその承諾を受ける。

10.6.2 下地 こしらえ
下地面はあらかじめ10.2（モルタル塗り）に準じて厚さ10mm以上のモルタルを塗り、木で押さえ程度とする。なお、積上げ張りについては、不陸直し程度にモルタルを塗り荒し目を付ける。

10.6.3 工法

10.6.3.1 床タイトル張り

1. クリンカータイル及び張り付け面積の小さいタイルの場合は、砂とセメントを十分にから練り出した後、適度の湿りをもたせたモルタルを敷きならし、セメントベーストを用いて張り付ける。

2. 一般床タイル及び張り付け面積の大きいモザイクタイルの場合は、下地モルタルを施工、その硬化具合を見計らい、張り付け用モルタルを用いて張り付ける。

3. 張り付けは、目地割れに基づいて水系を引通し、すみ、かど、その他要所を押さえ、通りよく水割配に注意して張り付ける。

4. 化粧目地詰めは、張り付け後なるべく早い時期に、目地部分を清掃した後に行う。また、乾燥状態に応じて適当な水湿しを行う。

10.6.3.2 壁タイトル張り

1. 工法別による張り付けモルタルの塗り厚は次表による。

工法別張り付け用モルタルの塗り厚

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>タイル張り</th>
<th>タイル塗り厚 (mm)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>外装タイトル張り</td>
<td>積上げ張り（だんこ張り）</td>
<td>各種</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>压着張り（一枚張り）</td>
<td>小口枠、二丁掛程度の大きさまで</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>モザイクタイトル張り</td>
<td>50mm角以下</td>
</tr>
<tr>
<td>内装タイトル張り</td>
<td>積上げ張り（だんこ張り）</td>
<td>各種</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>压着張り</td>
<td>一枚張り</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>ユニット張り</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>モザイクタイトル張り</td>
<td>50mm角以下</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>接着剤張り</td>
<td>155mm角以下</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 積上げ張りは次により行う。

イ. 張付け順序は、目地割れに基づいて水系を引通し、窓、出入口まわり、すみ、かどの役を先に行う。

ロ. 張り付けは、タイル裏面に張り付けモルタルをのせ、モルタルがすき間なく、十分なしこないようにタイルを下地に押ししつけて、通りよく平らに下部から上部へ張り付ける。

ハ. 張り付けモルタルが十分でなく、すき間ができた場合はモルタルを補充する。

ニ. 一日の張り上げ高さは1.2m程度とする。

3. 压着張りは次により行う。

イ. 張り付けの順序は前項2のイによる。なお、一般平壁部分は原則として上部から下部へ張り進める。

ロ. 張り付けは、下地に張り付けモルタルをむらなく平らに塗り付け、
直ちに、タイル1枚づつ張り付けモルタルを5mm程度タイル裏面のせて平らにならして張り付け、木づちの類でタイルの周辺からモルタルが盛り上がるまでたたき締める。

4. もザイクタイル張りは次により行う。
   ①. 張り付けの順序は前項3の①による。
   ②. 張り付け用モルタルを塗り付け後、タイルを張り付けモルタルが乾かいうちに縦、横及び目地の通りをそろえ、木づちの類で目地部分にモルタルが盛り上るまでたたき締める。
   ③. 表紙張りのモザイクタイルは張り付け後、時期を見計らって水湿しをして紙をはがし、タイルの配列を直す。

5. 接着剤張りは次により行う。
   ①. 接着剤張り下地面（中塗り）の乾燥期間は、夏期にあたっては1週間以上、その他の季節にあっては2週間以上を原則とし、十分乾燥させる。
   ②. 接着剤の塗り付け面積及び塗布量、塗付後の置換時間等はそれぞれ各製造所の仕様によることとし、監督者がいる場合はその承認を受ける。
   ③. 接着剤の塗り付けは金具で下地面に押しつけるように塗り広げ出した目ででくし目をつける。
   ④. タイルの張り付けは、壁面上部からタイルをもみ込むようにして張り付け木づちの類で十分たたき押える。
   ⑤. 目地直は、張り付けたタイルが自由に動く間に行う。
   ⑥. 接着張りのタイル重量は、1枚張りで150g/枚以下、ユニット張りで1,200g/ユニット以下とする。

10.6.4養 生、その他の
1. 屋外施工の場合で、強い直射日光、風、雨などにより損傷を受けるおそれのある場合は、あらかじめシートで覆う等養生する。
2. はむを始める寒冷期に作業を行う場合は、板囲い、シート覆いなどを行うほか、必要に応じて採暖する。
3. タイル張り施工中及びモルタルが十分硬化しないときはタイル張り面に振動や衝撃を与えないように十分注意する。
4. タイル張り終了後は汚れを取除く等、タイル表面の清掃を行う。はむを始める前に酸類を用いる場合は、清掃前に十分水湿しをするとともに、清掃後は直ちに水洗いを行い酸分が残らないようにする。

10.7吹付け工事
10.7.1材料
1. 吹付け材料は外装用、内装用の用途に応じ、あらかじめ見本を提出して建築主、又は監督者の承認を受ける。
2. 骨材は、石灰石、白竜石、珪石、抗火石等の細粒、川砂及び耐アルカリ性のものとし、その大きさは0.15mm～2.5mmの範囲とする。ただし、骨材を使用する場合で、現場練りの必要がある場合は、1回の練り混ぜ量は、2時間以内に使用し得る量とする。
3. 液体は各製造所の仕様によることとし特記する。

112
10.7.2下地処理 1. 下地面の乾燥は次表による。

<table>
<thead>
<tr>
<th>下地</th>
<th>モルタル面</th>
<th>ドロマイトプラスター面</th>
<th>石綿セメント面</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>乾燥</td>
<td>夏季7日以上</td>
<td>14日以上</td>
<td>アルカリ度10以下</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>冬季14日以上</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

2. 各種吹付けの下地処理は次による。
   1. コンクリート、モルタル及びプラスター下地などで、き裂がある場合は、必要に応じてV形に接ぎ、仕上げに支障のないよう、モルタル、セメント系フィラーなどの光沢材をこ入れし、一定期間放置する。
   2. モルタル及びプラスターなどの場合は、補修箇所にサンダー掛けを行うなどして平滑にする。
   3. 下地面は、十分乾燥させる。
   4. 吹付けに先立ち壁面を清掃しシーラーを塗布する。

10.7.3工法
10.7.3.1一般事項 1. 吹付けは、気象条件に留意し、次のような時には工事は行わない。
   1. 下地乾燥が不十分な場合。
   2. 気温が3℃以下の場合。
   3. 降雨雪又是強風の場合。

2. 吹付後、仕上面に変色、色むら等が生じた場合は、その面の吹付け直しを行う。

10.7.3.2セメント砂壁状吹付材
1. 吹付材の品質は、JIS A 6907（セメント砂壁状吹付材）に適合するものとする。

2. 下吹材と上吹材は同一製造所の製品とする。

3. 吹付け工程は、特記がなければ次表による。

<table>
<thead>
<tr>
<th>工程</th>
<th>吹付材その他</th>
<th>頃合割合（重量比）</th>
<th>吹付け量（kg/m²）</th>
<th>放置時間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1下吹き</td>
<td>セメント砂壁状吹付材下吹材</td>
<td>100</td>
<td>0.65〜0.85</td>
<td>2時間程度</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>付着補強材</td>
<td>5〜10</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>水</td>
<td>製造所の指定による</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2上吹き</td>
<td>セメント砂壁状吹付材下吹材</td>
<td>100</td>
<td>0.75〜1.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>付着補強材</td>
<td>5〜10</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>水</td>
<td>製造所の指定による</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 骨材を使用時に加える使用時混合型の場合は、骨材の種類と量は、各製造所の指定による。
2. 下吹き後の放置時間は、表面が乾燥し、表面素地が湿っている程度とする。

10.7.3.3合成樹脂エマルション
1. 吹付材の品質は、JIS A 6909（合成樹脂エマルション砂壁状吹付材）に適合するものとして、吹付材の種類は特記による。

2. 工法は各製造所の仕様によることとして、特記する。
10.7.3.4複層模様吹付材仕上げ
1. 吹付材の品質はJIS A 6910（複層模様吹付材）に適合するものとし種類及び模様は特記による。
2. 工法は、各製造所の仕様によることとし、特記する。

10.7.4養 生
吹付面の週辺及び取付け泡みの部品等には、汚染、損傷を与えないよう養生紙又は養生テープ等により保護する。
11. 内外装工事（せっこうボード張り等）

11.1 受け材 1. 壁にせっこうボードを取り付ける場合は、隅部に受け材を設けることとし、次による。

イ. 耐力壁の場合は、耐力壁の隅柱を釘打ちの受け材として使用する。
（11.1-1 図(A)参照）

ロ. 支持壁又は非耐力壁の場合は、隅角部、T字部等において、寸法型式204、寸法型式104等のかいぎを設け受け材とする。（11.1-1 図(B)参照）

11.1-1 図 せっこうボードのおさまりと釘の止め方（平面図）

(A) 耐力壁の場合

(B) 支持壁又は非耐力壁の場合

2. 天井にせっこうボードを取り付ける場合は、壁との取り合い部分に、寸法型式204又は寸法型式104等のかいぎ、もしくはボードクリップ等を設け受け材とする。（11.1-2 図参照）

11.1-2 図 天井張りの場合

(A)かいぎを設けた例

(B)ボードクリップの例
11.2 天井張り

11.2.1 一枚張り
1. 天井張りに用いるせっこうボードは、4'×8'版、3'×9'版又は3'×12'版とする。ただしやむを得ない場合は、3'×6'版とすることができる。（11.2-3図参照）
2. 天井一枚張りに用いる釘はG N40又はS F N45もしくは長さ32mm以上、径2.5mm以上のスクリューネイル又はリングネイルとする。
3. 釘打ち間隔は、根太に直交して張る場合は、外周部150mm以内、根太に平行して張る場合は外周部100mm以内、中間部はそれぞれ200mm以内とする。ただし、ボードクリップを使用する場合は、その部分の釘打ちを省略できる。

11.2-3 図 天井せっこうボードの張り方

11.2.2 一枚張り
1. せっこうボードの寸法は、一枚張りの場合と同様とする。
2. 天井根太（床根太を含む）に直接取り付けるボード（以下「一枚目ボード」という。）の取り付けは次による。
   1）取り付けに用いる釘は、G N40又はS F N45もしくは、長さ32mm以上、径2.5mm以上のスクリューネイル又はリングネイルとする。
   2）釘打ち間隔は、外周部及び中間部ともそれぞれ300mm以内とする。
3. 一枚目ボードの上に取り付けるボード（以下「2枚目ボード」という。）の取り付けは次による。
   1）取り付けに用いる釘は長さ50mm以上、径2.5mm以上のスクリューネイル又はリングネイルとする。
   2）張り方は、天井の外周部を除き、一枚目ボードの目地と二枚目ボードの目地が一致しないようにする。
   3）釘打ち間隔は、根太に直交して張る場合は、外周部150mm以内、根太に平行して張る場合は、外周部100mm以内、中間部はそれぞれ200mm以内とする。

11.3 壁張り

11.3.1 一枚張り
1. 壁張りに用いるせっこうボードは、4'×8'版、4'×12'版の横張りか、又は3'×8'版、4'×8'版のたて張りとし、3'×6'版を用いる場合には、上下の継手部分に40mm×40mm以上の受け材を入れ、四隅に釘打ちできるようにする。
2. 取り付けに用いる釘はG N40又はS F N45を用い、耐力壁の場合は外周部100mm、中間部200mm間隔で釘打ちする。ただし、支持壁又は非耐力壁の場合は、外周部及び中間部とも、それぞれ200mm間隔とすることができる。（11.3-1図参照）
11.3.2 枚張り
1. せっこうボードの寸法は、11.3.1（一枚張り）の場合と同様とする。
2. たて枠に直接取り付けられるボード（以下「一枚目ボード」という。）の取り付けに用いる釘及び取り付け方は、11.3.1（一枚張り）と同様とする。
3. 一枚目ボードの上に取り付けられるボード（以下「二枚目ボード」という。）の取り付けは次のようにする。
   i. 取り付けに用いる釘は、長さ50mm以上、径2.5mm以上のGN釘、SFN釘、スクリューネイル又はリングネイルとする。
   ii. 張り方は、壁の外周部を除き、一枚目ボードの目地と二枚目ボードの目地が一致しないようにする。
   iii. 釘打ち間隔は、外周部及び中間部とも200mm間隔以内とする。

11.3.3 その他
1. 壁張りに用いるせっこうボードは、リフター等で天井面一杯まで持ち上げ、釘打ちする。またせっこうボードは、床面からの湿気により強度が低下しないようにするため、床面から13mm程度離して打ちつける。（11.3-2図参照）
2. せっこうボードを張ったすべての壁の出隅の部分には、亜鉛鉄板等のコーナービートを取り付ける。（11.3-3図参照）

11.4 テーピング
テーピングツールを使用する場合は、11.4-1表の工程表による。手作業の場合は11.4.1から11.4.3までによる。

11.4.1 接合部分
1. 下塗りは、適当な軟度に調整したジョイントセメントをせっこうボード
11.4.2入間、出隅及び
釘頭

1. 入間は、ジョイントセメントで貼り付ける時にあらかじめ、ジョイントテープを二つに折って貼り付け、ヘラでジョイントテープを破らないように注意して抑えつけた後、接合部分と同様とする。
2. コーナーピートを取り付けた出隅は、ジョイントセメントを2〜3回に分けて塗り付け、一度に厚く塗り付けないようにする。塗り付け時には、前に塗り付けたジョイントセメントが完全に乾燥してから行う。
3. 釘頭が、せっかくボード面に完全に埋まっているのかを確か、下塗りをして、乾燥後上塗りを行い平滑にする。
4. 各部分とも上塗りが完全に乾燥後、目のこまかいサンドペーパーでサンディングをする。

11.4.3配管及びコンセントボックス等の周辺

ベンキ仕上げの場合の下地処理は、接合部分と同様とする。
各種配管及びコンセントボックスなどのまわりは、ジョイントテープを適当に切り、ジョイントセメントで貼り付け、ヘラで十分抑え込む。
乾燥後、ジョイントテープが完全に覆われるようにジョイントセメントを薄く塗り付け平滑にする。（11.4-1図参照）

11.5ロックウール張り

1. 天井張りに用いるロックウール吸音板は厚さ12㎜以上とし、1'×2'版の千鳥張りとし、根太に無機質系接着剤で貼り付け、長さ25㎜径1.2㎜以上、頭径3.5㎜の平頭釘を150㎜間隔に平打ちする。この場合、ジョイナーを根太に釘で緊結し、釘打ちしないことができる。
2. 金属製又は木製の野線を用いる場合は、18㎜×50㎜以上のものと、18㎜×25㎜以上のものをそれぞれ310㎜間隔に交互に各根太に釘で緊結し、無機質系接着剤と釘でしっかりと接合し同様に止め付ける。
3. 厚さ9㎜以上のせっかくボードを下張り材とする場合は、これに厚さ9㎜以上のロックウール吸音板を無機質系接着剤と釘によって止め付けられる。
12. 内外装工事（その他の仕上材料）

12.1 一般事項
1. 内外装材料の種類、品質、形状、寸法などは本仕様書の各項によるほかこの項による。
   なお、色合い模様などは、見本等を提出して建築主または監督者の承認を得る。
2. 内外装材料の取付けに用いる釘、ねじ、接着材などは、内外装材料および下地の種類、寸法、性質に応じて選択する。
3. 木造下地の材料、工法は本仕様書の各項によるほかこの項による。
4. 下地は十分乾燥させたうえ、清掃を行なって、内装仕上げを行う。

12.2 アスファルトタイル及び合成樹脂系タイル張り
1. アスファルトタイル及び合成樹脂系タイルの接着剤は、使用する材料の製造業者の製品又はその指定するものを用いる。
2. 張付けは、接着剤を下地面の全面に均に塗布し、目地の通りよく、きちまないように張付ける。
3. 張付け後、接着剤の乾燥をまって、全面水しぶきを清掃し、乾燥後は水溶性ワックスを塗り、つや出しを行う。

12.3 床下敷材
床の遮音性を確保する必要がある場合又はその他下敷材を敷く必要がある場合は、下敷材として、厚さ9㎜以上のインシュレーションボード、ハードボード、パーティクルボード又はフェルト類等を用い、釘打ちにより固定する。

12.4 フローリングボード張り
1. フローリングボードは、規格フローリングの日本規格の日本規格によるものとし、材質は、木のたな又はながらとし、板厚12㎜、幅60〜70㎜、長さ700㎜以上のものとする。張立て前にそれぞれ床の割付けをする。
2. 張上げ後は、おがくず又はむしろなどを敷き、吸湿、汚れを防ぎ、水のかからないように養生する。

12.5 塩敷き
1. 塩敷きに用いる材料の品質は次のように。
   1. 塩床の品質はJIS A 5901（塩床）に適合するもので、2級品以上、又はJIS A 59011（フォームポリスチレンサンドウッッチ塩床）若しくはJIS A 5912（インシュレーションファイバーホードサンドウッッチ塩床）に適合するものとする。
   2. 塩収納の品質はJIS A 5902（塩）に適合するもので、2級品以上とする。
   3. 塩は、塩のJASに適合するもので、2級品以上とし、塩の品質はJIS L 3108（塩に地）に適合するものとする。
   4. 塩を用いる場合は、塩を適度に塗布し、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布し、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布する。
   5. 塩を塗る場合は、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布し、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布する。
   6. 塩を塗る場合は、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布し、塩を塗る方法と塩を塗る方法を適宜塗布する。

12.6 ビニール床タイル張り
12.6.1 材料
1. ビニール床タイルの品質は、JIS A 5705（ビニール床タイル）に適合するものとする。
2. 接着剤は各製造所の製品またはその指定するものとし、監督者がいる場
12.6.2工

合はその承諾を受ける。

法 1. 張付けは次による。

イ. 接着剤を下地面全面にくし目にてを用い塗布する。なお必要に応じて仕上材裏面にも塗布する。

ロ. 張り方は、不陸、目通り及びたるみ等のないようベタ張りとする。

2. 張付け後、接着剤の硬さを観察し全面水立ち等で清掃したうえ、乾燥後は、水溶ワックス等を用いてつや出しを行う。

12.7ビニル床シート張り

12.7.1材

料 1. ビニル床シートの品質は、JIS A 5707（ビニル床シート）に適合するもので種類は住宅用とする。

2. 接着剤は、各製造所の製品又はその指定するものを用いる。

12.7.2工

法 1. 仮敷きは、必要に応じて行うものとし、割付けより、長めに切り、巻き広げが取れ、十分伸縮するまで敷くべ

2. 本敷き及び張付けは次による。

イ. はぎ目及び継手の位置は、その製造所の仕様による。なお、監督者がいる場合はその承諾を受ける。

ロ. 施工に先立ち、下地面の清掃を十分に行った後、はぎ目、継目、出入口間及び柱付きなどは、すき間のないように切込を行う。

ハ. 接着剤を下地全面に平均に塗布するとともに必要に応じて仕上材裏面にも塗布し、不陸、目通り及びたるみ等のないようベタ張りとする。

ニ. やむを得ず冷寒期に施工する場合は、気温に応じ適切な養生を行おう。

12.8壁紙張り

12.8.1材

料 1. 壁紙の品質は JIS A 6921（壁紙）に適合するもので、製紙、纖維製、プラスチック製又はこれと同等品とし、使用箇所、種別は特記による。

2. 接着剤の品質は JIS A 6922（壁紙施工用せん白系接着剤）に適合するもの又は各製造所の指定するものとし、監督者がいる場合はその承諾を受ける。

12.8.2工

法 1. 壁紙は下地に直接又は袋張り（下地に和紙を使う方法）とし、たるみや模様などの不いよいがいがないよう裁ち合わせて張付けする。

2. 押縫、ひもなどを使用する場合は、通りよく接着剤、釘等で留め付ける。

12.9下見板張り

1. 外壁仕上げとして下見板張りを行う場合は、次の２から６までによる。

2. 下見板張りときて、シングル及びチェイクを用いる。シングルとは、シート（レッドシダー）を機械割りしたもので、チェイクとは、シート（レッドシダー）を手おの割りしたものである。

3. シングル及びチェイクの等級は、次の３種類とする。

イ. №１：柾目のみ（ラベルの色：青）

ロ. №２：柾目＋板目（ラベルの色：赤）

ハ. №３：柾目＋板目（ラベルの色：黒）

4. シングル及びチェイクの材長は、60cm、45cm、40cmの3種類とする。

5. 外壁下地に防水紙を全面に張り、その上に舗装間隔に巾縫を受け材下し
て釘打ちし、シングル又はシェイクを張る。この場合、幅は材長40cm
の時は18cm以内、材長45cmの時は20cm以内、材長60cmの時は25cm以内と
し、最下部においては、必ず2枚合わせ張りとする。（12.10—1、2図
参照）
6. 使用釘は、長さ30mm以上、径2.3mm以上の熱処理した亜鉛メッキ釘又は
アルミニウム釘のような鋸止めを施した釘を用いる。

12.10—1 図 シングル、シェイクの張り方詳細
13. 建具造作工事

13.1 一般事項　
13.1.1 標準モジュール　
建具・造作工事に用いる標準モジュールは、中心910mmとする。

13.1.2 ラフ開口　
1. ラフ開口高（床下張り又は窓枠の上端から床面の下端までをいう）は、通常13.1－1表を標準とする。ただし、上レール式建具については、13.7（上レール式建具）による。（13.1－1図参照）
2. ラフ開口幅（R. O. W）は、開口部のたて枠間隔（M. W）によって異なるが、通常13.1－2表を標準とする。（13.1－2図参照）

13.1－1図 ラフ開口高　

(A) 傾が20°になるとき開口部
(B) 傾と平行はされる時の開口部
(C) 傾15°になる時の開口部
(D) たて枠内に設けざる開口部

13.1－2図 ラフ開口部　

13.1－1表 ラフ開口高　

<table>
<thead>
<tr>
<th>ドア、掃き出し窓（ROH）</th>
<th>1855</th>
<th>2055</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>その他の窓（ROH）</td>
<td>500</td>
<td>650</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.1－2表 ラフ開口幅　

<table>
<thead>
<tr>
<th>公称寸法（MW）</th>
<th>R. O. W</th>
<th>R. O. W</th>
<th>R. O. W</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>455</td>
<td>415</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>600</td>
<td>650</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>910</td>
<td>790</td>
<td>740</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1365</td>
<td>1245</td>
<td>1195</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1820</td>
<td>1700</td>
<td>1650</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2730</td>
<td>2530</td>
<td>2480</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3640</td>
<td>3440</td>
<td>3390</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.1.3 有効開口　
13.1.3.1 内部建具　
1. 有効開口高は、床下張り上端（床下張り上）から床面の下端より35mm下がった位置とする。ただし、上レール式建具については、13.7（上レール式建具）による。（13.1－3図参照）
2. 有効開口幅は、ラフ開口幅から左右25mmづつ計50mm引いた幅とする。
（13.1—4図参照）

13.1—3図 有効開口幅

13.1—4図 有効開口幅

13.1.3.2外 部 建 具
1. 有効開口高は、掃き出しの場合には、ラフ開口高マイナス10mm、その他
 の窓の場合には、ラフ開口高マイナス7mmとした外法高（H）から下端を
 マイナス35mm以内、上端をマイナス30mmとした高さとする。（13.1—5
 図参照）
2. 有効開口幅は、内部建具有効開口幅13.1.3.1と同様にする。

13.1—5図 有効開口高

(A) 掃き出し窓の場合  (B) その他の窓の場合

13.2材 料
13.3（枠リスト）から13.9（階段）までの部材及び部品に用いる材料の
性能等については、次による。
イ. 木材は心去り材とし、建具にあっては含水率15%以下で、割れ、節
などの欠点のないものとする。
ロ. 建具に使用する木材は13.2—1表によるものとし、むく材又はフィ
ンガージョイントなどによる集成材とする。
13.2-1表 树種

| 針葉樹  | ひのき、すずき、ひば、とうひ、ひめこまつ、えぞまつ、もみ、 |
|         | が、さわや、ねずこ、べいひ、べいすぎ、べいひば、べいつ |
|         | が、スプルース、ノーブルファー |
| 広葉樹  | なら、たもの、しおじ、防虫処理ラウン |

（備考） 表に示したものを以外でも当事者間の協議によって、品質が同等以上と認められた場合は、使用してよい。

ハ．生地のまま又は生地を表す塗装を施す材質は、杉材を標準とする。
ただし、吊元のかまち、定規縁などは、和風の板戸・戸ぶすまなど軽量の開き戸を除き、すぎ、えぞまつ等の軟質のものを避ける。

ニ．接着剤は、JIS K6801（ビニル樹脂材料接着剤）はJIS K6804（酢酸ビニル樹脂エマルジョン木材接着剤）を標準とし、雨露にさらされる箇所には、JIS K6802（フェノール樹脂木材接着剤）を使用する。

ホ．合板は、JAS適合する1類とする。

13.3机 リス ト
1. 洋室用枠の形状及び寸法は、13.3-1図を標準とする。
2. 洋・和室用枠の形状及び寸法は、13.3-2図を標準とする。
3. 和室用枠の形状及び寸法は、13.3-3図を標準とする。
### 13.3-1図 洋室用枠リスト

<table>
<thead>
<tr>
<th>①下枠</th>
<th>②下枠</th>
<th>③上枠</th>
<th>④下枠</th>
<th>⑤下枠</th>
<th>⑥下枠</th>
<th>⑦下枠</th>
<th>⑧下枠</th>
<th>⑨ケーシング</th>
<th>⑩ケーシング</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><img src="image1" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image2" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image3" alt="上枠図" /></td>
<td><img src="image4" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image5" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image6" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image7" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image8" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image9" alt="ケーシング図" /></td>
<td><img src="image10" alt="ケーシング図" /></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 13.3-2図 洋・和室用枠リスト

<table>
<thead>
<tr>
<th>①壁枠</th>
<th>②上枠(片開き戸)</th>
<th>③上枠(障子引違)</th>
<th>④下枠(片開き戸)</th>
<th>⑤下枠(障子引違)</th>
<th>⑥戸当り</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><img src="image11" alt="壁枠図" /></td>
<td><img src="image12" alt="上枠図" /></td>
<td><img src="image13" alt="上枠図" /></td>
<td><img src="image14" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image15" alt="下枠図" /></td>
<td><img src="image16" alt="戸当り図" /></td>
</tr>
</tbody>
</table>
13.4内部ドア

13.4.1構成 内壁のたて枠に寸法形式204を用いる場合の内部ドアの構成は、13.4-1図を標準とする。

13.4-1図 ドアの構成

(a) 洋室 (b) 便所 (c) 和室

13.4.2寸法 ドアの寸法は、13.4-1表を標準とする。（ただし玄関ドアを除く。）

13.4-1表 ドアの寸法

<table>
<thead>
<tr>
<th>各寸法</th>
<th>ラフ開口幅 (ROW)</th>
<th>有効開口幅 (ω)</th>
<th>ラフ開口高 (ROH)</th>
<th>有効開口高 (h)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1枚のドアの幅</td>
<td>600</td>
<td>650</td>
<td>600</td>
<td>1,855</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
</tr>
<tr>
<td>690</td>
<td>740</td>
<td>690</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
</tr>
<tr>
<td>715</td>
<td>765</td>
<td>715</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
</tr>
<tr>
<td>740</td>
<td>790</td>
<td>745</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）ドアの高さは、和室にあっては、1,765mm、洋室にあっては、1,800mm及び2,000mmを標準とする。
13.5 インテリア引違い戸

13.5.1 構成
内壁のて枠に寸法型204式を用いる場合の引違い戸の構成は13.5-1図を標準とする。

13.5-1図 引違い戸の構成

13.5.2寸法
内部引違い戸の寸法は13.5-1表を標準とする。

13.5-1表 引違い戸の寸法

<table>
<thead>
<tr>
<th>各寸法</th>
<th>ラフ開口幅 (ROW)</th>
<th>有効開口幅 (ω)</th>
<th>ラフ開口高 (ROH)</th>
<th>有効開口高 (h)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>810</td>
<td>1,650</td>
<td>1,600</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
<td>2,020</td>
</tr>
<tr>
<td>850</td>
<td>1,700</td>
<td>1,650</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,055</td>
<td>2,020</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）引違い戸の高さは、和室にあっては、1,765mm とし、洋室にあっては、1,800mm 及び2,000mmを標準とする。

128
13.6 Exterior Metal Fixtures

（アルミサッシ）

13.6.1 构成
1. 境内のたて枠に寸法形式204を用いる場合のアルミサッシ取り付け枠の構成は、13.6-1図を標準とする。
2. サッシの内側に最低窓込み90mmの木枠が取り付けられることを前提にし、27mmだけ軸体にサッシ枠をかけた半外付サッシを標準とする。
3. 取付け工法及び附属品については、各製造仕様による。

13.6-1図 アルミサッシの構成

(a) 掃き出し窓の場合
（内障子を設ける） （内障子を設けない）

(b) その他の窓の場合
（内障子を設ける） （内障子を設けない）

13.6.2寸
法 1. 外部金属建具（アルミサッシ）の寸法は、13.6—1表の28種類を標準とする。
2. 原則として、ランマ付のサッシは用いない。
### 13.6-1 図 アルミサッシの寸法

<table>
<thead>
<tr>
<th>公称寸法</th>
<th>455</th>
<th>600</th>
<th>910</th>
<th>1,365</th>
<th>1,820</th>
<th>2,730</th>
<th>3,640</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>フラ開口幅</td>
<td>415</td>
<td>650</td>
<td>740</td>
<td>790</td>
<td>1,195</td>
<td>1,245</td>
<td>1,650</td>
</tr>
<tr>
<td>H</td>
<td>405</td>
<td>640</td>
<td>730</td>
<td>780</td>
<td>1,185</td>
<td>1,235</td>
<td>1,640</td>
</tr>
<tr>
<td>W</td>
<td>365</td>
<td>600</td>
<td>690</td>
<td>740</td>
<td>1,145</td>
<td>1,195</td>
<td>1,600</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 13.7上レール式建具

#### 13.7.1枠付き引違い戸

1. 上レールの上枠は両端の戸当たり建具のたて枠（厚さ 20mm、幅 114mm）にくい込みさせて支える。（13.7-1 図参照）
2. 枠を取り付けた後、ドアにはハンガーを取り付け、吊り込み、中心部の下部に金属製のガイドアンカーを取り付けてドアのふれを止める。（13.7-2 図参照）
3. ドアを固定したあと、釘をたて枠、まくぎ、建具の上枠及びたて枠へそれぞれ頭のない釘で打ち付ける。（13.7-2 図参照）

#### 13.7-1 図 枠付き引違い戸

![枠付き引違い戸の図](image-url)
13.7.1.3寸 高法 柱付き引違い戸の寸法は13.7-1表を標準とする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>各寸法</th>
<th>ラフ開口幅 (ROW)</th>
<th>有効開口幅 (ω)</th>
<th>ラフ開口高 (ROH)</th>
<th>有効開口高 (h)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1枚のドアの幅</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>810</td>
<td>1,650</td>
<td>1,600</td>
<td>1,860</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2,060</td>
<td>2,020</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>850</td>
<td>1,700</td>
<td>1,650</td>
<td>1,860</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2,060</td>
<td>2,020</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）ドアの高さは1,800 mm及び2,000 mmを標準とする。
13.7.2 クロゼット引違戸

13.7.2.1 取り付け方
1. クロゼット引違戸は、下がり壁に上枠を取り付けてガイドレールを取り付けるか、又はガイドレールを直接2階根太又は天井根太に取り付ける。（13.7-4図参照）
2. ガイドレールは、主としてアルミの押出し材でカラー被覆したものを利用し、ビスで上枠又は根太に取り付ける。（13.7-5図参照）
3. 戸の吊り込みは、引違戸と同様に吊り込み、吊り込み後、開口部の中央にガイドアンカーで固定し、ふれを防ぐ。（13.7-5図参照）
4. 下がり壁のある場合は、建具の上枠を受けるため、両側に厚さ20mmの建具のたて枠を用いる。
5. 根太に直接ガイドレールを取り付ける場合は、戸当り部分にアルミの建具のたて枠を取り付け、下部にもアルミの建具の下枠を設ける。

13.7-4図 ガイドレールの取り付け方

(A) 下がり壁がある場合

(B) 下がり壁がない場合

13.7-5図 クロゼット引違戸の取り付け方

(a) ガイドレールの形状

(b) ドアの吊り込み

(c) ガイドアンカー
13.7.2.2寸

内壁のたて枠寸法型式204を用いる場合のクロゼット引違戸の構成は、13.7-6図を標準とする。

13.7-6図 クロゼット引違戸の構成

(A) 下がり壁ある場合

(B) 下がり壁ない場合

13.7.2.3寸法

クロゼット引違戸の寸法は、13.7-2表を標準とする。

13.7-2表 クロゼット引違戸の寸法

(A) 下がり壁がある場合

<table>
<thead>
<tr>
<th>心寸法(MW)</th>
<th>各寸法</th>
<th>ラフ開口幅</th>
<th>有効開口幅</th>
<th>ラフ開口高</th>
<th>有効開口高</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1,365</td>
<td>580</td>
<td>1,195</td>
<td>1,145</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>605</td>
<td>1,245</td>
<td>1,195</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td>1,820</td>
<td>810</td>
<td>1,650</td>
<td>1,600</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>835</td>
<td>1,700</td>
<td>1,650</td>
<td>1,855</td>
<td>1,820</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）ドアの高さは、1,800 mm及び2,000 mmを標準とする。
(B)下がり壁がない場合

<table>
<thead>
<tr>
<th>心寸法(MW)</th>
<th>各寸法</th>
<th>開口幅</th>
<th>建具の外法</th>
<th>建具の高さ</th>
<th>ドアーの高さ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1,365</td>
<td>630</td>
<td>1,251</td>
<td>1,245</td>
<td>2,438</td>
<td>2,390</td>
</tr>
<tr>
<td>1,820</td>
<td>860</td>
<td>1,706</td>
<td>1,700</td>
<td>2,438</td>
<td>2,390</td>
</tr>
<tr>
<td>2,730</td>
<td>880の3枚</td>
<td>2,616</td>
<td>2,610</td>
<td>2,438</td>
<td>2,390</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.7.3 引込戸
13.7.3.1 取り付け方
1. 引込み戸（MW 1,820mm）の枠は、内装下地工事の前に取り付ける。
（13.7-7図参照）
2. 引込み戸を吊り込んだ後、中心部の床面にガイドアンカーを取り付ける。（13.7-7図参照）

13.7-7図 引込み戸のおきめ方
13.7.3.2構

内壁のたて枠に寸法型式204を用いる場合の引込戸の構成は、13.7ー8図を標準とする。

13.7ー8 図 引込戸の構成

13.7.3.3寸

法 引込戸の寸法は、13.7ー3表を標準とする。

13.7ー3 表 引込戸の寸法  （単位：mm）

<table>
<thead>
<tr>
<th>引込戸の幅</th>
<th>各寸法</th>
<th>ラフ開口幅 (ROW)</th>
<th>有効開口幅 (ω)</th>
<th>ラフ開口高 (RO H)</th>
<th>有効開口高 (h)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>800</td>
<td>1,650</td>
<td>780</td>
<td></td>
<td>1,895</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,095</td>
<td>2,020</td>
</tr>
<tr>
<td>825</td>
<td>1,700</td>
<td>805</td>
<td></td>
<td>1,895</td>
<td>1,820</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,095</td>
<td>2,020</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.7.4クロゼットドアー

13.7.4.1取り付け方 1. クロゼットドアーはたて枠をそえて取り付け、ドアのビットをブラケットに固定する。
2. ガイドレールをかくすように建具の上枠に額縁を取り付け、枠全体も額縁で仕上げる。

13.7.4.2構 成 内壁のたて枠に寸法型式204を用いる場合のクロゼットドアーの構成は13.7ー9図を標準とする。
13.7-9 図 クロゼットドアの構成

(A) 下がり壁がある場合  (B) 下がり壁のない場合

13.7-4 表 クロゼットドアの寸法

<table>
<thead>
<tr>
<th>クロゼットの開口 (MW)</th>
<th>910 (mm)</th>
<th>1,365 (mm)</th>
<th>1,820 (mm)</th>
<th>2,730 (mm)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>下がり壁がある (1,865)</td>
<td>2枚パネル</td>
<td>690</td>
<td>1,145</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1,145</td>
<td>286</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1,600</td>
<td>400</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6枚パネル</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>下がり壁がない (2,410)</td>
<td>2枚パネル</td>
<td>690</td>
<td>1,145</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1,145</td>
<td>286</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6枚パネル</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(単位:mm)
13.8クロゼットセット

13.8.1 クロゼットセットの形状及び寸法
クロゼットセットの形状及び寸法は、13.8-1 図及び13.8-1 表を標準とする。

13.8-1 図 クロゼットの部材

![クロゼットの部材図]

13.8-1 表 クロゼットの部材の寸法（単位：mm）

<table>
<thead>
<tr>
<th>部材</th>
<th>間口</th>
<th>板厚</th>
<th>長さ</th>
<th>幅</th>
<th>高さ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>棚板</td>
<td>910</td>
<td>1,365</td>
<td>1,820</td>
<td>2,730</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>棚板</td>
<td>12以上×480</td>
<td>800</td>
<td>1,250</td>
<td>1,710</td>
<td>2,620</td>
</tr>
<tr>
<td>側板</td>
<td>10×75</td>
<td>800</td>
<td>800</td>
<td>800</td>
<td>800</td>
</tr>
<tr>
<td>亘板</td>
<td>10×75</td>
<td>890</td>
<td>1,230</td>
<td>1,690</td>
<td>2,600</td>
</tr>
<tr>
<td>ハンガー</td>
<td>34</td>
<td>890</td>
<td>1,230</td>
<td>1,690</td>
<td>2,600</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.8.2 クロゼットセット

1. ハンガー及び棚の納まりは、13.8-2 図を標準とする。
2. 下がり壁がないクロゼットで、ハンガーの上を押入れにする場合は、13.8-3 図を標準とする。
3. ハンガーの最小高さは、1,000mmとし、ハンガーとタンスのおさまりは、13.8-4 図を標準とする。

13.8-2 図 ハンガーと棚のおさまり寸法

![ハンガーと棚の寸法図]

13.8-3 図 ハンガーと押入れ

![ハンガーと押入れ図]
13.9階 段
13.9.1さきら桁 1.さきら桁は、寸法型式210の根太材を切り込んでつくる。（13.9—1図参照）
2.さきら桁と床開口部の合せ根太との絆結は、根太受け金物による。（13.9—2図参照）
3.階段のおさまり寸法は、13.9—3図によるものを標準とする。

13.9—1図 寸法型式210によるさきら桁
13.9—2図 さきら桁と合せ根太との絆結

13.9—3図 標準的な直行階段のおさまり寸法
13.9.2踏み板、こけみ板

1. 踏み板、こけみ板の寸法及びおきまりは、13.9-4図の例による。

2. 曲がり階段の形状と寸法のとり方は、13.9-5図の例による。

3. 踏み板は、さきら桁に溝をほるか、受け材に固定する。(13.9-6図参照)

4. 階段に厚いカーペットを敷く場合は、踏み板を15mm以上の合板とすることができる。

13.9-4図 踏み板及びこけみ板の寸法

13.9-5図 曲がり階段の形状と寸法

13.9-6図 さきら桁と踏み板との取り付け方
13.9.3 床段すべり止め
床段には、歩行上の危険防止のため、必要に応じ踏板にすべり止めの措置を講ずる。

13.10 ふすま
1. 下地は太骨で、横子は11本以上、立て子は3本以上とし、引手板付きとする。
2. 下張りは、機械仕様紙3回以上、上張りは、新築の手程度とし、見本を提出のうえ決定する。押入などの場合には、裏面を雲花紙程度とする。
3. 周囲縁は、中花塗り程度、縁縁は折合、くぎに取り付く。上下縁は、外ねじ締め、引違いの場合は見込み分増し、定規縁は造出し又はいんろうじゅうじゅうりとする。

13.11 フラッシュ戸
1. 上下高さは、見付け25㎜内外のものを5枚はぎ、縁がまちは、4枚はぎとし、すじ切り背中合わせに合成接着する。ただし、吊元及び丁番当たりは、2枚以上を柵又はひぼとし、箱綱当たりは2枚以上増し骨をする。上下高さは、縁がまちにはぞぎ差し接着する。
2. 中骨は、間隔90㎜以内として、かまち及び骨との取合いは、ほぞ差しとする。交差部は相欠き組固めとする。
3. 合板は、接着剤を用いて骨組に圧着し、縁と張り合わせの仕口は、合板の木口を出さぬよう化粧縁を張り付ける。

13.12 建具 金物
1. 建物金具は、JIS規格品とし、JISのないものは、形状及び寸法が正しく、製造が円滑で、表面に欠き、すなどの欠点のない良質のものを用いる。
2. 建具と下記付属物との関係は、13.12-1表及び13.12-2表を標準として、その他の付属金物は、建具に相応する大きさのものを使用する。

### 13.12-1表 丁番

<table>
<thead>
<tr>
<th>建具の種類</th>
<th>丁番の寸法 (㎜)</th>
<th>建具の高さと丁番の枚数</th>
<th>2m以下</th>
<th>2mに当たるもの</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小窓、戸たな類</td>
<td>64～76</td>
<td>2枚</td>
<td>3枚</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>窓</td>
<td>76～89</td>
<td>2枚</td>
<td>3枚</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>出入口</td>
<td>102～152</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 13.12-2表 戸車及びレール

<table>
<thead>
<tr>
<th>建具の種類</th>
<th>戸車の外径</th>
<th>レールの断面 (㎜)</th>
<th>断面の型</th>
<th>径又は幅×高さ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小窓</td>
<td>24</td>
<td>甲丸</td>
<td>5.1×6.1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>窓</td>
<td>30</td>
<td>甲丸</td>
<td>6.4×7.6</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>出入口及び特に大きな窓</td>
<td>36</td>
<td>甲丸</td>
<td>7.6×9.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>角</td>
<td>7.3×7.3</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

13.13 本製 建具
1. かまち及び骨子の仕口は、特記のない限り、接着剤を使用したほぞ接合とし、充分密着するよう工作する。
2. 打抜きは地、割りくさび締めとし、ほぞの枚数は、かまちの見込み厚さ33㎜以上は2枚ほど、33㎜未満は1枚ほどとする。
3. 雨上がりの引戸の召し合わせは、いんろうじゅうりとする。
14. 塗装工事

14.1 般 事 項
14.1.1 塗料 塗料の品質はすべてJISに適合したもの又はこれと同等以上のものとし

特記による。

14.1.2 塗り見本 あらかじめ塗り見本を提出し建築主又は、監督者の承認を受けるとも

に必要に応じて施工面に見本塗りを行う。

14.1.3 下地 こうしらえ 1. 木部の下地（生地）ごしらえは、塗面を傷つけないように注意し、汚

れ、付着物を水拭き等で除去したうえ、やや処理、節どめ、目どめ、バ

テらい、研磨紙ずり等を行う。

2. 鉄部の素地ごしらえは、汚れ、付着物、油類を揮発油拭き等で除去した

後、スプレーー、ワイヤーブラシ、研磨紙ずりなどで磨き落としを行う。

3. せっこうボード素地ごしらえは10.1.1の5（せっこうボード張り）に準

ずる。

4. ラワンなどの多孔質材料は、目止め塗り材料を木穴に圧入して塗り付

け、余分の塗料を取り去り目止め塗りする。

5. コンクリート、モルタル、プラスター面の下地ごしらえは、汚れ、付着

物はシンナー又は、研磨紙などで除去した後、巢穴等は、練ったせっこ

う又はパテで埋め、研磨紙で平滑にする。

6. 塗装にかかるまでに下地を十分乾燥させる。

14.2 工 法
14.2.1 調合ペイント塗り（油性調合ペイント及び合成樹脂調合ペイン

ト） 1. 木部は2回塗り以上とし、色塗りも塗り目で注意して、たまり、流れ

れ、泡等の欠点を生じないように、むらなく刷毛正しく塗り上げる。

2. 鉄部は、刷止め塗料を塗布した後、2回塗りを標準とし、木部に準じて

施工する。

14.2.2 ワニス塗り及びクリヤラッカー塗り 1. ワニス塗り及びクリヤラッカー塗りは、2回塗り以上とし、目止めを必要とす

る材料の場合は目止め塗りをする。

2. 塗り方は、14.2.1（調合ペイント塗り）の項に1.に準ずる。

14.2.3 合成樹脂エマルショント塗り 1. 合成樹脂エマルションペイントは、屋内塗りに用いる。ただし、屋外や

屋外気を発生する場には、耐久性のある室外用合成樹脂エマルションペ

イント、または、アクリル系やウレタン系の塗料を用いる。なお、防カ

ビ塗装を行う場合には、毒性がなく持続性のある塗料を選択する。

2. 塗り方は、14.2.1（調合ペイント塗り）の項の木部塗りに準ずる。

14.2.4 ステイン塗り ステイン塗りは油性ステインを用いて1回塗り以上とし、塗り残しや、

むらないように塗る。

14.2.5 ローラー模様仕

上材塗り 1. セメント系または、合成樹脂系ローラー模様仕上材の塗り付けは、あら

かじめ決定した見本塗りと同様になるよう塗厚に注意してローラーまた

は、ここで塗りつける。

2. ローラーで塗り付け場合は、ローラー模様仕上材塗りとローラー転圧

による形づけを同一工程で行なってよい。

3. ローラー押えは、ローラー模様仕上材が形づけ後、適度のしまりぐあい

になったとき、見本品と同様の模様になるよう行なう。
4. 仕上塗装は、色むら、だれ、光沢むらなどが発生しないように均等に塗付ける。

14.3養生

工事中は、塗装面以外の部分に汚染、損傷を与えないように十分注意し必要に応じて適正な養生を行う。
15. その他の工事

15.1 衛生設備工事

15.1.1 洗面器、手洗器及び大小便器
洗面器、手洗器及び大小便器の品質は原則として優良住宅部品（B.L.部品）又はこれと同等以上のものとし特記する。

15.1.2 便槽そ の他
1. 改良便槽とする場合は次による。
イ. 耐水材料でつくり、排水便管はビニル管又はスポーキャップ管とする。
ロ. 槽内は防水モルタル塗りとし、取付け口ふたは市販鋳鉄製品又はコンクリート製とする。
ハ. 現場打ち、既製品を問わずコンクリート便槽は所定の位置に据え付けて用いる。砂利敷をして十分突き固め平担に据えつけ取付口の外部は裏手左右30cmのコンクリート打ちとする。
2. 無奥便槽とする場合は、各製造所の仕様によることとし特記する。

15.1.3 尿浄化槽
尿浄化槽を設置する場合は建築基準法施行令、関係法令等に合格するものとする。

15.1.4 衛生陶器の付属器具
品質はJIS A5514（衛生陶器付属金具）、大便器洗浄弁はJIS A5521（大便器洗浄弁）に適合するものとし、見えがかりを防ぐにはクロムメキ仕上とする。

15.1.5 器具の取付け
1. 器具をコンクリート床又はコンクリート壁に取付ける場合は、原則としてボアールト又はこれと同等以上のものとする。
2. 器具を木造壁等に取付ける場合は、木工事で施工した堅固な当木に取付ける。
3. 器具排気口周辺と排水金具とのすき間には耐熱性不乾燥シール材を詰め、漏水しないように締め付ける。
4. その他取付けの詳細は、各製造所の仕様による。なお、監督者がいる場合はその指示を受ける。

15.2 雑工事

15.2.1 太陽熱温水器
1. 太陽熱温水器の品質は優良住宅部品（B.L.部品）とし、あらかじめカタログ等を提出して建築主又は監督者と十分打ち合わせのうえ特記する。
2. 取付けは各製造所の仕様によることとし、製造部品開発センターに登録された指定施工店が行うものとする。

15.2.2 キッチンユニット、換気扇、給湯器等
優良住宅部品（B.L.部品）又はこれと同等以上の製品とし、カタログ等を提出して、建築主又は監督者と十分打ち合わせのうえ特記する。

15.2.3 ガス漏れ警報器
ガス事業者の指定による製品とし、監督者がいる場合は、取付けについて指示を受ける。

15.2.4 下方向吹型簡易自動消火装置
新型日本消防設備安全センターの認定を受けたものとする。取付けは各製造所の仕様による。

15.2.5 簡易型火災警報器
日本消防協会の検定品又は鑑定品とする。取付けは各製造所の仕様によることとし、強風に耐えるよう堅固に取付ける。

15.2.6 あがね石
コンクリート製又は軟石性の市販出来品を壁面に堅固に取付ける。

15.2.7 テレビアンテナ支持装置
アンテナ支持装置取付位置は、建築主又は監督者と打合わせをきめるものとし、強風に耐えるよう堅固に取付ける。

15.2.8 雨戸
雨戸はJIS A4603（木製雨戸）の規格品又はこれと同等のものとする。
本仕様書は㈱日本ツーパイフォー建築協会に委託して、同協会内に設けられた住宅金融公庫製造住
宅工事共通仕様書改訂委員会により作成したものです。
短期間に精力的に原案を作成された、下記改訂委員会の委員の方々、事務局をつとめられた㈱日本
ツーパイフォー建築協会、本仕様書の構造的安全性のチェック及び別冊のスパン表の作成について全
面的にご協力をいただいた、新井建築研究所所長新井信吉氏、建築検査の標準化について貴重な示唆
をいただいたホームビルダーコンサルタント新井牧氏、仕様書作成に当たってご協力をいただいた一
色建築設計事務所の方々及び貴重なご意見をいただいた、カナダ、ブリティッシュコロンビア州林産
業審議会（COFI）をはじめ、関係団体並びに業界各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和57年4月

枠組壁工法住宅工事共通仕様書（昭和57年度版）改訂委員会

委員長 今泉 勝吉 工学院大学教授
委 員 有馬 孝穂 静岡大学農学部教授
	a 奥村 俊雄 建設省住宅局住宅生産課専門官
	加藤 晴久 建設省住宅局建築指導課課長補佐
	鈴村 秀世 建設省住宅局住宅建築課課長補佐
	石山 祐二 建設省建築研究所、第一耐震工学研究室長
	山井良三郎 林野庁林業試験場材料利用部長
	大塚 良勝 ㈱日本ツーパイフォー建築協会技術開発部会
	藤井 良隆 同 上
	東島 康夫 住宅金融公庫建設指導部技術開発課長
	星代 耕一 ㈱住宅金融普及協会審査部長

144
住宅金融公庫本・支所・東京住宅センター

<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>住所</th>
<th>電話</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>本所 建設指導部</td>
<td>〒112 東京都文京区後楽1丁目4番10号</td>
<td>(03) (812) 1111（大代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>札幌支所 建設課</td>
<td>〒064 札幌市中央区南4条西8丁目7番1号</td>
<td>(011) (271) 6511（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>仙台支所</td>
<td>〒980 仙台市平和1丁目3番18号</td>
<td>(0222) (27) 9311（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>北関東支所</td>
<td>〒371 前橋市千代田町1丁目8番8号</td>
<td>(0272) (32) 6655〜9</td>
</tr>
<tr>
<td>東京支所</td>
<td>〒112 東京都文京区関口1丁目23番地プラザ江戸川ビル内</td>
<td>(03) (260) 1131（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>南関東支所</td>
<td>〒162 東京都新宿区水道町22番1号水道町ビル内</td>
<td>(03) (260) 9211（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>名古屋支所</td>
<td>〒461 名古屋市西区東山町1丁目16番33号</td>
<td>(052) (935) 7621（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>金沢支所</td>
<td>〒920 金沢市丸の内4番12号金沢中央ビル内</td>
<td>(0762) (63) 3421〜5</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪支所</td>
<td>〒540 大阪市東区豊原町19番1号</td>
<td>(06) (943) 5300（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>広島支所</td>
<td>〒730 広島市中区上八丁場6番76号</td>
<td>(082) (221) 8151〜5</td>
</tr>
<tr>
<td>高松支所</td>
<td>〒760 高松市番町2丁目10番8号</td>
<td>(0878) (21) 7121〜4</td>
</tr>
<tr>
<td>福岡支所</td>
<td>〒810 福岡市中央区天神4丁目1番37号</td>
<td>(092) (712) 5555（代表）</td>
</tr>
<tr>
<td>熊本支所</td>
<td>〒860 熊本市二の丸1番3号</td>
<td>(0963) (24) 2121〜5</td>
</tr>
<tr>
<td>東京住宅センター</td>
<td>〒112 東京都文京区後楽1丁目4番10号</td>
<td>(03) (812) 1111（大代表）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

住宅金融公庫融資住宅

枠組壁工法住宅工事共通仕様書

監修 住宅金融公庫建設指導部

編集・発行 住宅金融普及協会

東京都新宿区水道町22-1（水道町ビル2階）

電話 (260) 7341〜2

印刷 株式会社 第一印刷所 東京支社

東京都台東区松が谷4-20-8

電話 (843) 4266（代表）

1974年制定
1977年改訂
1979年改訂
1981年改訂
1982年改訂
1983年改訂
1984年改訂